

うつせみのあなたに

第10巻

星野廉

目次

はじめに	
はじめに	2
もくじ	4
第1部 09.12.06~09.12.XX	
09.12.06 ヒトいろいろ	10
09.12.07 信号としての石川君	12
09.12.08 コトバとチカラ	15
09.12.09 ごめんなさい	18
09.12.10 政治とは「分ける」こと	21
09.12.11 きな臭い話	24
09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて	28
09.12.09 続・社会復帰はあきらめました	30
09.12.10 ブログと心中?	40
09.12.11 よくないなあ	43
09.12.12 素面でいたい	45
09.12.13 儀式	46
09.12.14 爪を切る	48
09.12.15 わける (1)	51
09.12.16 わける (2)	53
09.12.XX こんなことを書きました (その 18)	56
第2部 09.12.16~10.01.21	
09.12.16 二句	62
09.12.19 ずらす	64
09.12.20 かえるのではなくてかえる	68
09.12.21 とりとめもなく	73
09.12.22 パラレル	79
09.12.23 日本語にないものは日本にない? (1)	83
09.12.24 日本語にないものは日本にない? (2)	89
09.12.25 日本語にないものは日本にない? (3)	96
09.12.26 日本語にないものは日本にない? (4)	106

09.12.27	日本語にないものは日本にない? (5)	114
10.01.12	かえるはかえる	118
10.01.13	かえるにかえる	126
10.01.14	もどるにもどれない	132
10.01.15	け==く	142
10.01.16	まことにまこと	147
10.01.17	まことはまことか (前半)	157
10-01-17	まことはまことか (後半)	163
10.01.18	本物の偽物 (前半)	168
10.01.18	本物の偽物 (後半)	175
10.01.19	からから	181
10.01.20	2010年1月20日にギャグる	189
10.01.21	こんなことを書きました (その19)	196

あとがき

あとがき	206
『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の記事タイトル	207

奥付

奥付	226
----	-----

はじめに

はじめに

本書を第 10 巻とするシリーズは、2008 年 12 月 19 日から 2010 年 3 月 11 日までの間に書いたブログの記事を再録したものです。初めて開設したブログのタイトルは「ネガティブに生きる」で、ハンドルネームは「パリス・テキサス」でした。ヴィム・ヴェンダースが監督した映画、“Paris, Texas”（文字通りには、米国の「テキサス州、パリス市」という意味ですね）から取りました。大好きな映画です。邦題は、なぜか「パリ、テキサス」ですね。

どうして「ネガティブに生きる」なのかと申しますと、うつとの闘いと共存をテーマ、あるいは目的にしていたからです。つまり。「ネガティブに生きる＝頑張らない」ほどの感覚で、名付けました。

私のブログは、当初の日記的な色彩が薄れ、徐々にエッセイや論考に近いものになっていきます。ブログにしては長めの記事をほぼ毎日書いていたので、データとしての全体の量はかなり大きいです。したがって、いくつかに分冊する形で電子書籍化していく予定です。

ブログで長文の記事を投稿していた時期には、パソコンや携帯電話で読まれる文章であることを意識し、読者がモニターや液晶の画面で読みやすくするための工夫をしました。具体的には、各段落を短くし、段落間の改行を頻繁に行うようにしました。また、1 センテンスでの読点をなるべく多くし、中には読点を打つ個所で改行するといった少々乱暴な書き方もしています。

そんなわけで、今回の電子書籍化に当たっては、もとの文章がブログ記事であったことを、できる限り忠実に再現し、上述のような独特のレイアウトをそのまま反映させるように努めました。

*

以下は、過去に開設したブログの記録です。

- * 「ネガティブに生きる」 2008-12-19～2009-02-27
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-01～2009-03-09
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-03-10～2009-03-15
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-26～2009-04-08
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-04-06～2009-04-08
- * 「うつせみのあなたに」 2009-04-17～2009-07-17
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-08-01～2009-08-08
- * 「うつせみのあなたに・・・」 2009-08-11～2009-09-01
- * 「小品集」 2009-09-04～2009-11-14 (ハンドルネームとして「恵」を使ったブログ)
- * 「うつせみのあなたに」 2009-09-04～2009-11-19
- * 「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29
- * 「うつせみのあなたに」 2009-12-01～2009-12-11
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-12-02～2009-12-10
- * 「ヒト観察記」 2009-12-06～2009-12-10
- * 「うつせみついたうつせみのおと」 2009-12-08～2009-12-10
- * 「うつせみのな」 2009-12-12～2009-12-15

* 「うつせみのくら」(それまでに削除したブログ記事のバックアップを再ブログ化したもの)

* 「うつせみのあなたに」 2009-12-16～2010-02-28

* 「うつせみのうわごと」 2010-03-04～2010-03-11

ブログを作り、壊し、またもや、作り、壊し、の繰り返しです。お恥ずかしい限りです。とはいえ、以上の記事のバックアップは、ちゃんとすべて保存されています。実は、言霊が怖いのです。文章を捨てられない、消せない、つまり削除できないのです。冗談ではなく――。

このシリーズのタイトル、また現在もあるブログのタイトル「うつせみのあなたに」は、いろいろな意味に取れます。その意味の多重性については、本書で何回か触れています。そのため、意味の複数の解釈は保留にしておきますので、どうか想像してみてください。大きめの辞書で「うつせみ」と「あなた」を引いてみると、何通りかの意味に取れることが、お分かりになると思います。

本書は、『うつせみのあなたに』の第10巻です。このシリーズ全体に共通するのは、「代理の仕組み」、つまり「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる」という仕組みです。これをテーマに、さまざまな例を挙げたり、多種多様な素材を使いながら、話を展開していきます。

本書の読み方として、まず記事を読み解説は後回しにする方法以外に、第1部の最終記事「09.12.XX こんなことを書きました(その18)」、そして第2部の最終記事「10.01.21 こんなことを書きました(その19)」に収録されている各記事の解説に目をお通しになった後に、それぞれの記事をお読みになるのも、よろしいかと思います。

もくじ

はじめに

もくじ

第1部

09.12.06 ヒトいろいろ

09.12.07 信号としての石川君

09.12.08 コトバとチカラ

09.12.09 ごめんなさい

09.12.10 政治とは「分ける」こと

09.12.11 きな臭い話

09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて

09.12.09 続・社会復帰はあきらめました

09.12.10 ブログと心中？

09.12.11 よくないなあ

09.12.12 素面でいたい

09.12.13 儀式

09.12.14 爪を切る

09.12.15 わける (1)

09.12.16 わける (2)

09.12.XX こんなことを書きました (その18)

第2部

09.12.16 二句

09.12.19 ずらす

09.12.20 かえるのではなくてかえる

09.12.21 とりとめもなく

09.12.22 パラレル

09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）

09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）

09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（4）

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（5）

10.01.12 かえるはかえる

10.01.13 かえるにかえる

10.01.14 もどるにもどれない

10.01.15 け＝く

10.01.16 まことにまこと

10.01.17 まことはまことか（前半）

10.01.17 まことはまことか（後半）

10.01.18 本物の偽物（前半）

10.01.18 本物の偽物（後半）

10.01.19 からから

10.01.20 2010 年 1 月 20 日にギャグる

10.01.21 こんなことを書きました（その 19）

あとがき

『うつせみのあなたに第 1 巻～第 1 1 巻』の各記事タイトル

第 1 部 09.12.06～09.12.XX

09.12.06 ヒトいろいろ

【※以下は、ブログタイトル「ヒト観察記」2009-12-06～2009-12-10 に掲載した記事です。このブログも、途中でうつのだん底に見舞われ、削除・閉鎖しました。】

◆ヒトいろいろ

2009-12-06 14:11:52 | 観察記

【注：2009年の12月上旬の時事を思い出しながらお読みください。】

・きょうのキーワードは、「表象」「メッセージ」「脳ブーム」「所有欲」「縄張り行動」「マーキング行動」「性差」「発情期」「闘争本能」です。

*このところ、やたら肩が凝るので、ドクターに筋弛緩剤を処方してもらいました。で、飲んでいるのですが、やたらおならが出るようになりました。というか、我慢しにくくなりました。

*きょう、スーパーで、いやにめかし込んだ中年の女性を見かけました。美容院に行った後なのか、見事な髪型をしていました。大安だから、どこかにお呼ばれするのだろうかと思いました。「あのカブトガニみたいな髪型は、何て言ってやってもらうのかな？」と、そばにいた知り合いのおばさんに聞くと、「『カブトガニみたいにお願いします』っていうんじゃない」と、あっさりと言われました。で、あっさりとな得しました。

*きのう、テレビのニュースを見ていたら、石川遼君の帽子のかぶり方が変わりました。あれはどういう意味＝メッセージなのだろう、と考えてしまいました。(1) スポンサーがらみ、(2) 反抗期、(3) お色気づいた、(4) (3) と似てますがおしゃれのつもり、

(5) 何かのおまじない。なんで、なんででしょうね。事情通の方なら、もうとっくに、理由をご存知なんだろうが、気になりました。

*石川君と言えば、このあいだテレビで、最近お尻がぎゅっと締まってきたと言って、ファンのおばさんたちが騒いでいる様子が映し出されていました。やっぱり、ヒトそれぞれ。見るところが違うんですね。それ以来、こっちまで気になるようになりました。

*「テレビを見ちゃダメだ」という意味の本の広告が、けさの新聞に載っていました。著者が変わった苗字のヒトで、変わった顔のヒトなので、注目しています。本屋さんで、そのヒトの本を何冊か立ち読みしましたが、すごく当たり前のことをうさん臭く説明する才能に恵まれているヒトだと感じました。心が洗われる、いや脳が洗われるような思いがしました。「読んじゃダメだ」と思いました。

*上で述べたヒトで思い出しましたが、不況にあえぐ出版界に貢献している、同じく脳関係の職人さんを思い出しました。先月、4億円の申告漏れを東京国税局から指摘されたとか。やっぱり、ヒトは言うこととやることが違う。いい勉強をさせてもらいました。脳に悪いことばっかしやろう、と決意した次第です。

*出版界のドル箱と言えば、かつよちゃんとリカちゃんのバトルが静かに続いていますね。かつよちゃんは、出てきたころから苦手でした。怖いんです。ドスが利いていませんか？言うことがハツタリぼくありません？抜け目がない感じです。リカちゃんも苦手です。でも、このリカちゃんは、かつよちゃんほど上から目線を感じないので、悪態はつきたくありません。今のところは、「リカちゃん、頑張れ！」って心境です。

*上から目線と言えば、ちょっと前の話ですが、ノーベル賞をもらったヒトたちをボスが集めて、事業仕分けをめぐって「お金ちょうだい」と上から目線でおねだりしたニュースを見聞きしました。あれは、ノーベル賞という虎の威＝表象を借りなきゃできない芸当です。高度1万2千メートルくらいファーストクラスの座席から、ノーベル賞受賞者以外の全国民を見下さなければできない顔芸だと感じました。ノーベル症候群＝ノーベル賞行軍って感じでしょうか。以上の悪態は、何目線からついているんでしょね？せいぜい高度165センチメートルほど目線だと思われます。

*ノーベル症候群に習って、今度は、五輪のメダリストたちが、各競技の協会のボスたちからせつつかれて、金屏風を背景に同様の会見をしたのには、あきれました。「お金ちょ

うだい」＝「金（かね）よこさないと、金（きん）獲ってやんないぞ」＝「筋（きん）トレ、さぼるぞ」って。あれって、卑怯です。あんな派手なパフォーマンスができない目線のヒトたちが圧倒的多数なのに……。賞にしろ、メダルにしろ、金よこせの道具に使われたんじゃ、庶民の立つ瀬がないじゃないですか～。これって、嫉妬？ やっぱし、そうお思いになりますか。納得。

*五輪と言えば、フィギュアスケートの大会があると、結果の報道で男子が「さしみのつま」的状态になるのは、なぜ？ 差別です。もちろん、男性による女性に対する差別です。あの報道の仕方は、女性をたたえているのじゃありません。生き物の中ではめずらしく年中発情しているヒトにおいては、オスが圧倒的に優位に立っています。年がら年中発情しているのは、オスもメスも変わらないようですが、メディアは明らかにオスのために奉仕しています。はあ、はあ、なんて感じで。つまり、オスから目線です。だまされないようにしましょう。これって、偏見？ そうスカ。納得。

*五輪つまり、オリンピックは4年ごとに行われる世界代理戦争だ、という考え方があるそうです。いわば、五輪＝ガス抜き説ですね。スポーツがヒトの闘争本能に基づいているのは確かだと思われます。話は変わって、へそ曲がりとか、偏屈者っていますよね。ここにも一匹いますけど。スポーツの国際大会なんか見ていると、つい相手国側を応援してしまうんですね。あるヒトに、このことを話したら、実は自分もそうすることがあるなんて告白されました。あなたは、どうですか？

09.12.07 信号としての石川君

◆信号としての石川君

2009-12-07 16:30:17 | 観察記

【注：2009年12月上旬の時事を思い出しながらお読みください。】

・きょうは、石川遼君特集です。キーワードは、「信号」「メッセージ」「視線」「まなざし」

「ブリオ」「コーチング」「自己啓発」「イチロー」です。

*石川遼君に注目している方は、多いと思います。今季の日本ツアー最年少賞金王となり、ますますその注目度は増すことでしょう。当ブログでは、1人のプロゴルファーとしての成長のみならず、1つの「現象」として興味深いと考えています。

*当然のことながら、石川選手はさまざまな視線＝「まなざし」にさらされてもいます。もちろん、遼君自身、その視線＝「まなざし」を意識してもあります。ファン、そして世間の「まなざし」です。一方で、石川遼君が、ファン、そして世間に「まなざし」向けているのも事実です。

*「まなざし」は、それだけに留まりません。ゴルファーとしての石川君が、試合中に見せる、ゴルフ場の地形、天候、風、空気、場の雰囲気への「まなざし」。他の選手たちと交わす「まなざし」。石川君をサポートするスタッフと交わす「まなざし」。石川遼という人間の内部にあるであろう、自己と交わす「まなざし」。そうした多種多様な「まなざし」が呼応し合っている。そんなふうに見えます。「まなざし」に取り囲まれた18歳の少年。それを、このブログでは「現象」と呼んでみたいと思います。

*石川遼君がプレー中の映像にも関心はありますが、それ以上に、インタビューのさいの表情や発言の内容にとっても興味を引かれます。あの表情と発言は、まさに「信号」ではないでしょうか。さまざまなメッセージをはらんだ「信号」。正確に言えば、さまざまなメッセージとイメージを人にいだかせる「信号」です。

*遼君が話している映像を見ていると、わくわくしませんか？ 比喩的に言うなら、あれは、期待する側と期待に応じる側との「視線」が火花を飛ばし合っている場＝空間です。だから、わくわくするのは。石川遼選手の試合後の会見を思い浮かべてください。何でも、プラスにとる。前向き。ポジティブ思考。自分に言い聞かせる。同時に、発言を聞いてくれる人たちを巻き込むパワー。あのパワーがメッセージの正体でしょう。その媒体＝仲介役が「信号」なのです。

*みなさんは石川遼君を実際にご覧になったことがありますか？ YESとお答えになる方は、それほど多くないと思われます。では、なぜ知っているのか？ テレビを見て知っているのです。そうです。生身の石川君は、多くの人々にとっては、「信号」つまり「映像+音声」なのです（「記号」とか「表象」という言葉もありますが、このブログでは「信

号」を使います)。

*「信号」という考え方では、「信号」の発信者と受信者との間の心理合戦が、きわめて重要な意味を持ちます。言い換えると、「信号」においては、発信側と受信側との間で「メッセージ」がキャッチボールのようにやり取りされます。双方が相手に対し、何らかの行動を働きかけようと促し誘導するのです。だから、石川君という「信号」をテレビで見て、「元気」をもらい、実際に元気になる人がいるし、「生きがい」をもらって、実際に生き生きとした日々を送る人もいます。

*フランス人が有名人について語るさいに、ブリオ (brio) という言葉をよく使うと聞きました。もともとはイタリア語だったようです。人を惹きつける活気や輝き——という感じの言葉です。石川君は、今の日本でブリオを持っている数少ない人のひとりだと言えそうです。

*去年の4月ころですが、ある新聞が目玉にしているコラムに、「どうしたらあのようないい子が育つのだろう」みたいな手放しの褒め言葉が書かれていて、思わず苦笑してしまいました。石川君のプラス思考とポジティブな発言に触れてのことです。なぜ、苦笑したのかと申しますと、なんてナイーブなコラムニストなのだろう、と感じたからです。単に、読者のレベルに合わせて迎合しているだけなのかもしれませんが、それにしてもナイーブすぎます。

*プロのスポーツ選手、とりわけ抜群の実力と人気があり、CMや取材を含め、メディアにその映像や音声を「露出」させることで、莫大な収入を得ている商品価値の高い選手には、大勢のスタッフがついています。対象となるスポーツ自体のトレーナーをはじめ、健康管理、メディア対策の専門家はもちろん、こころの管理をするプロフェッショナルが付き添っています。タレントの付き人さんみたいに、常に付き添っているという意味ではなく、エージェント、コンサルタント、コーチといった名称をもち、有料で、面談・電話・メールといったかたちで相談に応じたり、サポートを行っているのです。

*話は少し変わりますが、書店では、自己啓発書専用のコーナーがあり、さまざまな「流派」のスペシャリストたちによる本であふれています。現在の大不況は出版界にも及んでいますが、自己啓発書や思考・発想法関連の書籍の売れ行きはなかなか好調のようです。「自分を変えたい」、「ポジティブな思考ができるようになりたい」、「いいアイデアが浮かぶスキルやツールを身につけたい」などと望む人たちが、いかに多いかを示している現象と言えるでしょう。

*さて、石川選手ですが、テレビでその発言を聞いていると、自己啓発書に書かれている雛形（流派の違いはあっても、ほとんど同じようなことが書かれていますね）とそっくりなことを口にしてているのです。表面上の言葉遣いがそっくりであるだけでなく、その言葉の根底にある思考のパターンもまたそっくりなのです。ただ1つすごいと思うのは、その雛形を口にするだけでなく、然るべき「結果を出している」ことです。だから、テレビでそのインタビューを見ている人たちが、画面に釘付けになり、催眠術にかかったようにうっとりとしてしまうのです。

*こんなことを書いている者も、その1人です。石川選手がテレビに出てきて話しているのを聞いていると、思わず聞きほれてしまいます。「さすがー、超プラス思考」。「すごいなあ」。「あの本で書いてあったことと、そっくりの言動をしている「成功例」が、今、目の前の画面に映ってしゃべっているじゃん」。「やっぱり、夢は実現するのだ」。「何ごとにもポジティブに向きあえば、きっといいことが起きるのだ」。「若いのに、なかなかしっかりしたことを言うね」――。同じ画面を見ている人たちの発する、そんな声が聞こえてくるようです。言動がポジティブなのは、当然です。そういう訓練（コーチング）を受けているのですからです。たぶん、ですけど。実際には、どうなのかは知りません。超一流のスポーツ選手についての常識を述べただけです。

*対照的なのは、イチローでしょうか。イチロー語録も、自己啓発書に似ていますが、我流という印象が強いです。いい意味での毒気があります。イチロー選手がメンタルな意味でのコーチングを受けているような感じはしないのですが、実際はどのようなのでしょうか？ 個人的には、石川君が自己啓発書的というか優等生的なポジ発言を卒業して、イチロー的ワシ流発言をかますように育ってくれることを願っています。

09.12.08 コトバとチカラ

◆コトバとチカラ

2009-12-08 18:58:13 | 観察記

【注：2009年12月上旬の世相や時事を思い出しながら、お読みください。】

・きょうのテーマは、ヒトの言語行動です。広いテーマですから、言語による攻撃的を絞り、そのうちでも「もっともらしい悪態のつきかた」を考察してみます。資料として、事業仕分けの後に、現在反撃に出ているさまざまなヒトやヒトの集団の行動を、言語という視点から見てみましょう。

*何と言っても、馬鹿らしく上から目線丸出しだったのは、例のノーベル賞受賞者を集めたボスの会見での言葉です。「やい、おまえら、歴史の法廷に立つ覚悟があるのか」でしたっけ？ 正確には覚えていませんけど、そんな感じでした。何と身勝手なレトリック＝プレゼンでしょう。

*ボス以外の科学者たちの迷惑そうな、嫌々出てきました的表情が印象的でした。

*あれには、マスコミの報道も最初は及び腰でしたが、さすが庶民の常識とはかけ離れた発言への非難も多く、マスコミにも若干批判的な論調が見られるようになりました。あのボスは、科学者である以上に、政治家であり、実業家ですから、余計反発を食らったようです（科学者として以外の経歴についてはウィキペディアあたりでお調べください）。

*そういえば、スウェーデンのノーベル財団が、今後ノーベル賞の賞金を減額する可能性があると発表したらしいですね。上記のボスは、ノーベル財団にも、「やい、おまえら、歴史の法廷に立つ覚悟があるのか」と抗議をしに北歐に旅立つのでしょうか？ ファーストクラスの座席はもう予約済みでしょうか？

*いずれにせよ、あのもっともらしい悪態をよく覚えておき、さまざまな悪態や罵倒をする機会に応用しましょう。でも、笑われますよ。響感を買いますよ。まさか、どこかの広告代理店のコピーライターが鼻くそをほじりながら、考えたフレーズじゃないでしょうね。

*オリンピックのメダリストの二番煎じ的、金屏風を背にしたハロウィン式「トリック・オア・トリート」＝「金（かね）くれ、さもなきや金（きん）獲らねーぞ」的悪態会見

も、おそまつでした。各競技の団体の幹部やボスたちから、「出ろ出ろ」と言われたに違いありません。

*ノーベル症のボスよりは、体力的に勝るだけあって、プレゼンとしては見苦しくはありませんでしたが、情けない。間違っても、金を獲れなかった時の、言い訳にしないことを祈ります。頑張れ、ニッポン。選手のみなさん、CMとテレビ出演で稼いで、資金を募ろう。

*スポーツマンシップにのっとり、自腹を切ろうぜ。

*えっつ？ それとも、協会がギャラをピンはねしてるとか？ そんな仕組み、あり得るからこわいわ～。役員だの、委員だの、会長だの、回虫だの、いろいろいるみたい。そうか！ そういうヒトたちの給料に無駄使いが多いのか。納得。

*てことは、会見に臨んだ選手たちは、客寄せならぬ、金寄せパンダかいな！？

*きょうのニュースを見ていたら、またまたもっともらしい悪態＝罵倒が出ました。今度は音楽家の世界からです。著名な作曲家、指揮者、演奏家による「金くれ」のプレゼンです。「長期的視点もなく、目先の節約を優先させた非常識」というフレーズが飛び出しました。芸のないコピーですね。

*迫力なさすぎ＝何も言っていないに等しい＝お手本にもならない。

*以上は、メジャーな例ばかりですが、新聞を読むと、たくさんの「金くれ」が、さまざまな美辞麗句や、もっともらしい正論ぽい文句で飾ったフレーズとして、掲載されています。恫喝＝脅迫もあります。

*目に付くのは、「国家の存亡にの危機」とか、はたまた「人類の存亡の危機」というフレーズ。時代がががっているし、大げさすぎて、聞いているほうは、「はあ？」とか「ん？」とか、きょとん、という感じではないでしょうか。

*ところで、良い子のみなさん、お小遣いを減らされそうになったら、どういうセリフを言えば、親がビビるか、新聞なんか読んで、よくお勉強しておきましょう。

*「お小遣い減らしたら、ぐれてやる。あばれまくってやる。とうちゃんも、かあちゃんも、巻き込んでやる。あんたら、法廷に立つ覚悟があんのか？」なんて言って、ノール症候群的脅迫に感染したら駄目ですよ。

*「新しいゲームソフトを買ってくれないなんて、長期的視点もなく、目先の節約を優先させた非常識だ」。これも、説得力ないよ。

*とにかく、事業仕分けというショーは大成功だったと思います。これまでは、ああいふヒトの行動が密室で、庶民の目につかない形で行われてきたのです。

*れんほうさんの、どこが「きつい」のでしょうかね。粛々と仕事をしていただけなのに。それより、あの時にたじたじになっていた相手側が、いつもは自分たちのなわぼりで威張りくさっているさまを想像すると、溜飲が下がりました。

*「きつい」という悪態は、主に男性の口から出てきた気がします。男の嫉妬というやつでしょうか？ いやだなあ。

*政権交代は政権後退ではなかったのかも。後退でなくて前進だったのかも。でも、政権前身にはもどってほしくありません。いつまで続くか分かりませんが、とりあえず、当分のあいだは下克上気分を味わいましょう。

09.12.09 ごめんなさい

◆ごめんなさい

2009-12-09 17:23:32 | 観察記

【注：2009年の12月上旬の世相を思い出しながら、お読みください。】

・きょうは、「ファンの方々ごめんなさいデー」です。なんでテレビに出ているのかが分からないヒトたちを、独断と偏見で取り上げました。なお、当方は難聴者なので、歌手の方の歌に関しては評価でないことを、あらかじめお断りしておきます。

*このところ毎日、朝刊のどこかに福○雅○さんの写真が出ています。テレビのCMでもよく見かけます。今年の紅白にも出場します。イケメンなんでしょうけど。露出度とイケメン度がずれているような気がしてなりません。安全パイ性というか、人畜無害な点が好まれているのかなと、ひとりで納得しています。ファンの方々、ごめんなさい。

*あっ、思い出しました。だいぶ前のことですが、「Let's 豪徳寺」という映画をテレビで放映していました。それに○山雅○さんがちょい役で出ていたのです。パチンコ屋でちょっとしたセリフを言っていた場面が印象に残っています。デビューしたてのころだと思われま。ちょうど「あれ福○だ！」と言うヒトがいて、クレジットで確かめていました。ぱっとしない感じの俳優さんでしたよ。ファンの方々、ごめんなさい。

*ヒトって本質的にマゾの傾向があるのかと思わせるタレントの代表格が、島○紳○さんです。他の出演者たちをすごくいじめませんか？ まわりの人たちが気を遣っている様子がうかがわれて、○田○助さんの出ている番組を見ているとかわいそうになってきます。サンデープロジェクトの司会をしていたのも不思議でしたが、あれは解決しました。まだ解決していない不思議な番組がたくさんあります。ファンの方々、ごめんなさい。

*やっぱり、ヒトって本質的にマゾの傾向があるのかと思わせる女性タレントの代表格が、和○ア○子さんです。タレントというか、もともとは歌手なんですよ。○田さんが歌がうまいという人がいて、びっくりしたことがあります。和○さんの声は低めでドスが利いているので、比較的聞き取りやすいほうです。よく紅白のトリをお務めになるのも、謎です。ランダムに出演者が出ていて、最後に来ていきなり、あいうえお順ということで理解しています。ファンの方々、ごめんなさい。

*なぜテレビに出てくるのかが、長い間信じられなかったのが○AC○Tさんです。出て来る時と、見かけない時の波がありますね。今は、そこそこ出ている気がします。あ

のヒトは何が売りなのですか？ 本当に分からないのです。Mステで、かったるそうにしてひな壇に座っているのを見ると、テレビを消します。きっと、ああいうところがいいと思う人たちが支持なさっているのでしょう。ファンの方々、ごめんなさい。

*明○家さ○まさんが、番組の中でひっくり返るのは、どうしてなんですか？ 何がおかしいのでしょうか？ あれが売りなのですか？ あの人の出て来る番組って、おもしろいですか？ 頭を使う必要がないのが最大のメリットなのかもしれない。そんなふうに自分に言い聞かせて、世間とのズレを調整しています。ファンの方々、ごめんなさい。

*み○もん○さんも、なぜ、テレビに出ているのかが、納得できないヒトのひとりです。これは、数少ない知り合いのほぼ全員の方が、同意してくれました。ファンの方々、ごめんなさい。

*○のも○たさんと、かぶる感じで、なぜ、テレビに出ているのかが、納得できないヒトが、坂○英○さんです。これの方についても、数少ない知り合いのほぼ全員の方が、同意してくれました。テレビで堂々とセクハラ行為をなさっていませんか？「あの人、何だか痴漢みたい」とおっしゃっていた女性もいました。ファンの方々、ごめんなさい。

*昔から、テレビに出ているのが不思議だと思っているヒトがいます。藤○俊○さんです。○村さんって、独特のキャラクターをお持ちの方だということは分かりますが、どこかしっくり来ないのです。○ひょい、なんて呼ばれていますよね。芸能界での世渡りが、うまそうな感じもしないでもないです。とにかく、テレビに出ていらっやいます。なんで？ ファンの方々、ごめんなさい。

*極めつきは、ユース○・サン○マリ○さんです。第一、名前の文字数が多くてスペースを取りすぎます。あのヒトがテレビに主役および準主役で出演なさる時には、新聞のテレビ欄の各局に割り与えられた枠の一行を丸々使うんですよ～。あれって、うざくないですか？ ほかの俳優さんに迷惑じゃないですか？ 演技うまいのですか？ キャラと呼べるものをお持ちなんですか？ 性格やマナーも悪そうだし……。疑念を表明するというより、何だか悪態になってしまいました。いずれにせよ、ファンの方々、ごめんなさい。

09.12.10 政治とは「分ける」こと

◆政治とは「分ける」こと

2009-12-10 19:07:49 | 観察記

【注；2009年の12月上旬の時事と世相を思い出しながら、お読みください。】

・きょうは、政治というヒトの行動について思うところを書きます。キーワードは、「群れ」「ボス」「上下関係」「代わり」「わける」「切る」です。

*「群れ」と「群れる」。これが、政治の基本です。政党政治が基本となっているからです。party という単語を、英和辞典で引くと載っていますが、「政党」は party です。

* party には、そのほか、「宴会＝パーティー」、「(登山なんかの)一行、一隊＝パーティー」、「(軍隊の)部隊」、「(法的な意味での)当事者・関係者」という意味がありますね。

*とにかく、「群れ」のことです。「群れ」には「上下関係」が付き物です。「上下関係」にこだわる動物は、多いですね。イヌ科の動物たちや、おサルさんたちについてはよく知られています。

*ただ、おサルさんの場合、ニホンザルの場合だったか、詳しいことは覚えていないのですが、ヒトに飼われている、動物園やサル山のおサルさんたちに、上下関係が見られて、野生のおサルさんには上下関係は必ずしもない。そんな話を何かで読んだ記憶があります。間違っていたら、ごめんなさい。

*「群れ」には「ボス」と「上下関係」が不可欠です。苦手です。個人的には、群れるこ

とを避けまくって生きてきました。

*ところで、現政権ですが、個人的には、民主党と自民党の連立政権だと思っています。現実問題として、そうなっている気がします。カメさんとフジさんが内閣の要所を占めています。経歴から見て、自民党の方だと思わざるを得ません。

*話が違うじゃない。そんな感じがします。政権交代って、本当に起こったのかしらん。

*きのうだったか、カメとカンが大喧嘩をしたとか。それをマスコミが、「子どもの喧嘩みたいだ」とか、「幼稚園児のけんかみたいだ」とか、言っているのを見聞きしました。子どもと幼稚園児に失礼です。マスコミは、あの失言を謝罪すべきです。

*子どもや幼稚園児は、あんなオトナっぽい喧嘩はしません。

*ところで内閣が「ぶれる」時には、批判されます。個人的には、「ぶれる」ことって、とってもいいことだと思います。

*ぶれまくって、最後に「ボス＝リーダー」が決める。それでいいのではないのでしょうか。途中で、どんなにぶれても、一枚岩のような独裁的政権よりましだと思うんですけど。

*その意味では、現政権のぶれ具合は、見ていて心地いいです。

*話を戻しますが、party の親戚で part という単語がありますね。英和辞典には、「部分・一部・部品・パーツ・局部・パート・分担・役目・役割・役・約数・分ける・切る・切断する・分かれる・割れる・裂ける・別れる」などの意味が載っています。

*要するに、政治とは「分ける」「切る」というイメージですね。

*事業仕分けがいい例です。象徴的です。

*分ける。分け前にあずかる。分け前にあずかることができないヒトたちもいる。

*切る。切れば血が出る。喧嘩して別れる。

*権限を委譲する＝分ける。分けてもらったヒトを役人という。役には役得がある。

*議会はパートタイム制。タイムカードなしだから、欠席しても、給料は削られない。

*裁判所のひな壇の上にいるヒトたちは、ヒトを切る＝さばく。kill こともできる。間違えて切る＝kill こともある。

*何だか、すごくイージーになっています。悪いのは誰？ ああいうヒトたちを選び、仕事を分け与えた国民だと思います。

*学校で習った基本事項のおさらいをしましょう。現在の主要な国家では三権分立の形をとっているところが多いです。立法・司法・行政の3つに分けるという仕組みですね。

*大切なことは、立法・司法・行政に携わるヒトは、本来は、公務員＝公僕＝代表＝「みんなの代わり」という点です。それが、そうじゃなくなっています。

*たとえば、車に目を向けて見ましょう。特に、上のほうのヒトたちは黒塗りの高級車で役所に出勤し家や官舎に帰っています。

*あれは、軽自動車であっていいと思います。いや、そうであるべきです。万事がそういう感じです。国民が仕事を分けてやって、委託されたヒトが、いつの間にか、偉くなってしまっているのです。

*いちばんの失敗は、国民が公務員に「切る＝kill」力を与えてしまったこと。抽象的な意味でも切ります。具体的な意味でも切ります。困ったところか、恐ろしい事態になっているのに、気が付かない。あるいは、気が付かない振りをする。

*業務を委託された代行屋さんが、主役になってしまっている。この事態に、庶民は腹を立てるべきなのに、へいこらしてしまっている。だめだ、こりゃ。

09.12.11 きな臭い話

◆きな臭い話

【2009-12-11 に書いたブログ不投稿（＝不登校）記事】

【注：2009年の12月上旬の時事と世相を思い出しながら、お読みください。】

*「怖いものは何か」と尋ねられたら、みなさんはどうお答えになりますか？

*自分の場合には、「ファシズム＝全体主義」と答えます。

*「ファシズム＝全体主義」と言えば、恫喝、嫌がらせ、強制、拘束、拉致、束縛、暴力、拷問、監視、殺害、虐殺、粛清、処刑などという恐ろしい言葉が頭に浮かびます。

*テレビのニュースや新聞によく出て来る言葉ばかりです。でも、世界のどこかでの出来事という感じがしませんか？

*「ファシズム＝全体主義」とは、支配体制の一種です。程度の差はあれ、どの国でも、

そうした要素があります。ただ、重度の事態に陥っている国は、案外多いです。

* 差しさわりがありそうなので、具体的な固有名詞は出しません。でも、テレビのニュースを見たり、新聞を読むさいに、ちょっと意識的にすれば、どの国や地域が、「ファシズム＝全体主義」の度合いが高いか、すぐに分かるでしょう。

* 「ファシズム＝全体主義」で、大きな役割を果たすものを考えてみましょう。

* 具体的には、軍隊（民兵や親衛隊も含みます）、治安組織（警察や憲兵です）、情報組織（公安や秘密警察やスパイ組織です）、裁判所、検察などが考えられます。

* 現在、この国では、上記のうちの＝（※「＝」（この記号は「下駄」とも呼びます）については、グーグルで“伏せ字”と“＝”をダブルで検索ください）が不穏な動きを示しています。

* 政権交代以前には、国＝捜＝という言葉をよく見聞きしました。

* 今は、「狙＝撃＝捜＝」、あるいは「意図＝捜＝」、もしくは「＝＝庁の保身のための威嚇的＝＝」とでもいうべき事態が起こっています。

* つまり、現政権の上層部を意図的に＝＝部が捜査対象としていることです。

* なぜ、あのヒトたちをこの時期に？ 意図的、狙い撃ち、以外に形容する言葉がありますか？

* どうしてなのでしょう？ 現在も行われている＝金隠し、あるいは過去の裏＝発覚隠し。トップによそのヒトを据えられるのを阻止する。取り調べのプロセスの透明化を妨害する。そういった＝益を守ることだけが目的なののでしょうか？

* それとも、どこかにつながっていて陰謀を企んでいたり、あるいは、利害の一致して

いる集団と手打ちをしている。そんな感じなのでしょうか？

*直感と勘と出まかせでは、外国人（※言うまでもなく東南アジアのヒトたちです）および中国あたりを恐れているヒトたちや集団と関係あるような感じがします。米国にとってのイスラームという感じでしょうか。

*こういう、きな臭くて生臭い話は苦手なので知りません。妄想して、ビビるだけです。ああ、妄想よ、妄想であってくれ。

*それにしても、この問題について、マスコミは真っ向から指摘したり、取材したりしません。==という組織が、恐ろしいからです。

*意図的に、ある特定の個人を拘束できる権限を持った組織は、==だけです。裁==所は、「事実上」（※括弧つきです）==の下に位置しています。==官は裁==官を逮捕すらできるのですから。もっとも、=判官に対する起訴は、国会議員（※いちおう国民の代表=代理ということになっています。いずれにせよ、この部分も意味深ですね）から選ばれる「裁判官訴追委員」というヒトたちの仕事らしいです。詳しいことは知りませんので、ご興味のある方は、お調べになってください。

*ほかの国でも、元あるいは現役の大統領や国家のトップが==によって起訴され、裁判にかけられることが頻発していますね。民主主義が成熟すると、軍隊や情報組織や裁判所よりも==のほうが最終的な権力を握ります。

*ある意味では、いいことなのかもしれませんが、現在のこの国の==のやっている意図==査は、あまりにも露骨過ぎて姑息な印象を与えます。これでは国民の不信を買います。

*そういえば、軍隊に相当する==隊でも、以前に、陸海空のうちのある組織のトップに、日本国憲法を公然と批判していた人物がいることが発覚しました。

*そのヒトは、現在は==翼のポープで大活躍。講演活動でかなりの額の所得を得ています。落ち着くべきところに落ち着いたという感じでしょうか。

*今のところ==隊については、「ファシズム=全体主義」のきっかけとなる恐れはないもようです。

*この国の「ファシズム=全体主義」度を引き上げる恐れはあるとすれば、それは==庁であると考えられます。

*なぜ、==の意図的==がまかり通り、標的である国民の代表である国会議員はもちろん、マスコミも、国民も、沈黙しているのに等しい状況にあるのでしょうか。

*なぜ、このブログを書いているアホは「=」などをつかって、おしっこを漏らしそうなりながらビビりまくっているのでしょうか。

*誠に遺憾に存じます。

*あと、怖いのは、極==治屋が==都の governor になっていることでしょうか。現時点の governor の名をローマ字に変え、“○○”とし、“far-right”、“extreme-right”、“ultra-right”、“right wing”のうちどれか1つとダブルで、グーグルで検索なさってください。ヒットしますよ。日本語でも、名前と“極=”で検索すると相当数のヒットはありますが、マスメディア系のデータはまず見当たりません。

*この国のマスコミの報道が、=勢力に対してどのようなスタンスをとっているかがお分かりになると思います。やっぱり、マスコミも怖いのです。及び腰なのです。

*いずれにせよ、五=誘致を図っても、あのヒトの世界的な評判では無理だということ？ ああ、レットテルは怖い。湯水のようにつかった税金がもったいない。

*説明を求められると「知らねーよー」で逃げを打ち、記者に向かっては「君、勉強不足だ」とお門違いな言葉で逆切れし、頼んでもないのに「この国を憂う」なんて身の程知らずな発言をする。それでいて、選挙前には猫かぶり芝居をする。マスコミでの露出度も、なぜか高まる。こんなヒトを東==の governor に選んだのは、誰？

*ひょっとして国民は「ファシズム＝全体主義」を求めているのかも。きっとそうです。いやだな。みんなが、あんなのを望んでいるとしたら……。このブログを書いているアホは先が短いからいいけど、この国の子どもたちがかわいそうです。

*現在、左はそれほど怖くないもようです。何と言っても過剰に怖いのは、＝です。保守系政党による長期政権のツケが回ってきたのでしょうか。

*＝はネットでも、大きな勢力をもっています。「かなり暇＝いろいろなことをする時間がある」みたいですが、どこからお金が出ているのでしょうか。ああ、きな臭い。

*誠に遺憾に存じます。

*なお、「ファシズム＝全体主義」については、「なぜ、ケータイが」2009-01-22、「おいしくない社会」2009-02-23、「あきらめない」2009-02-24、「最後のとりでを守る」2009-02-25、「やっぱり CHANGE なのだ」2009-02-26、「イエス・アイ・キャン」2009-02-27、「あなたなら、どうしますか？」2009-10-27、「やっぱり、ハンコはえらい（続・「あなたなら、どうしますか？」）」2009-10-28 で触れています。ご興味のある方は、ぜひお読みください。

09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて

※以下は、ブログタイトル「うつせみついたうつせみのおと」2009-12-08～2009-12-11 に掲載した記事です。このブログも、途中でうつのだん底に見舞われ、削除・閉鎖しました。この時期には、自暴自棄になり、並行して4つのブログを書いていました。

◆ブログ廃人と呼ばれて

2009-12-08 16:24:29 | 日記

* ブログを作ってや壊し、また性懲りもなく作る。「うつせみのうつお」(※当ブログの左のブックマークにリンクがあります)をスクロールしていて、そんなことを繰り返している自分に気づき、はっとしました。【注:「うつせみのうつお」というサイトは削除・閉鎖したため、現在はありません。】

* このブログは、いわばツイッター兼ノートです。というわけで、タイトルを決めました。実にでまかせしゅぎ的です。身の程をわきまえれば、そんな感じのブログではないかと、ひとり納得しております。

* 友達のいないモノブログ(※対義語はコラボログと呼んでいます)ですから、ツイッターもひとりずつぶやくことにします。ノートも兼ねているので、ここには長い文章も書きたいです。

* シスターブログの「うつせみのあなたに」、「でまかせしゅぎじっこうちゅう」、「ヒト観察記」には書けない、または書きたくないことを、ここに書く予定です。【注:この記事が書かれた時期には、やけっぱちになり、並行して4種類のブログを書いていました。】

* 特に「でまかせしゅぎじっこうちゅう」の記事を書くと、心身ともかなり消耗するので、このブログでは、まったくとした内容のことをのんびりとした気持ちでつづっていくつもりです。

* 先日、ある方から、ブログの「メッセージを送る」機能を用いて、コメントをいただきました。以前から、何度か、メッセージを送ってくださっている心やさしい人です。で、その人から、ずばり、「あなたは、『ブログ廃人』になっているのではないですか?」と、指摘されてしまいました。

* そうかもしれません。いや、そうです。確かに、ブログにのめり込んでおります。せめて、「ブログ俳人」と呼ばれたかったです(時々、俳句を詠んでいますが、どうやっても川柳もどきにしかありません)。でも、「ブログ廃人」と呼ばれて本望です。

*いずれにせよ、このブログのタイトルは、「うつせみついたうつせみのおと」です。ブログとは、いわば「うつせみ=空蟬=空洞の空間=空の器」です。このブログを書いているアホも、「うつせみ=空蟬=魂の抜け殻=現人=生きているヒト=うつを背負う身」です。「うつせみ」であるブログが憑いた「ブログ廃人」の口から漏れ出た「音」をつづったブログなので、ここに書かれている言葉たちは、「うつせみついたうつせみのおと」なのです。

*相変わらず、ひどいダジャレです。うつ同様、治りそうもありません。どうか、ご勘弁をお願いいたします。

【当ブログ「うつせみついたうつせみのおと」は、「ツイッター=ついた（つぶやき・ぼやき）」と「ノート=のおと（雑記帳）」を兼ねてもいます。記事を新規に投稿するという形ではなく、1日に何度か、文章の付け足し=加筆をしたいと思っています。その点を、どうかよろしくご了承願います。】

09.12.09 続・社会復帰はあきらめました

【*「社会復帰はあきらめました」2009-12-09：この日と同じタイトルの「社会復帰はあきらめました」2009-11-29 をそのまま引用し、次の記事と2本立てで掲載しています。

*「続・社会復帰はあきらめました」2009-12-09：上の記事を再録した理由の言い訳をしています。「社会復帰をあきらめた」と自分に言い聞かせています。自己確認のための儀式と言えそうです。この日が「漱石忌」だったため、漱石についても述べています。】

◆社会復帰はあきらめました

2009-11-29 11:12:09 | さくぶん

<消えてしまいたい指数>は、去年の12月21日に書かれたものです。

読み返してみて、状況がまったく変わっていないのがく然としました。

>どうせ社会復帰は無理に決まっている。自分の好きなことだけやって生きていこう。親が亡くなり（※いい歳をして親の年金で食べている身です）、預金を取り崩したら（※すでに急速に減り始めています）、野垂れ死にするだけ――。

<消えてしまいたい指数>に、以上の文章がありますが、親の年金で食べている点は変わりません。預金については自分名義のものは、取り崩してしまいました。すっからかんです。現在は、親の名義の預金に手をつけています。

やばいです。かなりやばいです。

*

ついこの間、社会復帰のために、以前にしていた仕事を再開しようと思い立ちました。仕事を紹介してくれる会社に連絡をとろうとしてメールの下書きまで書いたのですが、送信しなくてよかったです。

メールを出そうとしたとたん、抑うつ状態が急激に悪化しました。

仕事を再開するために、ちょっと前からある程度の準備というかお勉強をしていて、「これなら、仕事を請け負っても大丈夫かな」くらいの気持ちにまでなっていたのですが、駄目でした。

やる気が起きない。だめだ。こわい。せつない。むなしい。かなしい。きえてしまいたい。

そうした思いが、どっと押しよせてきました。仕事の再開に向けて準備をしているうちに、自分にプレッシャーをかけていたのかもしれない。圧力鍋が不具合で破裂する

ように、どかーんと来ました。

ぶっちゃけた話、社会復帰はあきらめました。となると、行く行くは野垂れ死に、行き倒れ、孤独死、孤立死——というところでしょうか。

最近、財布の中身を見るたびに、この金額だと何日間食べていけるだろうか、と頭の中で計算します。

食は細いです。スイーツ類への執着もありません。「なくなる＝きえる」間際まで、考えるか、眠っていられば最高なのですけど。

さらに贅沢を言わせていただくと、痛いのは嫌ですね。短時間なら何とか我慢しますが。

やばいことを書いて、ごめんなさい。悪気はないのです。本音を書いたまで、なので。気分を害された方には、お詫び申し上げます。

*

話を変えます。

きのうの記事でも書きましたが、相変わらず、

*何かの代わりに「何かではないもの」を用いる。

について考え続けているわけですが、そのきっかけがブログだったので。

長い間眠らせていた子を起してしまった。干しておいた藁（わら）に種火を投げ込んでしまった。比喩的に言えば、そんな感じです。眠っていた子が起きちゃいました。藁

がくすぶり、やがて燃え始めました。

昨年の暮れに初めてブログを開設し、それ以来、かなりの量の文章を書きました。

結局のところ、その大半が、

*何かの代わりに「何かではないもの」を用いる。

をテーマとしたものなのです。

>自分のなかでは、「地図は現地ではない」とは「言葉は物（森羅万象くらい広い意味で）ではない」「お金は物ではない」「王冠は王様ではない（＝総理の椅子は総理ではない）」「テレビの画像は被写体そのものではない（＝エッチ画像に映っている〇〇〇は〇〇〇そのものではない）」・・・というのと同じで、ないないづくしの代名詞みたいなものとして理解しているのだけどー。

以上は、<消えてしまいたい指数>からの引用です。これはまさに、

*何かの代わりに「何かではないもの」を用いる。

の「変奏＝バリエーション＝言い換え＝変相＝変装」です。

*金太郎飴

や、

*笑点の内輪受けギャグ

あるいは、

* パーソナルワンパターンギャグ

みたいなものです。

* 進歩がない。

という言い方をする人もいるでしょう。

ただ、

* 何かの代わりに「何かではないもの」を用いる。

という、いわば

* 代理の仕組み

と呼ぶべきものを相手にする場合には、進歩や成熟や成長はないと思われます。あるとすれば、「変装=変奏」や金太郎飴やむいてもむいても芯の出でこないラッキョウのたぐいだけでしよう。

そういうふうで「なっている=できている」みたいでしよう。

この点についての詳しいことは、いずれ書きます。

*

当ブログの左側にある「ブックマーク」をご覧ください。「うつせみのうつお」というタイトルのウェブサイトに、過去の記事をバックアップしたものを収めてあります。万一、ご興味のある方がいらっしゃいましたら、どうか訪ねてみてください。【注:「うつせみのうつお」は削除し、現在はありません。】

抑うつ状態をやわらげるために気晴らしをしよう。当初は、そんなつもりでブログ記事を書いていたのですが、だんだんのめり込んでいき、自分を追いつめるところまで何度かいきました。

熱中する。度を過ぎる。燃え尽きる。中断してブログを削除・閉鎖する。少しして、性懲りもなく再開する。その繰り返しでした。

でも、もしもそれで生き延びることができたのなら、役に立ったというべきなのでしょう。感謝すべきなのでしょう。

で、今回、また新しくブログを開設した次第です。

*

ところで、上で述べました「うつせみのうつお」は、時系列に記事が並んでいます。巻物のような形で、自分の考えていたことを眺められるので、おもしろいです。ブログの欠点は、長い文章を巻物のように、古い順にスクロールして眺められないことです。

そんなわけで、ブログを開設してある程度記事が溜まってくると、へこんだ時に削除・閉鎖し、「うつせみのうつお」という「倉庫」あるいは「記事のお墓」を作ります。そして、そこにバックアップしてある「データ＝記事たち」を「収める＝納める」のです。

これが一種の儀式になっています。

書いた記事たちは、巻物状に連なったものとして「納骨」しておいておきたいと思っ

ています。

一般的なブログのバックナンバーは、カテゴリ別あるいは月別に分類された「ファイル=箱」内に保存してあります。「ファイル=箱」をクリックすると、新しい順に記事をスクロールして眺められます。

その仕組みになじめないのです。「ファイル=箱」より巻物、新しい順より古い順のほうが、個人的には好きです。

「うつせみのうつお」は、「詳細もくじ」を除くと、全部で六ページになります。巻物と考えれば六巻という感じです。あれくらいの量だと、各巻の記事数をもっと多くして全部で三巻くらいにまとめたいたのですが、そうしようとするとエラーが出ます。間借りしているサイトでは、技術的に無理みたいです。データの容量が大きすぎるのでしょうか。しかたなく、小分けしています。

*

>いつも敬遠しつつ、怖いもの見たさにときどき本屋で立ち読みして、そのうちにイヤな気分になっていつも後悔する自己啓発書のコーナー。

<消えてしまいたい指数>に、以上のようなくだりがあります。

抑うつ状態を改善するためには、薬物療法のほかに心理学を利用した療法があります。宗教やスピリチュアルと呼ばれているものに頼る方法もあるでしょう。

本屋さんの自己啓発書のコーナーにも、「バリバリ」や「ぎらぎら」から「まったり」や「ぼけーっ」まで手を替え品を替え、さまざまな「調理法」で「やる気や元気が出る」とうたったキャッチフレーズのついた本が並んでいます。

苦手です。自分には合いません。

そんなふうですから、読んでも効果があるとは思えません。以前、仕事をしていたころに、やむなくその種の本をたくさん読まなければならない機会がありましたが、あほらしくてたまりませんでした。まだ、お薬の方がましというか、自分には合っています。

*

自己啓発書やスピリチュアル関連の本を読んでいて、なるほど思ったことが二つあります。

- 1) 深呼吸のさいに、意識的にゆっくりと大きく息を吐き出すと楽になる。

- 2) 苦しみやつらさを他人のせいにしなくて、自分自身がそういう感情を選択しているのだと言い聞かせると楽になる。

この二つは、ときどき利用しています。

1) の場合には、宇宙だの、森羅万象だの、神仏のたぐいなどと関連づけることはしません。趣味や道楽や冗談ならいいでしょう。お金儲けのためなら、それはそれで仕方ないでしょう。でも、自分にとって切実な問題と取り組むさいに、大風呂敷を広げたり、たわごとをぬかすのは嫌です。ストレッチやラジオ体操と同じで、たぶん生理的なものだと思っています。セロトニンとかの話や理屈は忘れしました。

2) は、やってみたら効果があったので素直にやっています。言い聞かせること、つまり言葉を使うとか考えることは、「ごまかし＝自己催眠＝錯覚＝すり替え＝語り＝騙り＝異化＝こじつけ」であり、「気休め＝自己保身＝心の衛生」にも役立てることができずから、これも、

*何かの代わりに「何かではないもの」を用いる。

という、いわば

*代理の仕組み

の「一種=一つの活用法」だと屁理屈をつけています。

*

>そこ（「地図は現地ではない」というフレーズ）からどうして癒やしや元気の素（もと）が出てくるのかなあ？ どうつながるんだろう？

については、上の2）について書いたことが、答えになっているような気がします。

なにしろ、

*代理の仕組み

は、化け物ですから。

【本日は、わけあって2本立ての記事でいきます。続いて掲載されている「続・社会復帰はあきらめました」をお読みいただければ幸いです。】

◆

◆続・社会復帰はあきらめました

2009-12-09 13:32:51 | 日記

*本日は2本立ての記事になりました。

*1つ前の記事は「うつせみついたうつせみのおと」というタイトルの後半の「うつせみのおと」(ノート=雑記帳)みたいなものです。

*今、お読みになっている記事は、「うつせみついた」(私家版ツイッター)です。

*「うつせみついたうつせみのおと」は、こんなふうに分断することができそうです。きのう、「ま、いっか」という感じで、でまかせに長くて不細工なブログタイトルをつけましたが、こういう利用法ができるなんて思いもしませんでした。

*1つ前の記事「社会復帰はあきらめました」は、2009-11-29に書いた記事をコピーペースト=再録したものです。

*当ブログの左のブックマークに「うつせみのうつお」という、親サイトがあります。その「詳細もくじ」の一番下から2番目に記してあるように、同サイトの「6ページめ」のやはり一番下から2番目に記事が収めてあります。【注:「うつせみのうつお」というサイトは削除・閉鎖し、現在はありません。】

*ブックマークには、そのほか「うつせみのあなたに」というシスターブログのリンクがあります。ほぼ1年前から書いた記事を徐々に再録しているブログです。

*「再録」とは体(てい)のいい言い方で、ぶっちゃけた話が「二番煎じ」をいけしゃあしゃあとやっているだけです。お恥ずかしい限りです。

*言い訳=弁解をさせてください。本日、二番煎じで投稿した「社会復帰はあきらめました」という記事は、かなりへこんだ気分です。でも、あれを書いて、吹っ切れました。社会復帰はめざさない。あきらめた。そう決心した日の記事なのです。

*というわけで、記念すべきというか、すごく愛着のある記事です。きのうの記事に書きましたが、ある方から「ブログ廃人」と呼ばれ、「そうだ、それでいいじゃないか」と

思うようになったのも、あの記事に書かれている心境に達したからです。

*なお、あの記事の冒頭で出て来る「消えてしまいたい指数」(2008-12-21 13:17:40 | Weblog)という記事は、左の「ブックマーク」の「うつせみのあなたに」にも、「うつせみのうつお」にも、最初のほうに収録されています。よろしければ、お読みください。

*きょうは、漱石忌ですね。夏目漱石が49歳で没したとは信じられない。そうおっしゃる方が多いですが、同感です。何だか、すごくおじいさんだったという気がしませんか？

*それなのに、文章はそんなに古く感じられません。一方で、同時代人の森鷗外の文章のほうには、かなり違和感を覚えます。

*漱石で一番好きなのは、当て字=感字です。長い小説は読めない性質なので、ぱらぱらめくって、部分的に目を通しながら、当て字を楽しんでいます。実に、「言えてる」感字が多くて感心します。すごいと思います。

*漱石の短編や小品は、きちんと読みます。新潮文庫では、当て字がそのままの形で収録されています。同文庫の『文鳥・夢十夜』と『硝子戸の中』は、デスクの近くにいつもおいてあります。中でも、「永日小品」が大好きです。

【当ブログは、ツイッター(つぶやき)とノート(雑記帳)を兼ねています。記事を新規に投稿するという形ではなく、1日に何度か文章の付け足し=加筆をしたいと思っています。その点を、どうかよろしくご承願います。】

09.12.10 ブログと心中？

◆ブログと心中？

2009-12-10 16:38:59 | 日記

*まず、きのうの記事にコメントをいただいた方に、お礼を申し上げます。このブログ画面の左側にある「メッセージを送る」機能ではなく、記事の下にある「コメント」機能をお使いになってのものでした。ありがとうございました。

*このブログは開設して間もないので、コメントを受けつけない設定にするのを忘れていました。苦手なので、コメントもトラックバックも受け付けるような設定をしていません。

*そんなわけで、コメントは削除させていただきました。ごめんなさい。「メッセージを送る」機能をご利用くだされば幸いです。

*きょうは、抑うつ状態が悪化しています。いちばん力を入れて書いている「でまかせしゅぎじっこうちゅう」(※画面の左のブックマーク内にリンクがあります)というブログも、きょうはおとなしい感じになってしまいました。

*「消えてしまいたい指数」が高い日には、薬を多めに飲んでぼけーっとしているのがいいのかもしれませんが。自分の場合には、そういう状態は就寝前だけにしておきたい気持ちがあります。

*ドクターの言いつけを守らず、お薬を飲むのを控えて、ブログを書いています。ぼんやりした頭で文章を書きたくないのです。ブログを書いていることも、ドクターには内緒です。

*これまで開設してきた複数のブログに対して、メッセージを送ってくださっている方については「ブログ廃人と呼ばれて」(2009-12-08)という最初の記事の中で触れました。Hさんとしておきます。

*Hさんから、メッセージをいただき、「あんた、今、4本もブログを書いているけど、

ブログと心中する気？」と、心やさしいお言葉をいただきました。

*Hさんとは、初めて開設した「ネガティブに生きる」(※ブックマーク内の「うつせみのうつお」に収録されています)というタイトルのブログを書いていたころから、メッセージとメールを通しての付き合いです。【注：過去のブログ記事を収めた「倉庫＝お墓」である「うつせみのうつお」は、削除・閉鎖して、現在はありません。】

*メールアドレスを教えてくださいましたので、Hさんには新しいブログを開設するたびに案内状メールを出しています。口調というか文面は、きつい言葉を使っているかもしれませんが、根はとてもやさしい方です。ときおり、アドバイスもいただいています。

*で、Hさんのメッセージにあった「心中」ですが、その気はありません。こりゃダメだ、と感じたら、ブログを書くのは中断します。

*でも、「ブログと心中」なんて文字を目にすると、氾濫した川の流れていて吸い込まれそうになるように、すうーっとそのイメージに惹かれるというか、馴染んでしまいうそうです。

*やばいことを書いて、ごめんなさい。ここは自殺サイトや自殺ブログではありません。

*ただ、ちょっと最近、やりすぎているかなという気はします。でも、考えたり、書いたりすることが好きなのです。無職で暇だということもありますが、それ以上に書くことが好きなのです。抑うつでつらくても、書けるくらいの気力があれば、書きたいのです。

*何かをやり始めると几帳面にやってしまう。うつでお悩みの方々によくある性格ですね。それは分かってはいるのですが、つい毎日書いてしまうのです。時には、休むのも必要ですよ。心に留めておきます。

【当ブログは、ツイッター（つぶやき）とノート（雑記帳）を兼ねています。記事を新規

に投稿するという形ではなく、1日に何度か文章の付け足し＝加筆をしたいと思っています。その点を、どうかよろしくご了承願います。】

09.12.11 よくないなあ

◆よくないなあ

2009-12-11 13:10:01 | 日記

*きょうは、マジで調子が良くないです。

*力を入れて書いている「でまかせしゅぎじっこうちゅう」というブログで、かなりしんどいところを書きたいのですが、それと自分の現状とが重なってしまって書きにくくて停滞しています。

*そのしんどい部分を迂回というか、遠巻きにしながら、ぶらぶらしている感じです。きのうも、そんな感じで記事を書きました。

*本意ではない。でも、例の部分には「触れられない＝行けない」から、ちょっと「関係のある＝重なる」ことを書いてお茶を濁し、スキを狙っている。書ける機会を待っている。そんな感じです。

*わけの分からないことを書いて、ごめんなさい。

*きょうは「でまかせしゅぎじっこうちゅう」はお休みにしようかな。こういう日は、頑張っちゃだめだ。

*誰に頼まれているわけでもなく、好きで書いているブログですけど、書きにくい時があるんです。

*以上は、個人的な事情です。正確に言えば、気分+体調の「問題=不調=不具合」です。

*親の介護がしんどいです。親は足が悪いため、排便など用があるたびに、無線の呼びベルを鳴らしてきます。自分は難聴者なので、ベル音を聞き逃さないように、いちばん大きな音に設定した受信機を、常にそばに置いています。

*ベルが鳴ると、飛んで行って、付き添い、介助します。車に乗せて、かかりつけの医院に連れて行くといったことは、手伝ってくれる人がいるので助かります。自分の場合、運転免許証は持っていますが、聴力がかなり低下しているので、運転はしません。

*その手伝ってくれる人は、親が運動不足にならないように気を使ってくれます。スーパーなどで、カートを押して歩かせるという具合に、一種のリハビリみたいなこともしてくれます。

*親の年金で食べている身ですが、介護はやはりつらいです。つらさも、その日の調子によって左右されます。きのうもきょうも、しんどいです。

*愚痴ばかり書いて、ごめんなさい。今はそんな心境です。午後は、調子が上向けばいいんですけど。

*思うようにならない心と体。そうしたことについて、考えています。

【当ブログは、ツイッター（つぶやき）とノート（雑記帳）を兼ねています。記事を新規に投稿するという形ではなく、1日に何度か文章の付け足し=加筆をしたいと思っています。その点を、どうかよろしくご了承願います。】

09.12.12 素面でいたい

◆素面でいたい

2009-12-12 19:35:13 | さくぶん

きのうから、ある書き手の文章を読み続けている。初めてその人の本を読んでから、もう四半世紀が経っているのに気づき驚いた。この数年間書棚から引き出すこともなかった本を、今になって読み返しているのはなぜだろう。

その人はうちで購読している新聞に映画評を月1回寄稿している。私は字面に目を走らせ、いい文章だなと思うくらいで、内容をかみしめることもなくきた。それなのに、突然無性にその人の本を読みたくなった。

このところ抑うつ状態がひどく、苦しい。あまりにもつらいため、きょうは、処方されている薬をきちんと飲んでいる。本当は、就寝前以外は飲みたくない。たとえしんどくても、昼間は「素面」でいたい。

素面で、読みたい、書きたい、考えたい。

薬に弱い私は、ぼんやりとした頭とけだるい体で、その人の書いた文章の活字を追っている。同じ行を何度も読み返すこともある。

この1年ほど私が書いてきた駄文と比べてみると、ずいぶん対照的な端正な文章で、ため息をつきながら読みふけている。いいなあ、と時折つぶやく。魂の抜け殻になった今のこの身を思うと、自分とはずいぶん隔たった姿勢で、生き、書いている人だと感じ入り、心を動かされる。

だから惹かれるのかもしれない。しばらくは、その人の文章を集中的に読んでいたいと思う。自分にはない資質を備え、自分とは縁遠い世界で生きてきたその人の紡いだ言葉たちに触れ、癒やしてもらいたい。

その書き手は、広く読み、広く旅をし、広い見地から世の中を眺めている人だ。狭い世界に閉じこもってきた私とは異質な人格を持ち、異質な行路を歩んできた人の文章を、横着でせっかちな自分がゆっくりと丹念に読んでいることが不思議でならない。こんな体験は何年ぶりだろう。

部屋の書棚を漁ってみたら、その人の書いた本が4冊あった。押入れに積まれている段ボール箱の中にも、まだ何冊かあるかもしれない。焦ることはない。まずは、この4冊を丁寧に読んでいこう。

09.12.13 儀式

◆儀式

2009-12-13 19:11:12 | さくぶん

少し気分が落ち着いたので、きょうは先日削除・閉鎖した記事を「倉庫」兼「お墓」に収めた。記事はバックアップしてあるため単純な作業だったが、私にとっては象徴的な意味を持っている。

比喩的に言えば、「納骨」だろう。こうしたことを何度もやっていると、儀式と化しているような気がする。この作業をする際には、目次のページにも加筆するわけだが、これまでにやってきたことの全貌が見えて妙な気持ちになる。自家中毒症という言葉が頭に浮かぶ。

■過去に開設したブログの記録

- * 「ネガティブに生きる」 2008-12-19～2009-02-27
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-01～2009-03-09
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-03-10～2009-03-15
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-26～2009-04-08
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-04-06～2009-04-08
- * 「うつせみのあなたに」 2009-04-17～2009-07-17
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-08-01～2009-08-08
- * 「うつせみのあなたに・・・」 2009-08-11～2009-09-01
- * 「小品集」 2009-09-04～2009-11-14 (ハンドルネームとして「恵」を使ったブログ)
- * 「うつせみのあなたに」 2009-09-04～2009-11-19
- * 「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29
- * 「うつせみのあなたに」 2009-12-01～2009-12-11
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-12-02～2009-12-10
- * 「ヒト観察記」 2009-12-06～2009-12-10
- * 「うつせみついたうつせみのおと」 2009-12-08～2009-12-10
- * 現在開設中のブログ: 「うつせみのな」 2009-12-12～

以上が、ほぼ1年前から開設し閉鎖したブログの記録である。さきほど「妙な気持ち」と書いたが、記録をコピーペーストし、あらためて眺めてみると、尋常ではないと感じ

る。

ほとんど読むことなく、ひたすら書いた1年間だった。書いたというより、吐いたのかもしれない。作っては壊す。その繰り返しだった。無職で暇なためにこんなことをしてきたが、何の意味があったのか。

ブログに没頭していたから生き延びることができた。それだけは言えるような気がする。これから先にも……。いや、考えないでおこう。それより、きのうの記事で触れた書き手の本を読みたい。

後記：当ブログの左にあるブックマーク内の「うつせみのうつお」というサイトが、「倉庫」兼「お墓」です。お訪ねくだされば、うれしいです。【注：「うつせみのうつお」は削除・閉鎖し、現在はありません。】

09.12.14 爪を切る

◆爪を切る

2009-12-14 15:28:25 | さくぶん

今、私はそわそわしている。ある日が近づいているからだ。

私は2008年用の手帳をメモ帳代わりに使っている。最初のほうのページに、2008年つまり去年と2009年の年間カレンダーが見開きで載っている。カレンダーには、黒と青と赤のボールペンで色分けした、●や○や／やチェックマークが施されている日が月にいくつかある。

髪をカットした日。医院に行った日。病院に行った日。補聴器の電池を交換した日。補聴器の調整をしてもらいにいった日。自室の掃除をした日。母の寝室を掃除した日。銀行で預金を下ろした日。そういった日に印がついているのだ。その中に、赤で○をした日がある。母の足の爪を切った日だ。

母は足が悪い。腰も悪い。内臓もよくない。母の介護は、わけあって同居している人と私の2人が役割を分担して行っている。母は10年ほど前から、正座ができない状態になっている。歩行の際には、手すりを使うか、誰が手を握って一緒に歩いてやる必要がある。

家では付き添いながらなるべく歩くようにさせている。スーパーでは手押し式のカートを使わせて、足を動かす訓練の代用もしている。ショッピングセンターや公共の施設などでは事故を避けるために、そうした場所に備えてある車椅子を利用させ絶対に歩かせない。転倒が何よりも怖いからだ。

あの年で転倒し骨折をすれば、手術は無理だ。やむなく寝たきり状態になるだろう。同時に、認知症が急速に進行するにちがいない。そのような事態だけは、絶対に避けたい。

母は生後間もなく小児麻痺にかかったらしい。医師の措置が功を奏したのか、奇跡的に歩けるようになった。だが、片足を軽く引くという後遺症と付き合っていかなければならない身になった。もっと重い後遺症をかかえている人たちがたくさんいるのだから、自分は本当に運がよかった。母は、よくそう言う。

私は母子家庭で育った。幼かったころには、どこかへ出掛けるごとに母の自転車の荷台にしがみ付いていた。ある時、母の自転車の乗り方、正確に言えば最初に勢いをつけて自転車のサドルにまたがるまでの様子がほかの人たちと少し違っているのに気が付いたことを覚えている。

片足が曲がらないのだ。今考えれば、その悪いほうの足をかばうために、アンバランスな乗り方を余儀なくされていたのだった。あれっ、変だな。そう思ったが、口には出さなかった。

今、私は手帳のカレンダーを見ている。右ページの下にある11月19日を示す「19」という数字が、赤いボールペンで丸く囲まれている。つまり、12月19日前後に母の足の爪を切らなければならないということになる。カレンダーを見ると、12月19日は今週の土曜日だ。

誕生日。

母が私を産んでくれた日――。

私の気分は落ち着かない。はっきり言えば、嫌な気持ちだ。

現在、母は椅子には座れても、床に腰を下ろした際には正座ができないために、両足を投げ出す格好になる。膝が思うように曲がらないので、足に手が届かない。当然のことながら、自分で自分の足の爪を切るのは無理だ。

母の足の爪は、角質化してかなり厚くなっている。白癬というみずむしの一種が爪に入り込んで起こっているものらしい。飲み薬による治療もあるそうだが、現在毎食後に5錠ほどの薬をやっとの思いで白湯と一緒に飲み込んでいる年寄りに、これ以上薬を飲ませるのも酷だ。みずむしは、別に命にかかわる病気でもない。

そんなわけで、私が月に1度、2種類の爪切りとやすりを使って手入れしている。これが物理的に、そして精神的にかなりの負担になる。

まず、腰が悪い私にとって、相当無理な姿勢を取らなければならなくなる。この時期には、母の足を冷やさないように、部屋を暖めなければならない。母の足は小児麻痺の後遺症で爪が一本一本いびつな形をしているために、角質化した部分を丁寧に削り切り磨くとなると1時間近くを要する作業になる。

私は母と対面したり、一緒にいるのが苦手だ。沈黙の1時間がしんどくてたまらない。しかも、足の爪を切るたびに、なぜか、いつも同じ重苦しい記憶がよみがえってくる。断片的なお決まりの記憶が、次々と頭の中を駆けめぐるので。それだけで、精神的に参っ

てしまう。

カレンダーを見てその日を意識するようになると、居ても立っても居られない気持ちに襲われる。早く済ませてしまおうと思い、予定日の数日前にやってしまうこともある。嫌だなと思いながら、予定日を過ぎてしまうこともある。頓服に飲むように指示されている精神安定剤を服用するという手もあるが、薬に弱い私の場合には、眠気のために手元がくるう可能性があり危険だ。

こんなことで悩んでいる気持ちは、ほかの人にはなかなか理解してもらえないと思う。悩みを打ち明けても、この親不孝者めと叱りつけられるのが落ちだ。

いつも昼食後の比較的元気な時に、えいっと気合を入れてやるのだが、きょうはぐずぐずしているうちに時機を失してしまった。

ああ、嫌だな。

今日をつむれば、一瞬のうちに1週間ほどの時が過ぎ去っている――。年甲斐もなく、そんな荒唐無稽な空想を、さきほどから何度も心に描いている。

09.12.15 わける (1)

◆わかる (1)

2009-12-15 12:28:58 | さくぶん

以前、「かわる」というタイトルでブログ記事を連載したことがあった。10回続いた。私にはブログを作っては潰すという癖があるため、そのブログ自体は削除・閉鎖したが、

バックアップした記事を集めて収めたサイトがある。当ブログの左側のブックマークにある「うつせみのうつお」がそのサイトなのだが、「倉庫」兼「お墓」に見立てたサイトに自分で潰した記事を「葬る」というのも、未練がましい行為であり妙な性癖だと思う。【注：「うつせみのうつお」は削除・閉鎖し、現在はありません。】

それはさておき、きのう「かわる」という連載（※「かわる(1)~(10)」2009-03-26~2009-03-29 in「うつせみのうつお」）に再度目を通してみた。というのも、テレビのニュースを見たり新聞を読んでいるうちに、「かわる」ではなく「わかる」という言葉が頭に浮かんでなかなか去ってくれないからだった。今も、「わかる」について考えており、そんなわけでこの記事を書いている。

「かわる」をめぐる書いた連載記事の中では、頻繁に「わかる」と「わかる」という言葉が出て来る。ややこしい話だが、実を言うと、「かわる」というタイトルの連載は、主に「わかる」という言葉とイメージについて書いたものだったのである。さて、「わかる」と「わかる」が語源的にも関係あるらしいことは、大きな辞書を引けば書いてある。また、体感的にも、両者が意味的にからみ合っているようだとはなんとなくわかる気がする。

昨今の政治・経済に関するニュースを見聞きしていると、政治も経済も、ひいては人間のありとあらゆる行動が「わかる」という言葉に集約されるような思いにとらわれる。「人間のありとあらゆる行動.....」などと大風呂敷を広げたからには、この話は今始まったことではないという理屈になる。すると、尻尾のないサルがヒトとなったらしいという伝説にまで触れなければならなくなり、しんどそうなので身の程をわきまえてやめておく。

「わかる」については、前述のブログ記事でかなり「わけのわからない」ことを書き連ね、その後に書いた数々の記事の中でも、何度か同じような收拾のつかない状況に陥った。当然のことだと思う。私を含め、ヒトという種には荷が重過ぎるのだ。鏡に我が身を映し、どんなに頑張ってみたところで、しょせん鏡像は幻でしかない。鏡に映った像と、実像あるいは実物とは似ているが同じではない。鏡像を見て我が身をわかろうとするというのは、冷静に考えれば正気の沙汰ではないと言えそうな気がする。

だから、わかるわけがないという理屈になる。こうした味気ない、それを言ったらおしまいだという感じの不毛で悲観的な感情に振りまわされるという1年間を、私は過ごしてきた。その千鳥足の跡は、さきほど紹介した「うつせみのうつお」に収録されている。

話を「わかる」に戻そう。今、この時点で「分ける」という漢字混じりの言葉で何を連想するかと世間の人たちに尋ねれば、「事業仕分け」という言葉がきっとかなりの確率で返ってくるだろう。テレビで何度も放映されたにちがいない「事業仕分け」の様子を写した映像は、今でも鮮明に思い出される。

これまで密室の中で行われて作業が「見世物」と言ってもいい形で、広く国民に「見える化」されただけでも画期的な出来事だった。そのやり方が「きつい」とか「やりすぎ」という言葉で批判もされた女性議員がいた。いつも部下や民間人を相手に威張りちらしていると想像されるキャリアの公務員たちが、たじたじとなっている。あるいは泣きそうな顔で抗弁している。そんな様子を見て、私は溜飲が下がった。だから、あの女性議員の仕事ぶりを「きつい」とも「やりすぎ」だとも思わなかった。

「事業仕分けショー」は、私の目には、今述べた意味にとどまらない象徴的な出来事に見えた。「わかる・分ける」という行動が、政治と経済の基本原理ではないかという感じがしたという意味だ。「パイを分ける」という言い方があるが、ヒトという生き物は、ありとあらゆる分野や領域で「パイを分ける」作業を行っていると言える気がしてならない。

こうしたきな臭いことを書いていると、つい肩に力が入っているのを感じる。抑うつが悪化する前兆だ。この続きは、次回に書こうと思う。波長の合った書き手の文章を読んで、気を落ち着けることにしよう。

09.12.16 わける (2)

◆わかる (2)

【※ 09.12.16 に不投稿に終わった記事】

「わかる」という言葉に振り回されるというほぼ1年を経たためか、「わかる」についてもいろいろと考えさせられた。両者は大きく重なっているという印象をいただいている。そもそも言葉というものは、音と文字というレッテルが貼り付いている得体の知れない代物で、しかもそのレッテルはきわめて薄いベールに似ている。

「わかる・わかる」あるいは「wakaru」「wakeru」と書き分けてみると、音と文字としての「わかる・わかる」が、わずかな違いでヒトに識別されていることがわかる。それを、「わかる・分かる・別る・解る・判る」と漢字を当ててみたり、「分・別・解・判」という漢字、つまり中国の文字の作りや本来の意味を漢和辞典で調べてみる。

また、「分解」「分離」「分配」「分担」「分析」「区分」「微分」「部分」とか、「分別（ぶんべつ・ぶんべつ）」「区別」「差別」「識別」「判別」とか、「解剖」「解体」「解散」「解毒」「解決」「解明」「解釈」「解説」「理解」「分解」「理解」「図解」とか、判断」「判別」「判定」「判明」「判読」「判決」「裁判」「批判」「談判」「評判」「判子」「血判」という具合に、漢字で表記される言葉を羅列してみる。

以上のような操作をすると、「わかる・わかる」が何となく「わかった」ような気がするが、それはあくまでも「気がする」だけで、実際には何も「わかっていない」ことに、はっと気づく。それならまだましで、ふつうは、「わかった」という過去形・完了形で済まされてしまう。それが「わかる・わかる」に対する通常のヒトの態度らしい。それで日常生活に支障をきたすことは、まずないと言える。

「わかる・わかる」のうちの「わかる」については、「もう結構です」というのが、現在の私の正直な気持ちだ。「わかる」に関しては懲りたにもかかわらず、今度は「わかる」にこだわり、この記事を書いている。我ながら「学習をしないやつだ」とあきれないではいられない。

そう言えば、「わかる」と同じくらい私を振り回した言葉がある。「なわばり」、つまり「テリトリー」である。実は、今気になって仕方がない「わかる・分ける」と「なわばり・テリトリー」とは、密接にからみ合っている。前回、「パイを分ける」というフレーズに触れたが、「パイ」を「土地」に置き換えてみると、よくわかるのではないか。テリトリーについても、この1年の間にいろいろ考えをめぐらした。

当ブログの左の「ブックマーク」内にある「うつせみのうつお」という過去のブログ記事を取めたサイトを訪ね、「テリトリー」をキーワードに検索してみれば、ずいぶんたくさんヒットするだろうと思う。「わかる・分かる」と近い言葉である「しる・知る」が、かつて「領る」とも表記され、「しる・汗」をかける、言い換えれば「おしっこ」をかける「マーキング行動」とつながるなどという、偶然とも必然とも駄洒落とも判別できない事態に直面し、ひとりでにやにやしていたことを思い出す。【注：「うつせみのうつお」というウェブサイトは、削除・閉鎖し、現在はありません。】

ここまで書いてみると、現在の私が「わかる・分ける」にこだわっているわけが何となくわかるような気がする。私はかなりいい加減な性格で、書きながら考えるという癖がある。やっていることが、すべて出まかせであり、でたらめだとも言える。そうしたことについては、過去の記事で何度も告白しており、また「でまかせしゅぎじっこうちゅう」などという、ふざけていると取られるのに決まっているタイトルのブログを、これまでに4本も開設した。

笑われるのを覚悟で書くと、私は本気で、かつ真剣に「出まかせ」を実行してきたのである。なぜなら、「かく・書く」とは「掻く・欠く」であり、また「掛く」でもあり、さらに言うなら、文字が「書ける」とは「掛ける・架ける・掛かる・架かる」、つまり「宙ぶらりん」の状態を指し、偶然に身をまかせるという「賭ける」につながる行為であると信じているからにはほかならないからである。

こうした言葉の遊びは、言葉というヒトが作った「名前的一种」と、ヒトとは無縁に存在すると考えられる「名付けられた何か」との間に揺らぎ漂う「関係性」という、曖昧模糊とした「名付けることのできそうもない何か」に、ヒトが「もてあそばれている」状況なのではないか。そんなふうに思わずにはいられない。

音声としての言葉、文字や活字としての言葉は、物だと思ふ。物質や現象だと思ふ。物や現象はヒトの思惑を超えている、あるいはヒトの思惑とは無縁な存在と化している。その意味では、言葉は石ころと同じだ。話し言葉や書き言葉と、物との違いは、ヒトが発し、さらには「作為をもって＝意図的に＝故意に」「作った」ものかどうかという点だけである。

繰り返すが、言葉も「空気の揺れ＝音」であり、インクの染みであるという点では、物であり石ころと変わらない。その言葉の物質性に意味や価値を付加するのは、ヒトという種の孤独な作業だと言える。ヒトの勝手だと言える。

ヒトが言葉にもてあそばれるとは、そういう事態を言い換えたものである。仮にヒトという種が絶滅しても、レコードや録音テープやCDやデジタルデータ化された音声は残るし、墨や鉛筆やインクの跡やデジタル化された文字・活字は残る。言葉が物だというのはそういう意味でもある。これは広義の表象全般についても言えるだろう。

ヒトは分ける。切り分ける。その行為が自らの賢さではなく、自らの矮小さの表れであることを、ヒトは常に意識すべきだと思う。ヒトは自分が小さいから分けるのだ。

しんどくなってきた。

「わかる」について、ずばりと本題に入ればよかったのに、書きながら考える癖が抜けないうために、どうやらちょっと、いや、かなり危ういかやばいと言われそうな前書きをしたためてしまったようだ。以前は、こんな時には、もう少し、もうちょっとだけという感じで、ずるずると長めの記事を毎日書いていた。そして、疲れ果てへなへな状態に陥っていた。今は、そういう気持ちを抑えることにしている。

それにしても、しんどい。

09.12.XX こんなことを書きました（その18）

◆「こんなことを書きました（その18）」

今回は、2009-12-06～2009-12-15 + α に書かれた記事のダイジェストです。

「こんなことを書きました（その17）」（2009-12-02～2009-12-10 + α ）の続きです。短い解説と、キーワードやキーフレーズが書いてあります。

※以下は、ブログタイトル「ヒト観察記」2009-12-06～2009-12-10 に掲載した記事です。このブログも、途中でうつのだん底に見舞われ、削除・閉鎖しました。

* 「ヒトいろいろ」2009-12-06：かつての「でまかせしゅぎじっこうちゅう」2009-03-10～2009-03-15 & 2009-04-06～2009-04-08 & 2009-04-23 ほど過激かつお馬鹿丸出しではなく、世相や社会の諸現象をテーマにヒトを観察するというスタンスで風刺的につづてみよう、と考えたシリーズの第1回です。「表象」「メッセージ」「脳ブーム」「所有欲」「縄張り行動」「マーキング行動」「性差」「発情期」「闘争本能」をキーワードにして、ごたごた書いています。具体的なキーワードとキーフレーズは、「筋弛緩剤」「カブトガニみたいな髪型」「石川遼君の帽子」「テレビを見ちゃダメだ」「脳科学」「4億円の申告漏れ」「かつよちゃんとリカちゃんのバトル」「ノーベル賞という虎の威＝表象」「五輪のメダリストたちによる会見」「フィギュアスケートにおける男女差別」「世界代理戦争の五輪」です。

* 「信号としての石川君」2009-12-07：石川遼君特集です。キーワードは、「信号」「メッセージ」「視線」「まなざし」「ブリオ」「コーチング」「自己啓発」「イチロー」です。かつて何度か書いた記事の「焼き直し＝二番煎じ」と「継ぎはぎ＝パッチワーク」と「リサイクル＝リユース」です。今読むと恥ずかしいです。

* 「コトバとチカラ」2009-12-08：ヒトの言語行動という広いテーマのうち、「言語による攻撃」に的を絞り、「もっともらしい悪態のつきかた」を考察しています。もっともらしく言えば、そうなりますが、結局のところは、事業仕分けに反撃しているヒトたちや集団への悪態です。キーワードとキーフレーズは、「ノーベル賞受賞者による恫喝」「マスコミの及び腰的態度」「ノーベル財団による賞金の減額」「五輪のメダリストによる金屏風会見」「金くれ」「事業仕分けというショー」「れんほう氏はきついか？」「男の嫉妬」「政権交代は政権後退か？」です。

* 「ごめんなさい」2009-12-09：どうしてテレビに出ているのか、よく分からない、と日ごろ思っているヒトたちについての偏見＝私見＝愚見を述べています。「ファンの方々ごめんなさいデー」です。キーワードは、固有名詞になりますので、記事自体をご覧ください。

*「政治とは「分ける」こと」2009-12-10：政治というきな臭い話がテーマです。やっぱり、きな臭い話は苦手だと痛感しました。抑うつ状態が悪化し、厭世観が高まるのです。キーワードは、「群れ」「ボス」「上下関係」「代わり」「わける」「切る」です。

*「きな臭い話」【2009-12-11 に書いたブログ不投稿（＝不登校）記事】：前日に火がついたテーマを蒸し返しています。かつて、この国で検閲が行われていた時期に「伏せ字」として用いられた「＝」をつかって、書かれている言葉たちに「恐怖」を演じてもらっています。とはいうものの、この記事を投稿することなく、「ヒト観察記」というブログを削除・閉鎖してしまいました。再読しましたが、また「消えてしまいたい指数」が高くなりそうなので、解説は書かないでおきます。ごめんなさい。

※以下は、ブログタイトル「うつせみついたうつせみのおと」2009-12-08～2009-12-11 に掲載した記事です。このブログも、同上の理由で削除・閉鎖しました。学習しないアホな自分に愛想が尽きました。

*「ブログ廃人と呼ばれて」2009-12-08：短いですが、キーワードとキーフレーズだけ書かせていただきます。「ツイッター兼ノート」「ブログ廃人」になっているのではないですか？「うつせみ＝空蟬＝現人＝うつを背負う身」。「うつせみ」であるブログが憑いた「ブログ廃人」の口から漏れ出た「音」をつづったブログなので、ここに書かれている言葉たちは、「うつせみついたうつせみのおと」なのです」です。

*「社会復帰はあきらめました」2009-12-09：この日と同じタイトルの「社会復帰はあきらめました」2009-11-29 をそのまま引用し、次の記事と2本立てで掲載しています。

*「続・社会復帰はあきらめました」2009-12-09：上の記事を再録した理由の言い訳をしています。「社会復帰をあきらめた」と自分に言い聞かせています。自己確認のための儀式と言えそうです。この日が「漱石忌」だったため、漱石についても述べています。

*「ブログと心中？」2009-12-10：思えば、この時期に3本のブログを並行して書いてきました。まったくもって学習しない、性懲りもない、自己破滅的なアホです。つぶやきを並べているだけなので、どうかざっと目を通して、嘲笑ってやってくださいませ。

* 「よくないなあ」2009-12-11：再読しているうちに、情けなくなって涙が出てきました。愚痴とぼやきです。

※以下は、ブログタイトル「うつせみのな」2009-12-12～2009-12-15 に掲載した記事です。このブログも、同上の理由で削除・閉鎖しました。

* 「素面でいたい」2009-12-12：抑うつ状態がままならない、処方されたお薬を飲むと頭がぼーっとする。すると書けない。でも、書きたい。いろいろなことを考えたい。そのためには、お薬は飲みたくない。そうしたお話です。心機一転しようと、もがいていません。過去1年間ほとんど本を読まなかった状況を打開するために、以前から気になっていた、あるノンフィクション・ライターの本を読み始めた、今も読んでいる、これから先も読み続けよう、と述べています。

* 「儀式」2009-12-13：ブログをつくり、つぶし、またつくってつぶすということを繰り返してきた自分の行動を反省しています。そうした行為が死の代わり＝代償の役目をしていたのではないかと述べています。そうかもしれません。きっとそうです。かわいそうなブログたち――。

* 「爪を切る」2009-12-14：心境小説というか私小説というか身辺雑記的小品です。母と自分の関係を思いつくままにつづっています。

* 「わかる (1)」2009-12-15：珍しく文体を変えて書いています。続けて読んでいる書き手の文章に影響されていたのかもしれませんが。キーワードは、「わかる」「わかる」「かわる」「政治」「経済」「実物・鏡像」「事業仕分け」「パイを分ける」です。直接書かなかったキーワードは、「坂部恵」「宮川淳」「豊崎光一」です。

* 「わかる (2)」【09.12.16 不投稿 (=不登校) 記事】：「わかる・わかる」のうち、「わかる」についてはさんざん書いてきたので、「わかる」について考えて書いてみたいと希望を述べています。体調と抑うつ状態が悪化しているなかで書いていたため、さらに悪化させないように、自制して中断しています。「わかる」は、「うつせみのあなたに」で再挑戦してみたいテーマです。キーワードは、「わかる」「わかる」「テリトリー」「しる」「かく」「かける」です。直接書かなかったキーワードは「坂部恵」「大和言葉」「クロード・レヴィ＝ストロース」「ブリコラージュ」です。

※無謀にも3本並行して書いていたブログを全部削除・閉鎖したのちに、性懲りもなく、
またもや「うつせみのくら」（過去のブログ記事の倉庫ブログ）と「うつせみのあなたに」
（新しいブログ）を開設しました。

第2部 09.12.16～10.01.21

09.12.16 二句

◆二句

2009-12-16 14:48:17 | さくぶん

■過去に開設したブログの記録

* 「ネガティブに生きる」 2008-12-19～2009-02-27

* 「うつせみのあなたに」 2009-03-01～2009-03-09

* 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-03-10～2009-03-15

* 「うつせみのあなたに」 2009-03-26～2009-04-08

* 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-04-06～2009-04-08

* 「うつせみのあなたに」 2009-04-17～2009-07-17

* 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-08-01～2009-08-08

* 「うつせみのあなたに・・・」 2009-08-11～2009-09-01

* 「小品集」 2009-09-04～2009-11-14 (ハンドルネームとして「恵」を使ったブログ)

* 「うつせみのあなたに」 2009-09-04～2009-11-19

* 「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29

- * 「うつせみのあなたに」 2009-12-01～2009-12-11
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-12-02～2009-12-10
- * 「ヒト観察記」 2009-12-06～2009-12-10
- * 「うつせみついたうつせみのおと」 2009-12-08～2009-12-10
- * 「うつせみのな」 2009-12-12～2009-12-15
- * 現在開設中ブログ：「うつせみのあなたに」 2009-12-16～

というわけで、尋常ではない状態になっています。收拾がつかず、我が身をもてあましております。手に負えません。

魂の抜け殻同然となった空蝉は、現人にどれだけでも近づくまで、冬眠いたします。

なお、当ブログの親サイトの「うつせみのうつお」に、上記のブログ記事たちが収められています。お訪ねいただければ幸いです。【注：「うつせみのうつお」は削除し、現在はありませぬ。】

二句。

冬の日に うつせみあえぎ筆を断つ

うつせみよ 眠れよ眠れ ときを待て

09.12.19 ずらす

◆ずらす

2009-12-19 17:01:01 | さくぶん

ヒトに等しく備わっているらしい言葉の「すじ」のようなものについて、知りたい、考えてみたい。言葉の「すじ」とは、この星に住むヒトと呼ばれている生き物の群れごとにある言葉の違いを超えた「何か」のことだ。「何か」と記すのは、それが「何だかわからない」からなのだが、その「何か」はわたしにもあなたにも備わっている「もの」のはずだ。

その「何か」があるから、わたしとあなたはとりあえず「わかりあう」ことができる。あくまでも、「とりあえず」である。まして、生まれ育ったところや国や、生まれてから見聞きし、あるいは読み書きしてきた言葉の異なるヒトたちとの間でも、あくまでも「とりあえず」「わかりあえる」と言えるだろう。

「とりあえず」や「ところどころ」や「ときどき」はあり得ても、「たしかに」や「すべて」や「いつも」はないだろう。「わかりあう」ことがどんなにむずかしいかは、誰もが日々感じているにちがいない。さきほど述べた言葉の「すじ」は、ヒトびとが「わかりあう」ことまでを引き受けはしない。

*

ヒトは自らが小さな生き物であることを心に留めておくべきだ。「小さな」とは、からだの大きさを指すのではなく、ヒトが己のちからについて心得るべきいましめの言葉である。ヒトはおごりたかぶっている。よく見聞きする言い方だ。あまりにもたびたび見聞きしているために、ヒトはその意味がわからなくなっている。かなしい。ヒトにとって、もはや意味がわからなくなってしまう言葉や言い方は、ほかにもたくさんある。

意味がわからない言葉や言い方を、口にし文字として記す。そのときに、わからなくても気にならないのは、ヒトが「わく」にとらわれているからである。「わく」はヒトを縛る。やすらぎを与えもする。ヒトは「わく」を免れることはできない。「わく」のなかで生きているのに気づくのはまれだ。

「わく」はひとつの「すじ」だと言える。考えたり気づいたりしないのが「すじ」である。さきほど述べた「すじ」、つまり、ヒトに等しく備わっているらしい言葉の「すじ」ほど、とらえにくく、わからないものはない。なぜなら、とらえ、わかろうとするものこそが、「すじ」だからである。

言葉の綾なのかも、もっと深いところで起こっている「もの」や「こと」なのかも、わからない。この先に立ち入るのは、今はやめておこう。ややこしいことになりそうだ。

*

「すじ」を「わく」と言い換えてみよう。「言い換える」を「ずらしてみる」と言い換えてもいいだろう。「すじ」と「わく」との「ずれ」とは、どんなものなのだろう。「すじ」は糸で「わく」は広がりだと、たとえるのもおもしろい。「たとえる」も「ずらす」ことだ。

このように、言葉をずらし、ほぐす。そうすると、違ったものに見えたり聞こえたり感じられたりする。あやしい。どうしてなのだろう。いつか、考えてみたい。

*

話をもどそう。「すじ」を「わく」と言い換えてみる。「わく」は「広がり」だから、「ふち」がある。「すじ」と呼んでいるものに「ふち」があるようには感じられない。いきなり「ふち」が出た。この「出あい」が「ずれ」なのではないか。とはいうものの、置き換えてみたのだから、話が変わるのは当たり前だ。たとえるときには、おのれがすり替えをしていることに心をとめなければならない。

とはいうものの、何が何にすり替わったというのだろう。言葉が言葉にすり替わっただけ。あるいは、心に浮かんだ、ある「かたち」や「もよう」、あるいは「ころもち」が変わっただけ。ヒトができるのは、せいぜいそれくらいのことだ。こんなとき、ヒトは小さいとつくづく思う。

「わく」という言葉を口にし目にすると、縄で囲まれた土の広がりがあたまに浮かぶ。縄が「さかい」となり、「うち」と「そと」にわけられる。いわゆる「なわばり」である。

*

思いつきだが、「わく」とは「なわ」ときわめて近いものではないだろうか。もちろん、張られた縄である。だが、縄は縛る。また、捕らえたものを捉えておくこともできる。

これも思いつきだが、「なわ」と「いと」とは近い。ともに、「すじ」でもある。縄も糸も筋も曲がる。どんな形を「なぞる」こともできる。「なぞる」とは「まねる」と近い。そうすると、「ならう」「まなぶ」「しる」「える」「みにつける」といった言葉が浮かぶ。

言葉が浮かぶとも言えるが、「ずらす」、「すりかえる」、「いいかえる」、「おきかえる」というふうに、「ずらしていく」とも言える。

そんなにたやすく、ヒトが言葉を操れるものだろうか。むしろ、言葉がヒトをもてあそび、「ずれる」、「すりかわる」、「いいかわる」、「おきかわる」というふうに、「ずれていく」のかもしれない。きっと、そうだ。ヒトは、「すじ」に身をまかせるしかない。ヒトは言葉のしもべなのだ。

*

忘れてならないことは、今、わたしとあなたとの間にあるのは言葉だという点だ。言葉を介して、「わかりあおう」としている。この言葉というものは、縄であり糸であり筋に似ている。どんなふうにも、折ったり、曲げたり、捻ったりできそうな気がする。

それでいて、折られ、曲げられ、捻られているのは、ヒトのほうなのだ。ヒトは、もてあそばれている。だが、ヒトはそれを認めようとはしない。

小さなヒトが、この星で群れを成し、言葉を相手に戯れている。遊んでいる。あるいは、もてあそばれている。ここでの「戯れ」と「遊び」とは、「なぞる」「まねる」「ならう」「まなぶ」「しる」「える」「みにつける」ときわめて近い。

小さなヒトは、今述べた縄や糸や筋の絡み合いのなかを生きてきた。いうまでもなく、ほかの生き物たちにも、「わく」や「すじ」があり、「なぞる」「まねる」「ならう」「まなぶ」「しる」「える」「みにつける」はあるだろう。違いは、あるがままのさまに在るか否かだ。あるがままのさまにないのが、ヒトであることだと思う。

*

それにしても、ヒトは、ずれている。なみはずれて、ずれている。かつて尻尾のないサルのはたまたまのなかで、何かがずれ、ヒトとなった。そうして、それまでのあるがままのさまから、はずれた。そんなものがたりを思い出さずにはいられない。あれは単なる語りかそれとも騙りか。確かめることができるたぐいの話ではなさそうなのだが。

ヒトは、いま、おのれのあたまのなかを、のぞこうとしている。皮をはぎ、骨をくわいて開き、なかにある「もの」を、みて、わけて、とらえようと、たくらんでいる。開いたところで、これも、とらえることができるたぐいの話ではなさそうなのだが。

そればかりではない。ヒトは、親から子へと受け継がれていく、いのちの「すじ」の仕組みを解きほぐすわざにも、血道をあげている。病を治し、豊かな実りを手にするためだというのだが。解きほぐしたところで、ほぐしきれるたぐいの話なのだろうか。

ヒトはわかる。わけてわけまくる。幾度も皮をむいて、何やらまた皮が出てきたらしい。小さな小さなつぶが見えてきたという。そのあやしい動きを目にして喜び勇んでいるもようだが、ヒトの小ささに重なる。ヒトはおのれが小さいから、わかるのだ。ヒトがわかるのは小さいからだ、といってもおなじ。小さなつぶをさらにわかる。つぶつぶ。ぶつぶつ。いくらわけたところで、わかるたぐいの話とは思えないのだが。

ヒトは、さらに、この星のそと、彼方にまで目を向けている。遠くに目を向けたところで、見えるたぐいの話とは思えないのだが。

*

上に挙げたことどもは、ヒトには荷が重過ぎる問いではないだろうか。ただし、ヒトが大きいと思込んでいる人たちには、そうは感じられないという気はする。そういう人たちにとって、「わく」と「なわばり」は、これから先も広がり続けるゆめであり、うつつなのだろう。彼らは現人であって空蟬ではないことは確かだと思う。わたしとは大違いだ。

いま、わたしは、うつせみの彼方に居るような気がする。これをお読みのうつせみの貴方は、どちらに居られるのでしょうか。

09.12.20 かえるのではなくてかえる

◆かえるのではなくてかえる

2009-12-20 17:05:00 | さくぶん

かえるのではなくてかえる、と書かれているのを見て、ほらほら、こいつ、やっぱり狂っているぞ、と思う人がいてもおかしくはない。とはいえ、とりあえず、狂っているかどうかは脇に置こう。

いま、わたしはある試みをしている。きのうから書きつづっている言葉を読んでいて気づいたむきもあろうが、できる限り、やまとことばを選んで書いている。

こうした戯れは、前にもやってみたことがある。からことばとやまとことばの違いに詳しくないわたしにとってはまことに骨が折れるが、これがやたら楽しい。そういうわけで、戯れにはちがいないのだが、わたしにとって愉しき企みでもあることを知ってほしい。きのうも書いたように、こうやって、わざと「ずらしている」のである。

もっとも、玄人からみれば、でたらめで穴だらけであろうが、かまわない。いや、致し方ないというべきか。素人のわたしに玄人のわざができるわけがない。あくまでも、お遊びであり戯れにはちがいないが、真っ向から体当たりしているのも確かだ。

*

わたしは自らをとらえている「粹」を「ずらす」ことにより、言葉が放つさまざまな思いや形や様を「変えよう」としているのだ。そう、「変える」のであり、「替える」のであり、「代える」のであり、「換える」のであり、もしかすると「孵る」のである。

あえて、やまとことばを選び使うことによって、どこかに「帰ろう」としているわけではない。そう、「帰る」のでも、「返る」のでも、「還る」のでもない。思い違いをされているかもしれない。そんな思いが浮かび、このような「断り」、つまり「事割り」、つまり「理」をしている。

*

「帰る」とか「戻る」と言う人たちがいるが、どこに帰り、戻ろうとするのだろうか。そもそも、戻り帰れば、どこに行き着くというのか。かつて、やまとことばと似た言葉が、この島々のそばにもあったという。詳しいことは知らない。また聞きでしかない。

みなもとをたどっていったとき、その源とおぼしきところが、この国の島々のそとにあることも、大いにあり得ると心得るべきだという気がする。ただし、わたしは、そうした穴掘りにも、うちわの争いにも加わる気はない。きな臭い話になるのが落ちだろう。

きな臭い話は苦手だ。大の苦手だ。うつせみの身には毒だ。

だから、「かえるのではなくてかえる」のである。「帰るのではなくて変える」のだ。こうした遊びこそが、「変える・替える・代える・換える」であり、あるいは、ひょっとすると「孵る」なのである。こうやって戯れるのが楽しい。

「帰る・返る・還る」ごっこは、楽しくない。おもしろくもない。心を動かされることもない。「正しい」「正しくない」ごっこに似せた偽物だったり、根も葉もないかたりが多い。それだけでなく、縄張り争いに付き物の血のにおいがするし、群れとしてのヒトびとのいづく思わくが見え隠れするのも嫌だ。早い話が、潔くないのだ。

*

「変える・替える・代える・換える」ごっこは、あやうく、あやしい。「帰る・返る・還る」ごっこも、あやうく、あやしい。ただし、「変える・替える・代える・換える」には、「あやめる」はそぐわない気がする。だが、「帰る・返る・還る」には、きな臭いだけでなく、血のにおいがする。弱くて、もろい、わたしには「帰る・返る・還る」は似合わない。

思えば、やまとことばやからことばのはらからとおぼしきことばたちが、この国の島々の近くにある。かつてのはらからが、いまとなつては、かたきだと言うのか。ああ、きな臭い。うつせみがなき出しそうだ。うちわもめほど悲しいものはない。これもヒトの「すじ」か。

きな臭く、生臭いことどもは、ひとさまにまかせよう。その道のひとたちにまかせよう。わたしは素人にすぎない。争いは争いの玄人に、ことわりはことわりの玄人にまかせればいい。「戻る」「帰る」といった言葉の穴掘りは穴掘りの玄人にまかせればいい。わたしは何にひいでているわけでもない。わたしはわたしのやり方で、言葉とたわむれる。というか、言葉にもてあそばされるだけ。

*

きのうは、「ずらす」について書いた。きょう、裏仕事の「うつせみのくら」でしこしこやっていて、どういふわけか、「ずれる」に出あった。「かつらはずれる」とあり、わ

らってしまった。相変わらず同じことをやっている。それがおかしくもあり、なさけなくもあった。【注：「うつせみのくら」は、過去のブログ記事を再ブログ化（二番煎じ）しようとする試みでした。これも頓挫して、現在はありません。】

どうやら「わく」にはまっているらしい。「なわ」に縛られているらしい。「わな」にも、はまりこんでいるらしい。ただごとではない。ことの次第をさとり、わなわなとわななけというわけか。いや、そんなわけはない。わらえばいいのだ。

ところで、数々の生き物のなかでヒトだけが笑うというのはまことか。だとすれば、大いに笑えば「ヒトであり」ということか。笑わないのは「ヒトでなし」。ああ、「くだらない」。「百済ない」。「百済の話はなし」。おっと、話がきな臭いほうに流れそうになった。くわばら、桑原。

桑と言えば、おかいこさんの食べる葉のしげる桑の木には、もとからこの島々に生えていたものと、そとから入ってきたものがあるという。「そと」と「うち」と「ふち」。こうした話をするとき、きな臭い話と重なるところがでてくるのは致し方ない。

そうだ、「そと」と「うち」と「ふち」。わたしは、そうしたことについて考えてみたいのだ。杵や縄や筋は、そのためにある。

*

「わく・杵」「なわ・縄」「すじ・筋」。きのうは、そうした「こと」や「もの」について書いた。「ことば・ことのは・言葉」を広くとらえるなら、音や声や、それらを記したものにとどまらず、ヒトがおのれの周りにある、あるいは遥か遠くにある、あるいはおのれの頭に浮かぶ、さまざま「もの」や「こと」を「あらわした」ものすべてを含むべきであろう。

そのとき、「わく・杵」「なわ・縄」「すじ・筋」は、大きな役割を果たしてくれるという気がする。考えを進めるにあたり、支えとなってくれるような気がする。音、声、まなざし、めくばせ、かおつき、みぶり、てぶり、すがた、かたち、うごき、はたらき、あらわれ、つくりもの、外に在るさまざまな物や事どもにヒトが見てしまうものやことども……。

そうした「もの」や「こと」が、つらなり、つながり、かたちとなって心に浮かぶ。なにひとつ、「ひとり」ではない。「ひとり」に見えるものも、どこかで何かに「つながっている」。その「つながり」を支えているのが、「わく・枠」「なわ・縄」「すじ・筋」ではないだろうか。

*

わたしは、いま、あえて、ひとさまとはいささか異なった言葉づかいをし、異なった言葉の記し方をしている。わたしにとって、書くことと考えることは同じとは言えないまでも、深くかかわっている。からみ合っている。なぜかは、わからない。そういうふう生きてきたとしか言えない。癖という言葉もあたまたに浮かぶ。

ひとさまについては知らない。書くことと考えることが、ひとさまにとって、どんなふうになっているのか。わたしは知らない。そもそも、おのれにとって書くことと考えることが、どうからんでいるのかさえ、わたしにはわからない。わからないから、書く。書いて、手がかりをさがす。

わたしにとって書くことと考えることが深く結びついているとは、思いつきでしかないような気もする。ただ、書くことにより、言葉や思いが呼び寄せられ、思いがけない出あいが起こり、あれよあれよというふうに言葉がつづられていく感じは打ち消しがたい。それがこちよい。

つまるところは、出まかせだ。出るに任せる。でまかせ。わたしの大好きな言葉のひとつである。ヒトはそれしかできないと、それに喜びを見出し深い親しみを覚えるようになるらしい。

*

書くことにみちびかれながら考える。「でまかせ」を「ずらす」と、そうも言える。ものは言いよう。とりあえず、そういうことにしておこう。さしあたってまず、そこから歩みだそう。そもそも、わたしは、正しい正しくないごっこをやっているわけではない。

誰に頼まれたわけでもない。好きでやっているだけ。

ただ、ついやりすぎてしまう。度を過ぎてしまう。その癖が曲者だ。

そろそろ、しんどくなってきた。書きすぎたのだろう。うつせみがなき出しそうだ。みーん、みーんと、なき出すまえに、ネコを呼ぼう（※ちなみに、ネコはうちの猫の名）。なぐさめてもらおう。

09.12.21 とりとめもなく

◆とりとめもなく

2009-12-21 17:16:39 | さくぶん

2回にわたって、できるかぎり大和言葉系の語を用いて文章を書くという実験をしていました。酔狂というのでしょうか。でも、信じてもらえないかもしれませんが、真剣なんです。本気なのです。正気だと申し上げる勇気はありませんけど。

その実験は戦略でもありました。大和言葉系の言葉を多用することで、自分がとらわれている「杵」を揺らし、ずらす。そんな企みです。ヒトは誰もが「杵」にとらわれています。誰ひとりとして、免れることはできません。ただ、個人的には、「杵・縄・筋・糸」といった一連の言葉たちは、ヒトの知覚や認識や言動を「支えている」、あるいは「導いている」「力」のようなものとしてイメージしています。

「杵・縄・筋・糸」は、いくつもあり、それらがからみ合っているという感じもします。たとえば、母語である日本語という漠然とした「杵」、これまで自分が体験してきた結果として身に付いていると思われる多種多様な癖や行動の錯綜としたパターン、さまざまなこだわり、何を快と感じ何を不快と感じるかという気まぐれきわまりない好悪の判断

などが、頭に浮かびます。

*

これまでいくつか開設したどれかのブログの中でも触れましたが、「ネガティブに生きる」というタイトルで、自分にとって初めてのブログを書いていたころから、時折メッセージを送ってくださっている方がいます。仮にHさんとしておきます。先日もメッセージをいただきました。

>「あんた、このごろちょっと落ち着いてきたみたいだけど、もうブログを潰すのだけはお止めなさい。悪い癖よ。試しに“うつせみのあなたに”でも、“うつせみのうつお”でもいいから、キーワードにしてググってみなさい。消えたブログの記事がうようよ出てくるから。きったないったら、ありやしない」

以上のような、心やさしいお叱りの言葉をちょうだいいたしました。言葉遣いはややきついです、本当にやさしい方なのです。そのお言葉を読んで、ああ、これも自分の癖、つまり「枠」の一種だなあ、と思い反省いたしました。ただ、ちょっとだけ弁解をさせてください。ブログを削除・閉鎖したさいの自分の精神状態は、かなりせっぱ詰まったものだったのです。

あれは、いわば生贄をささげる儀式であり、あのような行為をしなければ、自死におよんだかもしれないほど精神的に追いつめられていたのです。うつのだん底というやつです。その中での「あがき」というか、癩癩とか、ヒステリーのたぐいだと言えるかもしれませぬ。

*

ヒステリーで思い出しましたが、どうやら自分にはヒステリックな性格の人を引き寄せる「筋」のようなものがあるみたいなのです。このブログは、家の者には内緒で書いているので、書いちゃいますが、親も癩癩持ちですが、わけあって一緒に住んでいる人も、かなりヒステリックな面があります。

物心がついたころの遠い記憶の中でも、母はしょっちゅうヒステリーを起こしていました。原因が、こちらにあったことは確かです。夫と別れた後、うじうじした性格で頭のとろい子どもをひとりで育てていたのですから、癩癩も起こるでしょう。

今、「夫と別れた」と書きましたが、実際には、あの男は借金を妻に押し付けて逃げたのです。そんな事情があって、自分が物心がついたときには、母子寮で生活していました。生活保護を受けていたとのこと。母は愚鈍な子を寮母さんに預け、朝から晩まで外で働いていました。この時機になると、夜遅く母子寮に帰ってくる母を待っていた自分が、寒い冬の宿直室で寮母さんと向かい合って火鉢に手をかざしていた記憶がよみがえってきます。

三人くらいいた寮母さんたちは、交代で寮に泊まっていたから、子を預けっぱなしでどんなに遅く帰っても、心配は要らなかったようなのです。でも、当時の働く女性たちのほとんどがそうであったように、薄給での長期勤務は当たり前。母にとっては、さぞかし、苦しく、つらかった毎日だっただろうと思います。

だから、母のヒステリーを責めるわけにはまいりません。一種の甘えだったのでしょう、自分が母をわざと怒らせたことが頻繁にあったのを覚えています。それにしても、怖かった。母はものすごいヒステリーを起すのです。

「〇〇ちゃん、きのうの晩、お母さんがヒスを起したでしょう。こっちまで、声が聞こえたよ」

何度か、「おばちゃん」たち、つまり同じ寮に住むほかの家族のお母さんたちから、翌日に言われたものです。母子寮は「コ」の字形の大きな建物の中に保育園と「同居」していて、「コ」の真ん中が中庭、縦の線が渡り廊下だけの棟で、向かい合わせの二棟に分かれていました。「こっちまで、声が聞こえたよ」という上の言葉は、たいてい、向かい側の棟にある部屋に住むおばちゃんたちの口から出てきたものでした。

*

すごいヒステリーだったということが、お分かりいただけたでしょうか。また、ヒスを浴びていたのが、すごい悪がきだったということも、お分かりいただけたでしょうか。

この種の話は、トラウマだの児童虐待だのといった物語に流れ還元されがちです。そうしたステレオタイプ化された話を聞かされることは、当事者にとっては、決して気持ちのいいものではありません。少なくとも、自分にはそう思えます。人によって違いはあるでしょうが、自分の場合には、過去の体験をそうした物語に置き換えても、何ひとついいことはありません。癒やされもしません。

自分にとって、今、関心のあるのは、過去の体験の断片や、過去の体験について自分がたぶん恣意（しい）的にいんでいるイメージが、「杵・縄・筋・糸」となっているのではないかという点に絞られます。

杵は囲む。縄は縛る。筋は通る。糸はつながる。いずれも、ヒトを規制し、支え、支配し、導くものとして、働きかけるもののように思えます。その仕組みに興味があります。「杵」をずらすと称して、奇妙な日本語で言葉をつづりながら思考してみる。そんなとちくったことをしていたのも、そうした関心からくる試みなのです。

*

「杵・縄・筋・糸」といった言葉とイメージについて、このところ、ずっと考えているのですが、そのさいに思いが自分の遠い過去の記憶へと向かっていくのを強く意識します。思うままに書きつづり、考えを進めていくうちに、つい個人的な話になってしまいました。

上記のような私小説的なお話は書かずにおく手もあるでしょうが、きょうは、あえて書いてみようとする心向きに逆らうことなく、素直に従いました。暗い話になって、ごめんなさい。個人的な話になったついでにぶちまけるというわけでもないのですが、さきほど触れた「どうやら自分にはヒステリックな性格の人を引き寄せる「筋」のようなものがある」という点を、もう少し具体的に書き考えてみたい気になりました。

母も自分も交際が薄い性質の人間です。他人やほかの家族と親しく交わるということは、物心ついて以来、経験したことがありません。たとえば、母子寮で暮らしていた時期を思い起こしても、同じ屋根の下で住んでいるのは確かなのですが、ほかの寮生たち（※母子寮に住む家族たち）との間で一線を越えることはありませんでした。どこか孤立

したところのある母子だという印象を、ほかの人たちに与えていたのではないかと想像しています。

*

自分がいわゆる思春期をへて何年か経ったころの話に飛びます。

親から精神的にも物理的にも離れた生活をするようになり、友達とか親友と呼べる人とめぐり会うことなく生きてきた中で、まれに突如として、「一線を越えた」付き合いをするようになる人があらわれることがありました。この辺の事情については、ぼかした書き方をさせていただきますが、端的に言えば「一緒に暮らす」という意味です。

その相手がどういうわけか、決まってヒステリックな人なのです。なぜか、そういう人を引き寄せてしまう、あるいは、こちらが引き付けられてしまうのです。不思議です。わけがわかりません。気が付くとそうなっている。そんな感じだとしか言いようがありません。

運命、宿命、定めといった、手垢の付いた言葉や物語も頭に浮かびますが、実際問題として、そんな作り話はどうでもいいです。「そうなっていること」の大きさに比べれば、言葉や物語やイメージなんて小さなものです。ただ、ヒトはそうした小さなものを相手にするしかありません。

*

ヒトは分けます。切り分けます。それは、自らが小さいために、おのれに合わせて小さく分けているだけだ。そう思います。その「分ける」さいの道具が、「杵・縄・筋・糸」なのだと言えそうな気がします。「分ける」「切り分ける」かに見えて、実際には「杵・縄・筋・糸」で「くくる」「囲う」「境目をつける」「線引きする」だけなのかもしれないとも思います。

とはいえ、ヒトの「線引き」や「縄張り」が、この惑星のほかの生き物たちの生態にまで大きな影響を与えている。そして、ついには「自然」や「環境」と呼ばれている、ひと

つの「生き物」としてのこの惑星自体の「生態」にまで多大な危害を及ぼそうとしているのです。

きな臭いとか生臭いという気持ちは、自分の場合、ふつうヒト同士の争いで感じる個人的な思いなのですが、事態はヒト同士どころか、この星レベルにまで及んでいるようです。この数日間にわたってテレビのニュースや新聞で大きく報道されていた国際会議がありました。その報道を見聞きしていると、この惑星にとって、きわめてきな臭く生臭い事態が進行しつつあると思えてなりません。

つまり、この惑星を事実上掌握しているヒトとその子どもたちにまで及ぶ危機が進行しつつあり、やがては自らの破滅に至る事態が迫っているということにほかなりません。あの会議場の様子を、映像としてご覧になりましたか。やはり、きな臭いですね。会議場の外で叫んでいる人たちの映像も、きな臭いものでした。悲しいです。

*

きょうはあちこちと話が飛び、いつものトリトメのない文章に輪をかけた、まったくもってトリトメのない記事になってしまいました。肩がぱんぱんに凝ってきたので、この辺で失礼します。上で引用したHさんのお言葉を有り難く受け止め、それに従いたいと思います。

頑張らない。そこそこにして、作業はやめておこう。

足元にいたネコを抱き上げ、膝の上にのせました。お腹の部分がとても温かいです。ということは、ネコにとっては冷たいということか。ごめんね.....。もう少ししたら、PCの電源を落とそうと思います。

09.12.22 パラレル

◆パラレル

2009-12-22 18:56:27 | さくぶん

現在、「うつせみのくら」というブログを「倉庫」に見立て、過去の記事を順々に収めています。「収めている」というより、「ぶち込んでいる」という感じでしょうか。なにしろ、1日に10日分ほどを再録しているのです。きのうの記事でも触れたHさんから今朝いただいたメッセージの中でも、「あんた、あのペースはやりすぎ」とのご指摘を受けました。【注：「うつせみのくら」は削除し、現在はありません。】

とはいえ、「うつせみのうつお」は読みにくいから再ブログ化したらどうか、と勧めてくださいの方々のひとりが、Hさんなのですけど。【注：過去のブログ記事を収めたサイトである「うつせみのうつお」は削除し、現在はありません。】

でも、あれくらいのペースでやらないと片づきそうもないのです。何を焦っているのか、とお思いの方もいらっしゃるでしょうが、自分には「いざ思い込んだら一直線(=ネコまっしぐら)」みたいなところがあります。落ち着いてブログを書くためには、あの作業は早く終わるほうが自分にとっては好ましいのです。

日記は付けていませんが、ブログは日記のような役割も果たしていますので、昨年の記事を徐々に再録しながら、ちらりとその文面に目をやり、「ああ、自分は同じことばかり書いている」と半ばあきれの一方で、その文章を書いていたころの記憶が不意によみがえってきて、しばらくぼんやり追憶にふけることもあります。

*

パラレルワールドなんて言葉を、見聞きすることがあります。SFやゲームで使われているのですか。自分はその分野は苦手で、どんなものなのか詳しくは知りません。知りたいという気持ちも、特にありません。ただ、パラレルという言葉とそのイメージは好きで、よく考えます。

パラレルワールドはさておき、個人的なイメージとしては、生きていること自体がパラレルとも言えるという気がします。ひとさまに比べれば、そうとう単調な日常生活を送っていますが、あたまの中は、かなりパラレルというか、勘違い平行棒状態が常態化しているみたいです。パラパラ、レロレロ、ツーツー、レロレロ、パラソル、かさかさ、傘傘、笠笠、重重なんて、感じでしょうか。

生きていると、いろいろなものが「重なる」「並ぶ」「並んで進む」「ダブる」「ぶれる」「ぼける」わけですから、その意味では、生きていることは一種のパラレル状態と言えそうです。言葉は何とでも言えます。そのでたらめぶりには圧倒されます。だから、言葉や語や語義やイメージは、全部パラレルな関係にあると思っています。話がややこしくなりますが、「価値」や「量」や「質」が「同じ」という意味ではありません。「同列に在る」という位置関係を問題にしています。

そんなわけで、同義語とか対義語なんて区別は、ずいぶん怪しいものだという気がしてなりません。言葉は、実にご都合主義的な仕組みで動いていますから。

*

資本主義の対義語が共産主義だと信じられていた時代がありました。でも、そんな話は今思えば真っ赤な嘘でした。ちなみに、民主主義の逆は全体主義でしょうか。独裁主義もそうでしょうか。そもそも民主主義なんて言葉やイメージ以外に存在しているのでしょうか。やっぱり、前提からして怪しいし、うさんくさいのです。

ところで、ポジティブの反対がネガティブだなんて、冗談は顔だけにしてくれのジョークであることは、自己啓発書だけがよく売れる現在を生きているヒトたちには、常識ではないでしょうか。本屋さんで20冊ほど斜め読みしながら立ち読みしてみると、言い方が異なっているだけで、言っていることは同じ、同列、つまりパラレルみたいです。

抑うつに悩まされている自分は、「頑張る」の逆は「頑張らない」というお話に、未だに騙され続けています。両者は、同じと言えば同じ、違うと言えば違う。つまり、パラレルなのです。

ちなみに対義語の対義語は、同義語と呼ばれているようです。そして、その同義語の同義語として類語というものもあるようです。

で、今、類語辞典を見ているのですが、たとえば、「正義」の同義語として、公正、真実、正確、本当なんて並んでいます。こんなのをパラレルにしていいいのでしょうか。あまりにも馬鹿らしいので、類語辞典は閉じました。

*

このブログでよくやる「ずらす」「かえる」「置き換える」「こじつける」という作業で、言葉を並べると同じくらい馬鹿らしいです。どうやら、その「馬鹿らしさ」こそが、言葉の「真骨頂」とか「神髄」とか言われているもののようです。

でも、この「馬鹿らしさ」と付き合っていないかぎり、ヒトはヒトとして生きていけないことも確かです。要は、その「馬鹿らしさ」を「真っ向から」「真剣に」「本気に」「誠実に」「真面目に」受けとめるかどうかです。

自分の場合には、その「馬鹿らしさ」をできるだけ「正確に」受けとめようと、常に心がけています。みなさん、ここは笑っていただくところなので、どうか、嘲笑なり、苦笑なり、哄笑なり、微笑なりなさってください。

*

パラレルに話を戻しますが、parallel という英単語を「ジーニアス大英和辞典」で引いてみると、語源に「(わきに) + (お互いの) = お互いのわきにいる」という意味の説明が載っています。

とにかく、並んでいる、連なっている、列を成している、というイメージですね。その「並んでいるものたち」がどういう関係にあるかには、とても興味があります。さきほど、「ただ、パラレルという言葉とそのイメージは好きで、よく考えます」と書いたのは、そういう意味です。

*

冒頭で述べたように、「うつせみのくら」とパラレルにこのブログを書いています。冬眠から覚めてしまって、書いています。そして、自分がブログを初めて書き始めたころから金太郎飴みたいに同じことばかり書いている、つまり、パラレルをやっていることに気づきました。

で、何をどうパラレルしているのかと申しますと、「さまざまな言葉をパラレルなものとして扱う」とでも言えるような作業をえんえんと繰り返しているのです。それと同時に、つまりパラレルに、そのパラレルに並んでいる言葉たちの「ズレ」「間・あいだ・あわい」「境・さかい」「際・きわ」「差異」「違い」「関係性」を、パラパラ、レロレロ、ツーツー、レロレロ、パラソル、かさかさ、傘傘、笠笠、重重なんて感じで、勘違い平行棒的に、ああでもないこうでもない、ああでもありこうでもあるという調子で、でまかせにじっこうしているのです。

で、くだいですけど、本気でやっているのです。正気かどうかは別にして、ですけど。

*

以上が、今の自分が日々体験し、生きているパラレルワールドなのです。宇宙とか次元とか現実とかいうような大風呂敷、失礼、高級なお話とは無縁の、4畳半のパラレルワールドでの話なのです。

なにしろ、あたまで「うんうん、なるほど、そうなのか」と地動説の「正しさ」をおのれに言い聞かせるよりも、空を見上げて「ああ、お日様が動いている」というふうに天動説を体感するほうが身の程に合っていると常日頃から思っている横着者なのです。

それでも天は動く。そんな乗りです。

09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）

◆日本語にないものは日本にない？（1）

2009-12-23 18:52:48 | さくぶん

本を読むのは好きではありませんが、これまでに何冊の本を買って求めたことでしょうか。そして、積読し、あるいは斜め読みや目次だけ読みやあとがきだけ読みだけをして、いつの間にやら処分してしまったことが、どれだけあったでしょうか。また、わざわざ図書館に向いて借りたものの、斜め読みや目次だけ読みやあとがきだけ読みだけをしたならまだしも、全然読まないで返却したことが、何度あったことでしょうか。

本については、だいたいそんなお付き合いしかしたことがありません。もちろん、例外もあり、いちおう全体を読み通したものもあります。ただ、内容がたまのうちに残っていないため、あれとこれを読んだという具合に、思い出せないのです。フィクションでも、ノンフィクションでも、事態は変わりません。

あとは、今書棚にある本たちや、押入れの中に積んである段ボール箱に詰められている本たちと、どう付き合っていくかです。「枕頭の本」や「愛読書」という言葉があります。要するに、愛着があるため手元に置き、頻りに目を通す本のことですね。それなら、あります。ただし、正確に言うと、短編集に入っている短編ばかりです。愛読書というより、愛読短編作品というべきでしょう。今、書棚を眺めているのですが、やはり短編集が多いです。エッセイ集のたぐいも目につきます。

長編は駄目です。読めません。途中でわけが分からなくなります。脳の記憶容量というか、情報処理能力がひとさまに比べると劣るといえる気がします。これは、幼いころから感

じていたことです。だから、「ヒトは、1度に1台のテレビ受像機だけなら、マジで観ることができる。＝ヒトは、1度に2台以上のテレビ受像機を、マジで観ることはできない」（「人面管から人面壁へ」2008-02-10 から引用）なんて書いたりするのだと思います。

あれって、「ヒトは」などと一般化しながら、実際には個人的な能力について感想を述べているだけなのですね。恥ずかしい限りです。

*

以上述べたように、本を読むのが苦手で、記憶力がとても悪いのですが、今、ある本に書いてあった断片的な記憶を必死でさぐっているところなのです。きっと、きわめてあいまいな話になると思いますので、あらかじめお断りしておきます。ごめんなさい。

確か、その本には「日本語にないものは日本にない」という意味のことが書かれていたような気がするのです。タイトルも著者名も覚えていません。ただ、「日本語にないものは日本にない」の一例として、「社会」が挙げてあったことだけは覚えています。

明治維新以後に欧米の文化を取り入れるさいに、「社会」という言葉と、「社会」に当たるものが、この国に存在しなかった。で、英語の society やそれに相当するヨーロッパの言語の単語を日本語に翻訳しようとして苦労し、「社会」という言葉を造語した。

そんなような話でした。あいまいですよ。こんな場合には、そのいわば「幻の本」については忘れて、というか読まなかったことにして、上述のような「説」があるという前提をでっちあげて、話を進めるのがいいかと思われま。つまり、ここでフィクションを繰り広げるのです。

*

「フィクションを繰り広げる」と書いてしまいましたが、言葉を用いて話したり書いたりすることは全部「フィクション＝作り話」であると、自分は考えています。したがって、そもそもが「謎の本」の有無はどうでもいいと考えることもできます。

そうしましょう。あの本のことはどうでもいいことにします。「社会」という造語のことは、ひとさまのお話ですので、忘れます。

*

さて、「日本語にないものは日本にないのか」という問題について、考えてみます。このブログで書いた「ずらす」2009-12-19 と「かえるのではなくてかえる」2009-12-20 という2本の記事では、わざと大和言葉系の言葉を選んで書くという実験をしました。

自分にとって「書く」と「考える」は近い行為です。書くときには「言葉＝語」を使います。「言葉＝語」はたくさんあります。たとえば、あることを書こうとする場合に、「ヒト・人・人間・人類」のうちのどれを選んで使うかに迷うことがあります。「あの人・あの方・〇〇さん・彼女（彼）」や、「ある人・ある方・仮に〇〇さんとしませんが・知り合いの人・友人」についても、同様に迷います。

「です・ます」調と「だ・である」調のいずれを使うか、どの「言葉＝語」を用いるか、漢字にするかひらがなにするかカタカナにするか、読む対象としてどんな年齢層を想定するかなど、「書く」という行為にはさまざまな「選ぶ」という行為が伴います。

個人的な癖なのか、多くの人たちも同じような経験をしているのかは、尋ねる相手がないので分かりませんが、まず文体を選び、次に言葉＝語を選びながら、文をつづっていくという行為は、考えるさいの「方向＝進行＝展開」に大きくかかわっているような気がしてなりません。少なくとも、自分にとっては、ですけど。

みなさん、どうお思いになりますか。「書き方」で「書く内容」が変わるなどというのは、あまりにも行き当たりばったりというか、テキトーで出まかせ主義的でしょうか。

*

ちょっと話をずらします。

さきほども触れた「ずらす」2009-12-19 から、いくつかの部分で「自己輸血＝自己引用」し、それを「ずらす」、つまり「書き換える」ということを、以下でやってみます。A) が引用文で、B) が書き換えた文章になります。この時点では、B) がどのような文章になるかは予想がつきません。さて、「書く＝考える」の実験をしてみます。

*

A) それにしても、ヒトは、ずれている。なみはずれて、ずれている。かつて尻尾のないサルのおたまのなかで、何かがずれ、ヒトとなった。そうして、それまでのあるがままのさまから、はずれた。そんなものがたりを思い出さずにはいけない。あれは単なる語りかそれとも騙りか。確かめることができるたぐいの話ではなさそうなのだが。

B) それにしても、ヒトは、ずれています。途方もなく、ずれています。太古に尻尾のないおサルさんの脳の中で、ズレが起きて、ヒトという種（しゅ）になった。そんな「お話＝フィクション＝説＝与太話＝でたらめ＝でまかせ」を思い出さずにはられません。あのようなガセを検証するなんて、そもそも可能なのでしょうか。

*

A) ヒトは、いま、おのれのあたまのなかを、のぞこうとしている。皮をはぎ、骨をくだいて開き、なかにある「もの」を、みて、わけて、とらえようと、たくらんでいる。開いたところで、これも、とらえることができるたぐいの話ではなさそうなのだが。

B) 今は脳ブームですね。脳の研究者を自任するヒトがたくさんいます。脳にいいことばかりするオーソリティーのひとりが、最近、自分の欲ボケだけは解決できなかったことが知れて問題になりましたが、ああしたブームやその立役者たちのうさん臭さを垣間見る思いがしました。

*

A) そればかりではない。ヒトは、親から子へと受け継がれていく、いのちの「すじ」の

仕組みを解きほぐすわざにも、血道をあげている。病を治し、豊かな実りを手にするためだというのが。解きほぐしたところで、ほぐしきれぬたぐいの話なのだろうか。

B) ほかにも例を挙げると、遺伝子の研究が急速に進んでいますね。たとえば、病気の治療に役立てるとか、遺伝子組み換えなどの技術により農作物を増産させるといった大義名分のもとに盛んに行われています。でも、何でもDNAに還元できると言いたげな、能天気さと傲慢さのミックスサンドみたいな節操のなさを感じませんか。

*

A) ヒトはわかる。わけてわけまくる。幾度も皮をむいて、何やらまた皮が出てきたらしい。小さな小さなつぶが見えてきたという。そのあやしい動きを目にして喜び勇んでいるもようが、ヒトの小ささに重なる。いくらわけたところで、わかるたぐいの話とは思えないのだが。

B) ヒトは、「わかる・分ける」にとり付かれている生き物のようです。「わかる」という、切りのない行為に歯止めをかけることは不可能なのではないでしょうか。とうとう「量子」という「お話＝フィクション＝説＝いわゆる一種の与太話」が流行り始めました。いつまでブームが続くのでしょうか。これにも「賞味期限」があるみたいな気がするのですが、どうなのでしょう。

*

A) ヒトは、さらに、この星のそとと、彼方にまで目を向けている。遠くに目を向けたところで、見えるたぐいの話とは思えないのだが。

B) ヒトは、月に仲間を送り込んで歩かせたり、石を盗んで来させることに成功し、かなり気を良くしているようです。そのせいで、この惑星の大問題をそっちのけにして、もっともっと遠くの惑星に仲間を送り込む計画を立てているヒトたちもいるみたいです。それだけじゃなくて、ブラックホールやビッグバンなんて、とてつもない大風呂敷を広げているオーソリティーもいらっしやると聞きますが、身の程をわきまえるべきではないでしょうか。それとも、あれはロマンというのですか。マロンくらいで我慢しておきましょうよ。

*

「書く＝考える」の実験は、以上のような結果になりました。蛇足ながら申しますと、「実験」という言葉を使いましたが、「お遊び＝戯れ」であることは言うまでもありません。あえて「理屈めいたもの」を述べるとすれば、A)の各文章は大和言葉系の言葉をできるかぎり使うという「ルール」と、「だ・である調」という「文体」を「枠」とする一方で、B)の「翻訳文」は「です・ます調」と、このブログでこれまで書いてきたさまざまな自分流の「書き方」を「枠」として書かれたものです。

ヒトは生体のレベルにおいても、また精神・意識・気分といった曖昧模糊とした状態・状況のレベルにおいても、常に移ろい、変化しつつある生き物です。そうした揺らぎも「枠」として働いていると考えられます。「枠」は、今挙げた以外にもあるにちがいありません。

したがって、上記の5組のA)とB)は、ある時点でのさまざまな「枠」がからみ合った「とりあえず」の結果である、とみなすのが妥当かと思われまふ。また、あのような文章が書かれたもとは、「勢い」のようなものもあるでしょう。「実験」という言葉にかこつけて、出まかせで「即席の＝即興の」翻訳ごっこをやってみました、「出るに任せて出たもの」というのは、うんちに似て興味深いものがあります。いとおしさも覚えます。あれよあれよという具合に漏れ出たようなものなので、出たうんちを眺め入る好奇心の強い幼児を見習って、これからじっくり読み直し、A)とB)を読み比べて観察してみます。

なお、ただ今書きました「うんち」と「出る」に関する比喩にご興味をいだかれた方は、当ブログの親サイト「うつせみのうつお」の「6ページめ」に収めてある「言葉とうんちと人間（うんち編）」2009-11-12という記事をご参照願います。同ページの下の方にあります。前後には、「言葉とうんちと人間（言葉編）」2009-11-11と「言葉とうんちと人間（人間編）」2009-11-12という記事もあります。

*

今回は最後のほうで、本筋からは話がずれましたが、引き続き次回も、「日本語にない

ものは日本にないのか」という問いについて、考えてみる予定です。

ちなみに、この問いは比喩であり、深い意味はありません。文字通りに取らないでください。当ブログは、「正しい」「正しくない」とか、「研究」とか、まして「学問」などとは無縁です。でも、それなりに本気でやっております。その点について、どうぞ、ご理解とご了承をお願い申し上げます。

09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）

◆日本語にないものは日本にない？（2）

2009-12-24 17:16:32 | さくぶん

前回の最後のほうで書いたように、「日本語にないものは日本にないのか」という問いは比喩とお考えください。比喩とは、ある言葉やフレーズやイメージを「ずらす」「言い換える」「ほかのものにこじつける」ことにほかなりません。では、「日本語にないものは日本にないのか」とは、どんな言葉やフレーズやイメージを「ずらしたもの」なのでしょう。

ここで、妙なことが起きます。図式化して説明しますと、「 $A \rightarrow B$ 」と「ずらした＝言い換えた＝こじつけた」とします。これって、「 $B \rightarrow A$ 」と大差がないと言えるような気がしませんか。妙というより当たり前のことなのかもしれません。論理的思考に欠陥がある、この駄文を書いている者には、どう受けとめていいのか分からないのですが、そんなふうに思えます。

何を言いたいのかと申しますと、「日本語にないものは日本にないのか」という問いは比喩とみなし、いろいろな問いに「こじつけて＝化けさせて」、ああでもないこうでもない、ああでもあるこうでもあるをやりたい、ただそれだけなのです。

*

では、まずご本尊からまいります。「日本語にないものは日本にないのか」を文字通り取ってみましょう。前回の記事で、うろ覚えのことだと断ったうえでご紹介した「説＝お話し＝与太話」を、再度うろ覚えだということをお断りしたうえで取り上げてみます。つまり、『社会』という『言葉』が日本語にない」と『社会』という『もの』が日本にない」とが両立するという作り話です。

前言撤回します。やっぱり「うろ覚え」は「無し」でいきます。作り話とはいえ、あまりにも、馬鹿らしいからです。そんなことは読んだことがなかったことにします。ひょっとしてそういう意味のことを本気で書いていたヒトがいたとするなら、それを「馬鹿らしい」とか「アホちゃうか」などと述べれば名誉毀損になりそうだからです。

*

というわけで、話を振り出しに戻します。

単純化すると、「日本語にない『社会』という『もの』は日本にはない」、あるいは、「日本語にない『社会』という『もの』は日本にはなかった」という馬鹿話を、今思いつきましたので、検証してみましょう。答えはすぐに出ます。検証不可能です。日本語に「社会」という言葉が存在したかどうかは、言葉の専門家の方が文献をお調べになれば、いつ、どの文献で初めて使われたかぐらいは、検証できると思われれます。問題は、「社会」という「もの」の存在です。

日本に「社会」という「もの」が存在するかどうかは検証不可能です。テクニカルな面から考えてみましょう。英語の society と、たとえばドイツ語、フランス語、イタリア語、ロシア語あたりの、それに相当する単語が、明治維新以前に存在したと確認できたなら、その意味を当時の辞書で調べるか、当時の文献で使われ方を調べる。これは可能だと思われれます。ついでに、現在の辞書での語義や使用例を調べてみるのもおもしろいでしょう。

次に、日本語の文献や辞書で「社会」という言葉について、上と同様の手続きで、意味と使われ方を調べます。ここまではいいでしょう。それからが大変です。欧米での「社

会」に相当する語義の対応物（※単数とは限りません）、および、日本語としての「社会」という語の語義の対応物（※単数とは限りません）が、日本に「存在していたか」、および「存在しているか」どうかを検証するのです。言うのは簡単ですが、そんなことが実行できますか。

*

ぶっちゃけた話が、欧米でも「社会」（※単数とは限りません）が明治維新の、そうですわねえ、ほぼ50年前に「存在していた」か、そして現在「存在しているか」を検証するだけでも、「難事・ほぼ不可能・いや、やっぱり不可能」だと思いませんか。「社会」はいわゆる抽象的な言葉です。見たり、触ったり、ハンマーで叩いたり壊したりできない「もの」です。そんな曖昧模糊とした「もの」の存在を、「検証する」などという、いかにも学問ばい高級な（※もちろん、アイロニーです）言葉で処理できるはずはありません。

屁理屈という言葉がありますが、今、述べたのは屁理屈と言われるにちがひありません。これまでの経験から考えると、屁理屈というのは、どうにも反論できない理屈に対する悪態＝罵倒です。論破できない理屈に、白旗を掲げているのに等しいとも言えるでしょう。つまり、どうにも相手にできないから、反論を放棄するのです。

屁理屈もただの理屈も別に偉いものでも、立派なものでも、正しいものでもありません。屁理屈もただの理屈も、単に言葉をつなげただけのフレーズであり、「説＝お話＝作り話＝でたらめ＝ガセ」にほかなりません。屁理屈やただの理屈を言い換えるとすれば、「道理・筋道・論理」（※漢語系の言葉ですね）や、「ことわり・事割り・理・断り・いいわけ・もうしわけ・わけること」（※やまとことば系の言葉ですね）という言葉たちが、あたまたに浮かびます。今挙げた言葉たちって何ですか？

上記の言葉たちを別の言葉たちに言い換えるのではなく、いったいどんな「もの」、あるいは「こと」なのかが「分かっている・体感できている」ヒトはいるのでしょうか。辞書や哲学事典に、上記の言葉たちの説明が載っているでしょうが、それは「言葉」です。今問題にしているのは、「それらの言葉によって、五感が反応するか」という点です。あるいは、「それらの言葉が、ヒトという生体＝生き物にどう働きかけるか」という点です。

*

ややこしくなってきましたので、話をうんと単純化してみます。「社会」というような抽象語を、ヒトは情報のデータとして処理できない。それだけのことです。なぜ、そうなっているのでしょうか。

言葉＝語は、その語義に対応する「もの」があるという前提で、ヒトは言葉＝語を使って、言語活動（※つまり、言葉＝語を組み合わせて、ひとりでつぶやく、あるいはほかのヒトたちとやり取りするくらいの意味です）を行っていると考えられます。

問題なのは「対応する」です。あっさり見逃してしまいがちですが、正直申しまして、きわめて「不明確＝テキトー＝でまかせ＝でたらめ」な意味＝イメージを喚起する言葉です。たとえば、「AとBが対応する」と言うとき、どんなイメージあるいは意味を思い浮かべになりますか。

個人的には、「 $A \rightarrow B$ 」、「 $A \leftarrow B$ 」、「 $A \leftrightarrow B$ 」、「 $A = B$ 」、「 $A \cong B$ 」なんて感じです。要するに、「AとBの間に何らかの関係性がある」と言い換えられるのではないのでしょうか。

*

ここで話を止めて、これまで書いてきたことを振り返ってみます。書きながら考えるというやり方で、この記事を書いていますので、ここまでどんなことを書いてきたのか、ちょっと気になるのです。

たった今、ざっと読み返しましたが、あれ一つ、という感じです。ご本尊である「日本語にないものは日本にないのか」を文字通り取るという意味のことを、冒頭近くで書いておきながら、いつの間にか、「言葉」と「もの」との「関係性」に話が流れてきました。

これでいいのです。「論理的に展開する」とか、「筋道を立てる」とか、「道理をはずさない」とかいう、もっともらしい「流れ」にはなっていないみたいです。安心しました。今、挙げた3つのフレーズは、自分にとっては「世の悪しき習慣」とでも呼ぶべき「流

れ」なのです。

*

いつの間にか「言葉」と「もの」との「関係性」という、これまたきわめて「不明確＝テキトー＝でまかせ＝でたらめ」な意味＝イメージに話に移ったという事態を歓迎しましょう。ここでお断りしておきますが、「不明確＝テキトー＝でまかせ＝でたらめ」とは、全然悪いことでも、恥ずかしいことでも、忌むべきことでもありません。まして、あってはならないことでもありません。

「言葉＝語＝言語」という「代理・かわり・代わり・すり替え・かたり・語り・騙り・ことわり・事割り」の仕組みを用いる以上、「不明確＝テキトー＝でまかせ＝でたらめ」は当然のことなのです。さもないければ、言葉をめぐってヒトが、毎日振り回され、もてあそばされ、混乱し、争い、場合によっては血を流し合い、その挙句には他者あるいは己をあやめるなんていう事態が常態化しているわけがありません。

*

とりあえず、ここで話をまとめるという、きわめて事務的で官僚的な操作をさせていただきます。どうか、おゆるしてください。それが、いちばん、ヒトにとって妥当なやり方のようなのです。

さて、「日本語にないものは日本にないのか」という比喩としての問いは、比喩であるという属性の必然として、いろいろなバリエーションに「化けさせる」ことができます。たとえば、今回は、紆余曲折をへて、「言葉」と「もの」との「関係性」という物語にたどり着きました。

とはいえ、大切なことは、たどり着いた「ところ＝場」ではありません。そこに着き、留まり、静止し、落ち着くことが目的で、この記事は書かれていません。そのように読むヒトがいても、それはそのヒトの好みですから、とやかく申しません。ただ、こちらの好みを申し上げますと、「過程＝プロセス＝道中＝途中経過＝旅の途中の光景」という「動き＝疾走感＝あれよあれよ」が大切なのです。

「途中＝まどめに至るまで」が大切だという「到着点＝まどめ」。簡単に申しますと、そんな感じです。

*

言葉は、ヒトに動きを喚起します。沈黙黙考とか瞑想なんていっても、「あたま」の中は、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ、あれよあれよ、きよろきよろ、うろうろなんて感じではないでしょうか。いきなり、「脳」という言葉を使った話になりますが、脳ではいろんな筋や糸や道がからみ合っているらしい、という誰も見たことのない「お話＝説＝ガセ」があります。要するに、ぐちゃぐちゃということでしょうか。

その「あたま・脳」の中のイメージを「あたま・脳」の中でいろいろ描いて楽しんでみましょう。そのさいには、間違っても、「正しい」とか、「科学的」とか、「医学的とか」、「実際には」とかいう、抽象的な言葉にまどわされないように気をつけましょう。それは、言葉です。欠陥品です。「対応」なんて嘘ですから、対応する「もの」なんか探しても無駄です。もっとも、その無駄が、これまたおもしろいのですが、あくまでも「お話」として楽しみましょう。

それより、むしろ、言葉が喚起する「でたらめ」としか思えないようなイメージに身を任せるとか、言葉によって何やらわけが分からない状態になったら、いったん言葉はさしおいて、そのときの気分に身を任せて、あたまを含めたからだを使って五感を働かせてみるほうが、よほどスリリングだと思います。

言葉に身を任せる。言葉に身を動かせる。言葉に身を任せさせる。そんな感じです。大切なのは「み・身・身体・からだ」です。たとえば、「社会」という言葉の対応物をさがすことは、言葉に身を任せる行為ではありません。「社会」という言葉で、「からだ・五感」が反応しなかったら、それは「社会」という言葉が単なる言葉で、対応物など存在しないと考えるべきです。

*

「社会」という言葉の対応物をあたまで「分かった・理解した」と思い込むことはできま

す。ふつう、ヒトはそれこそが「分かる・理解する」だというふうに「決めています」。「決めている」だけです。そのようにヒトが「決める」行為を「抽象」と呼んでみましょう。

「抽象」は「からだ・五感・身」とは無縁の行為です。同時に、きわめてヒト的な行為でもあります。その意味では、ヒトである限り決して免れない「粹」だとも言えます。その「粹」を意識するかどうか。

「社会」という言葉を見聞きして、その対応物を「とらえた」と思った瞬間、ヒトは抽象という「粹・わな」にはまります。「社会」という言葉を見聞きして、「ん？」と感じた＝わけが分からなくなったとき、ヒトは対応物の不在を体感します。でも、格好が悪いし、危うそうだし、ほかのヒトたちから馬鹿だと言われそうだと思い、その体感を放棄し、「分かった」ことに「します＝決めます」。でも、その「分かった」は「分かったと思い込んだ」というのが正確な言い方でしょう。

*

まとめるなんて書いておきながら、最後に来てまたうろうろしました。これって、いちおう「戦略＝たくらみ」だったのですが、うろうろにお付き合いくださり播らいでいただけましたか。「ああ、馬鹿らしい」とか、「こいつ、やっぱり、とちくるっているわ」などと、お思いいただけたなら本望です。

決して、皮肉で申しているわけではございません。それで、いいのです。そうお考えになるのが当然なのです。分かっていただけのしょうか。「わざと」を「本気で」やっているだけなのです。あくまでも「わざと」、あくまでも「本気で」です。

*

今回は、主に抽象語に対し悪態をつきました。次回は、具体語・具象語を罵倒しようと思います。

ここまで辛抱強くお付き合いくださった、心やさしい方々に感謝いたします。

09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）

◆日本語にないものは日本にない？（3）

2009-12-25 16:57:25 | さくぶん

当ブログの左にある「メッセージを送る」機能を通じて、ある方から今朝お便りをいただきました。正確に申しますと「苦情」でした。前回の「日本語にないものは日本にない？（2）」を読んだが、何を言いたいのか分からない。要約いたしますと、そうした内容のクレームでした。この場を借りて、お詫び申し上げます。ごめんなさい。

ただ、言い訳をさせてください。分からなくて当然なのです。「何だって？ このバカタレ！」と再度お叱りをいただくのを覚悟で申し上げております。あの記事に書いてあることは、分からなくて当然なのです。3つの意味で、「分からなくて」当然なのです。説明いたします。

1) 突き詰めれば言葉は欠陥品であり、言葉を使う「限り（＝限界＝枠＝檻（おり）＝牢獄）」、ヒトは「分からない・理解できない・見えない・触れない・聞こえない・味が分からない・嗅ぎ分けられない・手に入れられない・身に付かない」。なぜなら、言葉は「対応物」を「欠いた」「代理」でしか「ない」からである。

2) 前回の記事においては、「言葉＝語」がいかに「言葉＝語、および言葉＝言語、および言葉＝言語活動というもの」を「表現する＝演じる＝装う＝再現する＝あわわす＝あらわにする」ことが「できない＝不可能である」かを、記事につづった言葉＝語自体に「演じてもらっている」。(ちなみに、「言葉＝語」がいかに「もの・こと・さま・ありさま・状態・状況・現象」、および「概念・観念・イメージ・空想・想像・空想・幻想・幻覚・夢想」を「表現する＝演じる＝装う＝再現する＝あわわす＝あらわにする」ことが「できない＝不可能である」かについても、事態は同様だと考えられる。)

3) このブログの記事は、言葉遣いのうえでも、論の進め方や話の展開の仕方についても駄文(=下手な文章=悪文)である。

ややこしくて恐縮ですが、正確に書こうとするなら、以上の3つの意味で、「ヒトは、言葉を使って何かが分かる」というのは「嘘=作り話」であり、実際には、「ヒトは、言葉を使って何かが分かるのだと『決めている=思い込んでいる=ヒトびとの間でそういう暗黙の了解が成立している』」のだと、前回の記事では言いたかったのです。

*

「分からなくて当然だ」ということを「分かって」いただけたでしょうか。お断りしておきますが、ふざけてなんかいません。おちよくってなんかいません。本気です。正気だとは言う勇気も根拠もございませんが、本気です。

「分からなくて当然だ」ということを「分かる」というと、何やら矛盾しているような、道理にかなっていないような、筋が通っていないような、論理的でないような気がするかもしれません。でも、それは言葉の綾です。言葉にもてあそばれているだけです。気にしないのが賢明な選択だと思います。

ヒトは論理的でなければならないとか、筋道立てて物事を論じなければならない義理なんかありません。そんな戯言を「実践している」ヒトなどいません。戯言を「信じて」いたり、「言って」いたり、「書いて」いるヒトなら、たくさんいますけど。

難しくお考えにならないでください。めちゃくちゃ、単純に申しますと、前回の記事は「ああ、わけがわからない」、「これを書いたやつは、とちくるっている」、「ビョーキと、ちゃうか」と、思っていたくために、「わざと」「本気で」書いたものです。

ですので、「日本語にないものは日本にない？(2)」を読んだが、何を言いたいのかわからない」というご感想=お叱りのメッセージをくださった方は、この駄文を書いているアホの言いたかったこと、書きたかったことを「体感して」くださったのです。どうもありがとうございました。思いが通じたことを、うれしく思っております。できれ

ば、これからも、このブログにお立ち寄りくだされば幸いです。再度お断りします。皮肉では断じてありませんので、誤解なさらないようお願い申し上げます。

メッセージにはメールアドレスが添えてありませんでしたので、この場を借りて、お礼を申し上げた次第です。

*

もうひとつ、みなさまにお詫び申し上げたいことがあります。以前に、やはりメッセージを通してご指摘とお叱りをいただいたことなのですが、記事の内容＝文面＝文言が投稿後が変わる、という点について、弁解をさせていただきます。

自分は記事を投稿したあとに、パソコンのディスプレイで文章を読み直しながら推敲するという、悪い癖があります。いちおう、下書きを作ってブログの投稿欄に記事を流し込むのですが、ディスプレイで読んでみると、下書きの段階でワード文書として読むのでは、「えーっ!？」というほど、印象が違って見えるのです。

で、慌てて文章をいじくりまわすことがよくあります。きのうの記事もそうでした。誠に申し訳ございません。ひょっとすると、きのうの投稿時刻の直後に記事をお読みくださり、本日、きのうの記事を再びご覧になって、「何だ、変更されているじゃないか」とご立腹なさっている方もいらっしゃるのではないかと思います。ごめんなさい。

特に、きのうは夕食後にPCの電源を落とそうとし、読まなければいいのに、ついつい1時間半ほど前に投稿した記事に目を通してしまい、「あれーっ!？ こんなことを書いている!!」と叫び、少々手直しをしました。申し訳ございません。自らの過ちをビョーキのせいにするなどという行為は、卑劣きわまりないと承知のうえで、言い訳をさせていただきますと、うつというのは気分障害とも言うそうで、自分で自分のそのときの気分がコントロールできないところがあるというのが実感です。

*

たとえば、朝に目覚めたときなど、「きょうの『気分様』のご機嫌はどうかな」という

感じで、恐る恐る自分の気分の状態をうかがうのです。そういう「ご機嫌うかがい」を日に何度か繰り返します。自分の場合には、「ブログ廃人」なんて、Hさん（※初めのブログ以来、記事を読んでくださっていて、メールをやりとりする仲になっている方です）から呼ばれているほどブログにのめり込んでいるので、薬でぼーとしたあたまでブログ記事を書きたくありません。

そのため、悪いことは知りながら、処方されている薬を定期的にはなく、頓服に飲んでいきます。つまり、記事を書く前には飲まないようにしています。だいたい寝る前に飲みます。話が逸れてしまったようにお思いでしょうが、何を言いたいのかと申しますと、そのときの気分によって、「書くこと」や「書き方」ががらりと変わる可能性が高いということなのです。さらに言うなら、そうした性癖を、自分でコントロールするのがとても難しいのです。

「気分」障害だけならまだしも、「思い」障害という「重い」障害に陥っているような気がするのです。実に付き合いにくい「自分」をかかえて生きている。そんな感じなのですが、少しはイメージしていただけるでしょうか？ 大げさに言えば、自分が他人のように感じられるのです。このように言葉にすると、自己暗示にかかる恐れがあるので、これ以上、この点について書くのはやめておきます。

*

さて、今回は「社会」や「美」や「権利」というような抽象語についての悪態をつきました。抽象語においては、ある「言葉＝語」とそれと「対応する」とされている「もの・こと・さま・イメージ」との「関係性」がきわめてテキトーで、「ほぼ嘘、ときどき嘘、ところにより真っ赤な嘘」という感じだという意味です。

どんな具合に「嘘」なのかは、その道の研究者が文献を漁ったり、現在でしたら、膨大な言語のデータを検索して、その「対応のでたらめぶり」をある程度の精度で検証できるだろうと考えられます。したがって、素人の駄文では、具体的な「議論＝お話＝ガセ」は扱えません。

大雑把で杜撰（ずさん）で出まかせ主義的な「お話＝与太話＝ガセ」なら、何とか扱えそうです。でも、自分は抽象語は苦手なので、前回のようにお茶を濁すような結果となりました。

*

今回は、具体語・具象語を罵倒しようと思います。具体語・具象語は、ある「言葉＝語」とそれと「対応する」とされている「もの・こと・さま・イメージ」との「関係性」が、ややテキトーで、「ほぼ嘘、ときどき嘘、ところにより真っ赤な嘘」という感じです。抽象語について、上で書いたフレーズと見比べてみましょう。

＞ある「言葉＝語」とそれと「対応する」とされている「もの・こと・さま・イメージ」との「関係性」がきわめてテキトーで、「ほぼ嘘、ときどき嘘、ところにより真っ赤な嘘」という感じ

違いは、「ややテキトー」と「きわめてテキトー」だけです。そうです。両者に大きな相違点はありません。抽象語であろうと具体語・具象語であろうと、ヒトが言葉という代理を使っている、という点を考慮すれば、大差はないのです。せいぜい、具体語・具象語に対応するとされている（＝決められている＝そういうふうにはとびとの間でコンセンサスが成立している）「もの・こと・さま・イメージ」を五感で体感できるかどうか、「差・差異・際・さい・きわ・隔たり・あいだ・あわい・ずれ」だと言えます。

*

「五感・感覚（かんかく）」というのは、「間隔（かんかく）」を必然的に伴います。つまり、「知覚器官」を通してデータ化された情報がシナプスとかいう糸を通して、脳に伝わり、そこで情報が処理されて、ようやく意識されるという「間隔・へだたり・隔靴搔痒（かつかそうよう）・もどかしさ」の結果にほかなりません。「知覚（ちかく）」というのは、「遠く」にあるものを「近く（ちかく）」にあると「錯覚する＝自分に言い聞かせる＝無意識にあるいは意識的に思い込む」ことです。

その意味では、同じ言葉＝語である抽象語と具体語・具象語は、きわめて「近い」と言えます。でも、それではお話としておもしろくないので、ちょっとズルをして、ズレを持ち込みます。「度合い＝程度＝グラデーション＝濃淡＝階調」というイメージを利用するのは、さきほど書いたフレーズの一部を引用します。

＞具体語・具象語に対応するとされている（＝決められている＝そういうふうにヒトびとの間でコンセンサスが成立している）「もの・こと・さま・イメージ」を五感で体感できるかどうか「差・差異・際・さい・きわ・隔たり・あいだ・あわい・ずれ」だ

上記のフレーズのうちの「差・差異・際・さい・きわ・隔たり・あいだ・あわい・ずれ」という考え方はお話し、便利で使い勝手のいい「道具」になり得ます。これを使わない手はありません。「差・差異・際・さい・きわ・隔たり・あいだ・あわい・ずれ」を「度合い＝程度＝グラデーション＝濃淡＝階調」と少しだけ「ずらす」のです。そうすると、「順番・順序・序列・数字化・数値化・見える化」みたいな「トリック＝だまし＝かたり＝騙り＝語り」が可能になります。

*

具体的な話に移りましょう。「日本語にないものは日本にないか」という、このシリーズでの比喩的なフレーズを思い出してください。文字通りに取りましょう。日本になくて、昔の日本語にもなかったと考えられるものはありませんか。たとえば、オーロラ、氷河、砂漠、ラクダ、ピラニア、熱帯雨林なんて、あたりに浮かびましたが、21世紀に入り約10年経った現在では、これらが日本にかつてなかった、あるいは今もない、と言ってもぴんと来ませんよね。

テレビで何度も見たり、あるいは動物園や水族館で見たり、場合によっては触ったものもあるでしょう。砂丘や樹林なんていう「似たもの」もあります。ここで想像力を働かせましょう。

昔々、日本列島でさまざまな方言の日本語が話されていました。ヒトびとは、定住するのが一般的で、移動するヒトたちはごく一部だったと思われます。ある山奥の集落で生まれ生き亡くなったヒトたち、海辺の集落で生活し、魚介類を採取しながらその周辺で一生を過ごしたヒトたち。やがて、歩く、あるいは、牛や馬や船に乗るというかたちで、遠距離を移動する機会を経験するヒトが増えていった。

とはいえ、基本的に同じところにずっと住んでいるヒトたちが、圧倒的に多かったのではないのでしょうか。また、「日本語」という言葉はきわめて抽象度の高い（※ここで「度合い＝程度＝グラデーション＝濃淡＝階調」というトリックを使ったことに注目して

ください) 語です。昔々、この列島の各地に散在していたヒトたちは、どのような言葉＝言語を使っていたのでしょうか。統一された言語＝標準語はなかっただろうと想像されます。また、読み書きができるヒトたちは、ごく少数であったと考えられます。

*

以上のような状況のもとで、「日本語」という言葉に「対応するもの」が「在った or 無かった」と言えるのでしょうか。言いにくいのではないのでしょうか。その「対応するもの」が「在った or 無かった」と言いにくい状況を、「抽象度が高い」というふうに言ってみます。そもそも「日本」という言葉も、そうした状況下ではきわめて「抽象度が高い」と言わざるを得ません。

ここで、さきほどのオーロラ、氷河、砂漠、ラクダ、ピラニア、熱帯雨林という言葉を再び並べてみます。どうでしょうか。とりあえず「日本」と呼ばれる島々に、今並べた「もの」が「在る or 在った or 無い or 無かった」と言えるのでしょうか。さらに、まったく同じではないものの、オーロラ、氷河、砂漠、ラクダ、ピラニア、熱帯雨林とほぼ同義の「言葉」が「在る or 在った or 無い or 無かった」と言えるのでしょうか。

こうやって考えるというか、想像するというか、妄想するというか、とにかくあたまの中でごちゃごちゃぐちゃぐちゃをしてみると、「日本語にないものは日本にないか」という問いに対し、「ないよ」と言いたくなります。ついでに、「日本にないものも、日本語にはないよ」と付け加えて言いたくなります。

「日本語にないものは日本にないか」という問いを成立させている前提が、めちゃくちゃ「抽象度の高い＝粗雑な＝ずさんな＝大雑把な」ほぼ、いや、かなりの嘘と言えそうな気がするからです。どこが大雑把なの？ どうして嘘なの？ そんなふうに疑問に思われる方もいらっしゃるにちがいません。

*

どこが大雑把なのか、どうして嘘なのかと申しますと、「在る」「無い」の部分ではなく、「日本語」と「日本」という部分なのです。現在を基準にして考えると、あまりそんな感じはしません。日本語の研究が進み、国語辞典が多数販売され流通し、日本語とい

うものはかなり具体的なものであるように思えます。また、日本国の領土と領海およびその境目が隣国との間でほぼ（※あくまでも「ほぼ」です）決められていて、辞書や事典で「日本」を引けば、その面積や人口が数値として記載されています。

でも、それはデータ=情報（数字・言葉・記号・図・映像など）です。ヒトはデータとしてしか、日本語と日本を知覚する=体感することができません。その意味で、抽象度が高いと申し上げているのです。もちろん、これはあらゆる国について言えることであり、あらゆる国家の下部単位（地方、地域、県、州、市町村、集落など）についても状況は同様です。

屁理屈をこねるのは、この辺でやめておきます（※なお、屁理屈については前回の記事で、しつこくからみましたので、ご興味のある方は、ご参照ください）。ちなみに、屁理屈をこねるのは、いわばあたまの体操です。そのプロセスが大切なのです。結果や結論なんか出ても出なくてもかまいません。「こねる」という動作を体感することが目的なのです。

*

発想の転換をしましょう。日本と日本語からほかの地域と言語に目を向けましょう。たとえば、赤道直下にある地域では、雪や四季に当たる言葉=語があるでしょうか。もっと正確に言うと、その地域で昔から使われてきた言語についてのお話です。他国、特に欧米や戦前の日本の植民地となったという事情で用いられていた、あるいは今も用いられている、あるいは今も部分的に用いられている言語は除外します。

もしも、その地域に雪が降らず、季節の移り変わりがなければ、たぶん、雪と四季に当たる現地の語は「無い」、あるいは「無かった」と考えられます。現在では、借用語や造語というかたちで「在る」だろうと想像されます。そうした地域でも、書籍（※絵本や写真集を含みます）や写真や新聞や映画やラジオやテレビやインターネットを利用しているヒトたちは、たくさんいるにちがいません。

実際に、雪を見たり触ったりしたことのないヒトたちが、テレビの画像を見ながら雪を話題にすることは大いにあり得るでしょう。きわめて単純なお話になってしまいました。なにしろ、さきほどの屁理屈でさんざん罵倒した「在る or 在った or 無い or 無かった」を堂々と使った抽象的な議論をしているのです。きわめて人間的=ヒト的な行為で

す。

*

単純さや抽象は愚鈍さときわめて近いです。思考停止とも近いです。「分かった」「理解している」「知っている」つもりになっているという意味です。砂漠で暮らしたことのないヒトが、「砂漠、知ってるよ。サハラ砂漠なんて、テレビで何度か見たことある。ラクダがいるんだってね。オアシスがあるんだってね。そこに住んでいる人たちがいるんだよね。移動してるんだっけ。で、何か？」という調子です。

こういうのを「分かった」「理解している」「知っている」とふつう言っています。それはそれで、けっこうなことです。そう言っている、あるいは思っているヒトを誰も責めることはできません。この駄文を書いているアホも、そんな感じで毎日をのほほんと暮らしています。

でも、このアホ、ときどき屁理屈をこねるんです。いわゆる偏屈者、変人、奇人、はみ出し者ってやつです。馬鹿に馬鹿と言われると腹が立つと言うヒトがいるくらいですから、アホにアホと言われれば、やっぱりむかつくヒトがいると思われれます。馬鹿とアホと、さきほど書いた「愚鈍」というのは、「うどん」と「胡乱（うろん）」と「ウーロン茶」くらい似ています。

なぜなら、全部「言葉＝代理＝そのもの自体じゃないもの」だからです。最近、パラレルという言葉が気に入っています。「パラレル」2009-12-22 という記事から必要なところだけを、以下に自己輸血＝自己引用してみます。

>生きてると、いろいろなものが「重なる」「並ぶ」「並んで進む」「ダブる」「ぶれる」「ぼける」わけですから、その意味では、生きていることは一種のパラレル状態と言えそうです。言葉は何とでも言えます。そのでたらめぶりには圧倒されます。だから、言葉や語や語義やイメージは、全部パラレルな関係にあると思っています。話がややこしくなりますが、「価値」や「量」や「質」が「同じ」という意味ではありません。「同列に在る」という位置関係を問題にしています。

>パラレルに話を戻しますが、parallel という英単語を「ジーニアス大英和辞典」で引い

てみると、語源に「(わきに) + (お互いの) =お互いのわきにいる」という意味の説明が載っています。とにかく、並んでいる、連なっている、列を成している、というイメージですね。その「並んでいるものたち」がどういう関係にあるかには、とても興味があります。

*

ヒトは、言葉=語をパラレルに受け止め、パラレルに用いることに慣れきっているのではないか。そんなふうに、このところ、よく考えています。どういう状態を指すのかと申しますと、言葉=語が対応すると考えられている=決められている=そういうふうに関心しているものを、よく見ない、耳を澄まして聞こうとしない、舐めてもじっくり味わわない、においを嗅ぎみようとしない、あたまを含むからだ全体で「出合おう」としない。そんな感じです。

言葉や画像や映像や音声として、「すれ違う」「かする」ことはあっても、「出合おう」「ぶつかろう」「ぶつかってこちらが揺らごう」としない。そんな感じです。

*

話を変えます。

1) 海に近いところに住んでいない幼い子どもが、海に初めて「出合った」状況を想像してみてください。

2) コンクリートの道ばかりが周りにある比較的平坦な環境=平野で育っている幼い子どもが、中部地方あたりの山岳地帯に車で連れていってもらって、車外に降り立ったとします。できれば、最低3日間のキャンプをすると想定してみてください。

1) と 2) のケースでの幼い子どもにとって、「umi・うみ・海」とか「yama・やま・山」という言葉がどんな意味を持つというのでしょうか。

出合った「とほうもない何か」、いろんな「わけのわかんない」「もの・こと・さま」があり、それに触れたり、場合によっては触れて怪我をしたり、「わけのわかんない」音や「空気の流れや揺れ」を肌と鼓膜で感じたり、「これまで嗅いだことのない」いい「におい」がしたり、吐き気をもよおすような強烈な「におい」がしたり、「名前もしらないもの」が動いているのを目撃したり、「何か」が身に飛びついてきたり……。

*

今述べたような体験が、「パラレルではない」状況です。「具体的な」ものとか、「具体的な」体験と言うこともできるでしょう。単純さや抽象や愚鈍さや思考停止とは、ほど遠い体験であり状況であるとも言えそうです。

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（４）

◆日本語にないものは日本にない？（４）

2009-12-26 17:12:19 | さくぶん

この連載をお読みいただいている方には、「日本語にないものは日本にないか」という問いがきわめて抽象的であり、また「検証不可能」に近いものである戯言であるという「こと＝イメージ」が体感されるようになってきたものと存じます。ただし、「検証不可能」というのは、この駄文を書いているアホの意見＝戯言であり、「検証可能」と信じ、実際に「検証」なさっている、その道の専門家の方々がいらっしやっても、一向に不思議ではありません。

たとえば、「人権」なり「権利」という言葉が、いつごろから「日本」において造語され、あるいは借用されたか、そして晴れて「日本語」と呼ぶにふさわしい条件を整えたか、といった「問い＝戯言」に対し、「答え＝戯言」を提出する。これは、学者と称されるヒトたちのお仕事でしょう。論文1本くらいは書けそうなテーマではないか、と素人

ながら想像しております。

言葉と、それに対応すると「されている＝そういう約束事になっている＝そういうふうにヒトが勝手に決めた」「概念＝観念＝意味」と呼ばれているものを扱う「限り（＝限界・行き止まり・土俵際）」、ヒトは抽象的であるという中傷を覚悟しなければなりません。それが、この駄文で「検証不可能」と呼んでいる事態です。「研究＝論文」の「結論＝結果」として、言葉で言葉を検証するというお遊びを「お遊び＝戯事」と意識するか、それともほんまものの「結論＝結果＝事実＝真実」と錯覚するか、ここが分かれ目です。今こそ、わか～れめ～～、いざ、さら～アバ。あばよ。バイバイ。そんな感じです。

*

学問や研究とおさらばしたところで、今回は、その「日本語にないものは日本にないか」をまたまた少し「ずらして」、ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ、うろうろよたよたいたします。

「言語にないものは世界（or 宇宙）にないか」・「言語に存在しないものは世界（or 宇宙）に存在しないか」・「言葉＝語として存在しないものは世界（or 宇宙）に存在しないか」・「言葉＝『語＋フレーズ』として存在しないもの・こと・さま・ありようは世界（or 宇宙）に存在しないか」

以上のように「ずらして」みましたが、ややこしいですね。もっと単純化＝抽象化＝戯言化できないものでしょうか。

「言葉とその対応物は一致するか」・「言葉はものか」

これくらい短くすると、当然のことながら、単純化した分だけ、いろいろなものを「捨ててしまった＝切り落としてしまった＝無視している＝考えないことにしている」という事態に成り果ててしまいます。これは当然のことです。

たとえば、上のフレーズにある「対応物」の「物」や、「ものか」の「もの」と言い切ってしまった「もの」の中には、「もの・こと・さま・ありよう・物・者・モノ・事・言・コト・状態・状況・現象・様態・概念・観念・イメージ・想像・空想・幻想・幻覚・ノイズ」

といった「ものたち」が含まれていることを承知のうえで、お話＝戯言＝戯事を進めなければなりません。

こうなると、ややこしいことに変わりはありません。

*

となると、やっぱり出まかせ主義でテキトーにやっていかざるを得ない、ということになります。そうですね。上で述べた、あんなにややこしいことをする「気力＝キ力」も「能力＝脳力」も、このアホにはありっこないです。

話をいわゆる「具体的」にしてみましょう。なぜ、「いわゆる」であり、括弧つきの「具体的」なのかは、実際にはそんなことはあり得ず、戯言だという目印だとお考えください。これからお話しすることは、本当はぜんぜん「具体的」なんかじゃありませんよ、という目印です。落語か漫談、それも素人が忘年会などでやるへたくそな余興だと思ってください。でも、アホがそれなりに本気でやっているのだということだけでも、心の隅に置いてやっていただければ幸いです。

*

セクハラという言葉がありますね。セクシャルハラスメント＝sexual harassment というちゃんとした英語があるところからすると、和製英語なんかじゃなくて、ある程度欧米で認知された「概念」でもあるようです。実際、日本でセクハラという言葉が使われ始めた以前から、英語の文章で目にしていた覚えがあります。「性的いやがらせ」などと訳す場合もあるようですが、そんな生やさしい語感のものじゃありません。すごく嫌な、それこそ女性であれ、男性であれ、心の傷になるような暴力の一種と見なしているものと思っています。

暴力と言えば、DV＝ドメスティックバイオレンス＝domestic violence＝家庭内暴力という言葉思い出しました。ドクハラ、パワハラなどといった言葉も、あたりに浮かびました。暴力や強制や押し付けのたぐいは、大嫌いです。特に、それが当たり前のように思っているヒトたちからの暴力は、迫力があります。なにしろ、自分のやっていることが相手を傷つけているという意識がきわめて希薄ですから、めちゃくちゃすごいです。

場合によっては、相手は重傷を負うか、死亡します。

上記の言葉に共通するのは、その言葉がこの国で認知されるようになるにしたい、この国のヒトたちを動かすようになった。言い換えると、この国の「社会」が変化してきたということです。その意味では、歓迎すべき状況であり、言葉には力があるというフレーズをポジティブに受け入れたい気持ちにさせる現象でもあります。

一方で、反動もあります。おそらく明治維新前には、この国にはなかったと考えられる「人権」という言葉ですが、この言葉を目の敵にしているヒトたちがたくさんいます。何とか「人権」という言葉を「去勢＝無力化＝形骸化」しようと画策する暴徒や、打破しようとする過激派もいます。個人的にも、会ったことがあります。実に不愉快な思いをしました。

*

セクハラで、考えてみましょう。

「日本語にないものは日本にないか？」

例の問いを、文字通りの意味で蒸し返しましょう。セクハラという「言葉」ですが、そうですねえ、30年前に日本にありましたか。なかったような気がします。で、セクハラって「行為」ですが、30年前に日本にありましたか。あったと確信できます。30年どころか、それよりずっと前からあったと確信しています。

ドクハラ、パワハラ、DVも、同様にずっと前から、日本にあったと信じています。でも、それらの言葉は、日本語にはありませんでした。それらの言葉がこの国で使われ始め、広く認知されるになるにつれて、この国のヒトたちの意識と行動は変化していきましました。その変化は発展の途上にあるとも言えます。

*

話を変えます。

たとえば、ゲイ、ホモ、ホモセクシュアル、ホモセクシャル、レズビアン、おかま、同性愛、へんたい、変態、変態性欲（者）、男色（家）――。これらの言葉の意味合いや語義や使われ方は、互いに重なる部分もあり、重ならない部分もありそうです。いずれにせよ、これらの言葉に対応する生き方、生きざま、ヒト、意識、概念、観念、イメージが、この時点の日本にあるかどうか、お考えになってください。念のために申し添えますが、この問いに答えを出すことが目的ではありません。考えるという行為とプロセスこそが目的であり大切なのです。

上の問いをめぐって考えるとき、「日本」とか「日本語」という言葉の「抽象度」の高さを、感じます。「抽象度」については、前回の記事で触れました。

>以上のような状況のもとで、「日本語」という言葉に「対応するもの」が「在った or 無かった」と言えるのでしょうか。言いにくいのではないのでしょうか。その「対応するもの」が「在った or 無かった」と言いにくい状況を、「抽象度が高い」というふうに言ってみます。そもそも「日本」という言葉も、そうした状況下ではきわめて「抽象度が高い」と言わざるを得ません。

以上は、前回の記事から、必要な部分だけを引用したものです。

*

言葉は、その言葉を使う最大限の共同体（※たとえば国家です）に属するヒトたちが、漠然といただいているイメージや意味や使い方だけで定義される性格のものではありません。つまり、辞書に載っている説明や用法で事足りるものではないという意味です。

言葉は、個人のレベルや、ある集団や、ある地域や、ある関係性で結ばれているヒトたちの間で、異なったイメージや意味や使い方を帯びている。そんなふうに考えられます。話をできるだけ、やさしくするやめに、比喩を用いてみます。

言葉を「レッテル＝ラベル＝名札」だと考えてみましょう。あるヒトが、「ニート」と

いう「レッテル＝ラベル＝名札」を他人から貼られても別に大した思いをいだかないのに対し、別のヒトはとても嫌な感じをいだくということは、大いにあり得ると思われまゝ。その「ニート」の代わりに、いろいろな言葉を入れてみてください。感情移入しやすい、よく見聞きする言葉がいいでしょう。みなさん、試してみてください。

どうですか。次に、その言葉、つまり「レッテル＝ラベル＝名札」を貼られてもおかしくないあなたが感じるヒトを思い浮かべ、そのヒトに対し、「あなたはいわゆる○○だよ」と言ったとします。その言われたヒトはどう感じるでしょうか。

*

今、ここで問題にしているのは、「思いやり」および「思いやる」という言葉とイメージと行為なのです。抽象度の高い言葉に対し、このブログでは、前々回と前回に悪態をつきまくりました。今回は、「レッテル＝ラベル＝名札」というふうに、言葉というものをちょっとずらし、それを貼られたヒトがどういう感情をいだくか、どう考えるかということに「思いをはせる」という視点で話を展開しています。

「思いやる」「思いをはせる」ためには、想像力が必要です。「想像力」という言葉は、多種多様な意味とイメージを持ち、さまざまな使われ方をされていますが、ここでは、「他者の気持ちをおしはかる」くらいの意味に絞って考えてみましょう。

「他者」という言葉を見聞きすると、ヒトだけという感じがするだろうと思いますが、広い意味で取ってください。「ヒト・ヒト以外の生き物・もの」は、もちろん「こと・さま・ありさま・状況・事態・現象」まで広げて受け止めてほしいのです。

*

前回、「パラレル」という言葉を持ち出しました。このところ、この言葉が気に入り、同時に気になって、いろいろ考えています。個人的には、価値や量や質に関係なく、「ただ並んでいる」というイメージをいただいています。並んでいるものに、序列はありません。強弱もありません。「ただたまたま並んでいる」だけです。つながっている、ということもありません。たとえ「つながり」があったとしても、問題にしません。

触れ合ってもいません。からみ合ってもいません。「触れ合い」や「からみ合い」があったとしても、「つながり」と同様に、ヒトがそう「決めている＝思い込んでいる＝そういうことにしている」だけのことで、「パラレル」というのは、「ただ並んでいるだけ」なのです。強いて言えば「並んでいる位置関係」のみが問題になっているという感じでしょうか。

あらゆる「言葉＝語」はパラレルな状態にある、とイメージしています。その「パラレルな状態」を「パラレルではない状態」にするのが、ヒトの「想像力＝創造力＝能力＝脳力」です。「想像力＝創造力＝能力＝脳力」を「ずらす」と、「思い込み＝錯覚＝幻想＝空想＝夢想＝判断＝見分け＝身分け＝理解＝誤解＝納得＝さとり＝認識＝知覚」となります。

*

その「想像力＝思いやる力」を「他者」つまり、身内・仲間とよそのヒトを含むほかのヒトたちだけではなく、ほかの生き物たち、非生物とされる物たち、ひいてはこの星＝惑星の「思い・こころ・たましい・気持ち」にまで差し伸べてみる。考えてみる。思い描いてみる。

別に難しいことではありませんよね。今、挙げたような「ものたち」がヒトのように、つまり「人格＝キャラクターを備えたもの」として動き、場合によっては言葉を発するマンガ、アニメ、物語には事欠きません。というか、ヒトはそういう「キャラクター＝もの」たちに取り囲まれて生きているではありませんか。

いわゆる子どもも大人も、その中間にあるヒトたちも、とりつかれたように、そうした「キャラクター＝もの」に感情移入しています。ペットだってそうですよ。ケータイのストラップについている小型のフィギュアだってそうですよ。テレビ自体がそうです。そして、テレビの画面に映し出される映像は、「キャラクター＝もの」に満ちています。

極端な例を挙げれば、あなたが「思い浮かべる＝思い描く」ありとあらゆるイメージ、もっと分かりやすく言えば、あなたが眠っているときに見る夢に出てくるさまざまなイメージ、それらは全部「キャラクター＝もの」だと言えます。

*

ヒトは「平行なもの」を「キャラクター＝平行でないもの」に転換するという能力＝習性を備えています。さきほど「アニメ」という言葉を出しました。アニメーションとは、静止した「画像＝絵」を1秒に〇〇コマという具合に連続させて「写す＝移す＝映す」ことによって、「動いている」と認識＝錯覚する仕組みですね。

英語の animation という名詞を、『ジーニアス英和大辞典』で調べてみると、animate という動詞がもとになっていることが分かり、その動詞の語源は「息を吹き込まれた」だと書いてあります。ちなみに、この言葉のきょうだいとして「animal＝動物」があり、animal とは、「(呼吸している、生きている)→「生きている物」という説明が載っています。『広辞苑』を読むと書いてありますが、日本語の「生きる」は「息」と語源が同じで、「いきる・息る・生きる・活きる」というつながりがあることが分かります。

今のお話、こじつけに思えましたか。確かに、こじつけですよ。本来「平行な状態」の「もの」を「平行ではない状態」の「もの」にするというヒトの行為ですが、これはこじつけ以外の何ものでもありません。ヒトって、かなり強引というか、めちゃくちゃなこじつけをする生き物なのです。そのこじつけの集大成を「文化・知・情報・学問・文明」などと、ヒトは呼んでいます。

*

それにしても、アニメのもとのイメージが「息を吹き込まれた」というお話には、癒やされるというか、すさんだころをやさしくしてくれる力を感じます。大切にしている道具とか、人形とか、車とか、写真とかに、声をかけたり、話しかけるといことがありますね。あれって「息を吹きかけている」のです。山や海に向かって叫ぶ。道端や川辺で見つけた石ころや、海辺で見つけた貝殻を見たり、手にとって何かをつぶやいたり、ひとりごとを言ったり、ささやいたりする。

生きていないはずのもの、言葉が通じないはずのものに、言葉をかける。息を吹きかける。それが「他者」を「思いやる」ことだと思います。

*

今、パラレルに裏仕事として、過去に「潰した＝削除した＝あやめた」ブログ記事を、「うつせみのくら」に収めて再ブログ化する作業をしています。あれも、一種の罪滅ぼしというかたちでの「思いやり」と言えるかもしれません。作業をしながら強く感じるのは、自分がずっと言葉にこだわり続けているということです。過去1年間を振り返ってみると、毎日毎日、言葉のことばかり考えているのです。

それまではあまり意識していませんでしたが、2008年12月19日に初めてブログというものを書き始めてから、自分が言葉にこだわっているアホ＝ビョーキだということがよく分かりました。

で、きょうもこんなことを書きました。相変わらず、あっちへ行ったりこっちへ行ったりのとりとめのない文章になってしまいました。でまかせしゅぎ＝出まかせビョーも、直り＝治りそうもありません。うつと同様に気長に付き合っていこうと思います。

ここまで読んでいただいた方に感謝いたします。

うつせみの からに息かけ 耳すます

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（5）

◆日本語にないものは日本にない？（5）

2009-12-27 14:57:04 | さくぶん

今回は、このシリーズのまとめをしたいと思います。

「日本語にないものは日本にないか」という問いをめぐって、文字通りに意味を取ったり、問いのフレーズをずらして屁理屈をこねたり、横道に逸れまくったりしました。読者の方から、「読みにくい」「何を言っているのか、さっぱり分からない」という意味のお叱りのメッセージも頂戴しました。ですので、今回は小論文を書くつもりで、なるべく「ふつう」のことを「ふつう」の書き方で書いて連載を締めくくるつもりです。

*

この連載のテーマを簡単に述べますと、「各言語における語彙（ごい）は、どのように決まるか」と要約できます。みなさんも、何かでお読みになったか、どこかでお聞きになったと思われる例を取ります。

日本語で、米（こめ）、稲（いね）、苗（なえ）、米粒（こめつぶ）、ご飯（ごはん）、飯（めし・いい）、ライス、もみ、白米（はくまい）、精米（せいまい）と呼ばれているものは、すべて英語では基本的に rice というそうです。「基本的に」と条件をつけたのは、差異を詳しく述べる必要がある場合には、修飾語を加えたり、説明的な言い方になるという意味です。

次に、英語の単語を並べてみます。(1) cow、(2) ox、(3) bull、(4) calf、(5) cattle、(6) heifer。番号を付けたのには理由があります。これらは基本的には、日本語で「牛・うし」と呼ばれているものなのですが、英語では区別するというか、以上のような別個の単語を当てるといいます。順番に、日本語訳を並べます。

(1) 雌牛・乳牛、(2) 雄牛・去勢雄牛（主に食用・荷役用です）(3) 雄牛（去勢していない繁殖用の雄牛です）、(4) 子牛、(5) 畜牛、牛の群れ、牛の総称（複数として扱います）、(6)（三歳未満で、まだ子を産めない）雌牛。

【※日本語では、すべてに「牛」という言葉がついているのに対し、英語では見た目ではまったく別の単語が与えられていることに注目してください。】

日本語を母語としているヒトたちにとっては、「なんで、牛をわざわざ区別して、まったく違った単語で呼ぶのだろう」という疑問が浮かぶのではないのでしょうか。一方、英

語を母語としているヒトたちは、「全部 rice なのに、どうして区別して言うのだろう」と不思議に思うにちがいません。

*

中学か、高校の社会科か、英語の授業で聞いた話なのですが、主に砂漠を移動して生活しているヒトたちが使っているアラビア語では、移動の手段でもあり、衣食住に密接にかかわっているラクダに関する言葉＝語が、100 以上あるらしいのです。それも、地面に座っているラクダと立っているラクダでは別の単語を当てて区別しているとか。うろ覚えですけど、そんな話でした。

やはり学校で習ったことなのですが、イヌイット（かつてはエスキモーと言っていました）の諸語では、雪を表す言葉＝語が、これまたたくさんあるそうなのです。雪の水分や降り方によって、その呼び方つまり言葉が違うという話でした。

虹についても、同じような話を教わりました。日本語を母語とするヒトたちにとっては、虹は七色ですが、これは世界で一様ではなく、言語や地域によって、色の数や色自体の認識も異なるらしいです。

*

所変われば品変わる、なんて言いますが、世界には多種多様な気候・地勢・生態系・環境がありますから、ある土地に住むヒトたちは、その土地での生活という「枠」にとらわれて暮らしているわけです。その「枠」が言葉に表れてくる。そんなふうになれば、上で述べた言葉の違いや、ものごとのとらえ方の違いが、ある程度納得できるのではないのでしょうか。

業界語とか、専門用語というのにも似ていますね。同じ日本に住み、日本語を話しているヒトたちの間でも、自分とは違う仕事や趣味を持ったヒトたちが、自分が知らない言葉＝語を使っているのを見聞きしたり、ある物や事を指して自分ならそうは呼ばない、または言わない言葉を使うのを耳にした経験があるだろうと思います。

「日本語にないものは日本にないか」と問いを、以上のような例に照らし合わせて考えると、そんなにややこしい話でもないと思えるのではないのでしょうか。日本語は、日本という社会での生活を「粹」にして出来上がっている。そんなごく当たり前な話として簡単にまとめることもできそうです。

*

上の文の最後のほうで、「社会」という言葉を使いましたが、そもそもこの連載は、「社会」という言葉をきっかけに書かれたのでしたね。「日本語にないものは日本にない？(1)」2009-12-23の冒頭近くから引用してみます。

＞確か、その本には「日本語にないものは日本にない」という意味のことが書かれていたような気がするのです。タイトルも著者名も覚えていません。ただ、「日本語にないものは日本にない」の一例として、「社会」が挙げてあったことだけは覚えています。

＞明治維新以後に欧米の文化を取り入れるさいに、「社会」という言葉と、「社会」に当たるものが、この国に存在しなかった。で、英語の society やそれに相当するヨーロッパの言語の単語を日本語に翻訳しようとして苦労し、「社会」という言葉を造語した。

＞そんなような話でした。

*

辞書を引けば、「社会」と「society」には、いくつかの意味が載っています。単に「ヒトの集まり」とか「群れ」という意味に取れば、たとえ明治維新前に、「社会」という言葉が日本になかったとしても、「社会」は「在った」ということでしょうか。「社会」を今述べたのとは別の意味に取ったり、屁理屈または理屈をこねれば、「いや、そんなことはない」、ごくふつうに考えれば「そうみたいね」となりそうです。

本当は、あたまのなかで、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃが、うずうずしているのですが、体調並びに抑うつ状態があまり良くないので無理をせず、本シリーズはこんな具合にまとめて、終了させていただきます。

ごちゃごちゃぐちゃぐちゃについては、また別の機会に書きます。どうせ、またいつか、この種の話を書き返して、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃを、うろろうろおろおろやるにきまっていますので。

この連載をお読みいただき、どうもありがとうございました。

では、また。

【追記「うつせみのくら」の造作に専念し、このブログは当分「冬眠」状態にさせていただきます。】

【注：「うつせみのくら」は、過去の記事を再ブログ化する目的で作っていたサイトです。これも、途中で挫折し削除したため、現在はありません。】

10.01.12 かえるはかえる

◆かえるはかえる

2010-01-12 14:12:26 | さくぶん

ヒトが「懐かしい」という言葉の意味を実感するようになり始めたとき、そのヒトは、ある悔しさも覚えるようになるのではないのでしょうか。「あのころに戻れない」とか「あの日に帰れない」という「悔しさ」です。こればかりは、どうにもなりません。残念ながら、タイムマシンは発明されていません。発明される気配も感じられません。

「戻れない」「帰れない」という思いは、ヒトにとって「悔しさ」と同時に「恐怖」でもあります。自分が死に着実に近づいている。「生きつつある」ということが「死につつつある」と同義であると体感している。でも、そのことについては考えない。「なくなる」は「ない」ことにしておく。そんな心理です。さもなきゃ、落ち着いて生きていけやしません。

自分より若いヒトを見るとうらやましい。特に、何の苦勞もなさそうな、生き生きとしたヒトたちが、「若さを楽しんでいる」のを見ると口惜しい。でも、そんな自分の気持ちを認めたくはない。「悔しさ」を自覚すれば、「みじめ」なだけだ。どうにもならないことは、よく分かっている。だから、「うらやましい」や「くやしい」や「はらだたい」を、「けしかん」や「よくない」や「まちがっている」に転化する。

年の功を武器にする。経験を楯（たて）に取る。地位や名誉や財力で、若さに対する優越感を保とうとする。これは致し方ないことでしょう。それしか「悔しさ」を「紛らす＝誤魔化す」方法は見当たらないようです。もっとも、「若くつくる＝化ける」という手もありますが、これも「誤魔化し」に他なりません。

*

発想の転換、つまり取り戻せない若さへの不条理な渴望（かつぼう）や嫉妬を「捨てる＝忘れたふりをする＝誤魔化す」。「年を取る」や「老いる」ではなく、「年を重ねる」や「加齢」といった華麗な美辞麗句に言い換える。「老い」という言葉について考えるのをやめて、別の言葉を探す＝誤魔化す。そうすれば、元気が出るかもしれない。

若いヒトたちを批判したり、いじめたり、難癖をつけたり、罵倒することが、精神的な安定を得るのには効果的かもしれない。同病相憐れむとか、傷口を舐め合うというのではなく、年の近い者同士で付き合う。あるいは、自分よりもっと年上の者に目を向ける。そんなやり方も、憂さ晴らしにはいいかもしれない。

年を取る＝老いるということは、すばらしいことだ。そう自分に言い聞かせて、ネガティブをポジティブに転じる。そうするのもいいだろう。または、「あのころは良かった」と話し合える＝分かり合えるヒトたちだけと付き合えば、みじめさも薄れるかもしれない。

でも、以上の行為はすべて、誤魔化しでしかない。「戻れない」「帰れない」ほど、ヒトにとって「悔しい」ことはないのではないのでしょうか。悲惨な過去を経験し、「昔になど絶対に戻りたくない」と思っているヒトもいるにちがいません。とはいえ、そうした嫌な過去の出来事さえなければ、「若さ」や「自分が最も輝いていた時」を取り戻したいという気持ちは、多くのヒトが共有しているのではないのでしょうか。

*

以上は個人レベルの話でした。集団や共同体や国家や民族のレベルで考えてみましょう。

原点に「戻る・回帰する」。自分たちの本来の姿に「立ち返る・立ち帰る」。本当の自分たちの「心・精神・生き方」を「取り戻す」。こうした言い回しは口当たりがいいですが、「本来の」や「本当の」という言葉に、曖昧さが伴います。早い話が、空疎なのです。説得力に欠けるのです。スローガンとして唱えるくらいにとどめておけば、精神的な安定を与えてくれる方便になり得るでしょう。それだけです。本気になって深く追求すると、きな臭い事態を招きかねません。

かえるはかえるではなく、かえるではないのでしょうか。また、ひとたびかえったら、ふたたびかえることはできないかもしれません。

上のフレーズでは、やまとことばを多用してみました。わけがわかりませんね。多義的だからです。でも、じんときます。個人的には、やまとことばにそなわっている意味の重層性が好きです。言い換えてみましょう。

「返る・帰る・還る」は「返る・帰る・還る」ではなく、「変える・換える・代える・替える」ではないのでしょうか。また、ひとたび「孵ったら」、ふたたび「孵る」ことはできないかもしれません。

「返る・帰る・還る」は不可能ではないかと思われまます。「変える・換える・代える・替える」は可能でしょう。再度「孵る」＝「生まれ変わる」が可能かどうかについては、個人的には懐疑的です。輪廻というお話は信じていません。生物も無生物も含む「もの」が

解体したり腐敗して別の「もの」に、原子や分子レベルで受け継がれるという考え方は別です。よくできたお話だと思います。

*

ヒトはさまざまな「かえる」とかかわり合いながら、生きざるを得ないのですが、「かえる」が幸せや喜びだけでなく、憎しみや苦しみや争いや殺めることの種（たね）でもあることを忘れてはならないと思います。

「返る・帰る・還る」については、たとえばパレスチナを思い浮かべてください。現在も続いている悲惨で不幸な事態が、「返る・帰る・還る」と同時に、「変える・換える・代える・替える」の問題でもあることは容易に想像できるのではないのでしょうか。パレスチナは一例です。世界には、同様の危機をかかえたりはらんだ地域が数多く存在します。

国家や地域といったレベルだけにとどまりません。「返る・帰る・還る」を「返す・帰す・還す」とずらしてみましよう。対象となるのは、お金、土地、財産、物、人、権益、権利、恩、仇……。あなたの身のまわりでも、こうしたものをめぐっての問題が起きていませんか。無数に起こっているはずです。

返る・帰る・還る。

ノスタルジー＝郷愁や復古や回帰といった言葉やイメージとはかけ離れた、きな臭くて、血生臭い出来事が現実に関わりつつあるのです。かつてもそうでした。これまでもそうでした。これからもそうでしょう。

「戻れない」「帰れない」が「戻りたい」「帰りたい」へと「変わり」、「地」に「血」が流れる。

「しる・知る」は「領る（＝領土とする）」とも表記された、と辞書にあります。最初に「地・土地」があった。その「地」を、ヒトが「知り・領り＝silly＝名付け＝汁（しる）つまりおしっこをかけてマーキング行動をし＝つばをかけ＝自分のものだと宣言し」、「地」が「知」となった。次に、「知」である「地」をめぐって、他の生き物たちを相手にする

だけでなく、種（しゅ）を同じくする仲間同士で「血」を流し合う。「痴」かつ「恥」な話ではないでしょうか。ちっ、ちっ、ちっ。

こうしたことについては、「地と知と血（1）」2009-06-22、「地と知と血（2）」2009-06-22、「な、いいだろう？」2009-10-29、「テラ取り物語（続・「な、いいだろう？」）」2009-10-30、「宇宙法廷審理中（1）」2009-10-31～「宇宙法廷審理中（4）」2009-11-03で、手を「替え」品を「替えて」さんざん書きました。書かずにはいられなかったのです。

*

ヒトは、「変える・換える・代える・替える」はできても、「返る・帰る・還る」はできません。時間的にも空間的にもできません（この点については、「揺らぎ」と「変質」2009-06-29で詳細に論じてあります）。土台無理なのです。言葉が代理である限り、不可能なのです。

「何かの代わりに何かではないものを用いる」、つまり「代理という仕組み」以外に頼れば、別ですけど。ほかに何か名案があるという話は、聞いたことがありません。迷案はたくさんあるみたいです。科学や宗教や哲学や心理学やハウツー本などに紛れ込んでいるらしいのですが、本を読まない性質なので、その種のテーマについては詳しくありません。

「何かの代わりに何かではないものを用いる」を言い換えると、ヒトは「再現する」ことはできないと言えそうです。「想像・創造・創作・作文・捏造」、要するに「つくる」ならできると思われます。

「返る・帰る・還る」はできないけど、「変える・換える・代える・替える」はならできるといふ、さきほどの「お話」に似ていませんか。激似じゃないですか。「お話」で思い出した「お話」があります。

フランス語に *histoire*（※「イストワール」みたいに発音しますね）という語があって、「物語・話」と「歴史」の両方の意味がある。そんな話をお聞きになったことはありませんか。英語の *history* に相当する単語ですが、英語でも「歴史」のほかに、「（ある人物の）物語・経歴・伝記」という意味でつかわれることが多いみたいです。この語のきよ

うだいには story がありますね。この2語を英和辞典で引くと、えーっと思うような語義もあると思います。ぜひ、お試しください。

また、思い出したことがあります。history がらみの駄洒落なのですが、history は、His story だということです。His が大文字になっていることに注目してください。英語で He が文頭を問わず大文字扱いにされるのは、「神様」の場合だけだそうです。世界の歴史は神の物語ということですか。八百万（やおよろず）の神々とは違いますよ。唯一の神です。うーん、と唸ってしまいます。こんなん、駄洒落では、済まされまへんでー。ほんまもんでっせー。マジこわでっせー。

He は唯一無二なんですよ。His story の一字一句が真実だと信じているヒトたちがたくさんいるのです。この意味=重大性を、マジで考えて感知しましょう。残念ながら、この国ではなかなか感知できません。ピンとこないのです。

何だか、きな臭い。上述のパレスチナを思い出しますね。思い出して当然。気が付かなければならないのです。「アルマゲドン」なんて、聖なる書に出てくる言葉も頭の中でちらつきます。怖いです。とっても怖いです。アルマゲドンとなれば、対岸の火事では決して済まされません。この星レベルの大惨事です。原子爆弾が使用されるのは確実です。1個や2個で済むわけがありません。復讐の連鎖に火がつくのですから。今述べていることは、21世紀最大の問題だと感じていることなので、余計、恐ろしさが増します。

*

「話」を「戻し」ます。

ヒトは「再現する」ことはできないと言えそうです。「想像・創造・創作・作文・捏造」ならできると思われます。

神話、説話、伝説、語り物、民謡、民話、口承、口伝、昔話、史書、史伝、教義、聖典、記録、報告書、レポート、公文書、古文書、古記録、調書、ドキュメンタリー、ルポルタージュ、ノンフィクション、新聞記事、テレビやラジオやネット上のニュース原稿。

これらは、みな広義の *histoire* であると言えそうです。このブログでは、もう一步踏み込んで、*fiction* と呼んでいます。与太話＝ガセ＝でたらめ＝でませ、なんて悪態や罵倒ともいえる言葉で呼ぶこともあります。いずれにせよ、上で羅列したものは、すべてが「言葉という代理」で「語られている＝騙られている」点で共通しています。

何度も何度も語られる。繰り返し、また繰り返し、復唱する。同じことを何度も聞かされる。同じことを何度も言わされる。すると、「本当」に思えてくる。そんな「話」を聞きました。本当かどうか、よく知らないのですが。知らないと思いついてただで、このアホもどっぷり「かたり・語り・騙り・カタリ」の世界にはまりこんでいるにちがいありません。そうでなければ、ヒトではありません。ひとでなしです。

*

では、絵、写真、動画はどうでしょう。ヒトは聴覚的イメージと視覚的イメージの2つに大きく依存しながら生きています。ビデオによる再生、つまり動画の場合には、映像と音声を「再現できる」とされています。この依存状態に異存のある方は数少ないという気がします。マイノリティーです。

「再現ができる」に異を唱えることは、タブーに近い。大げさではなく、そう感じていません。それを言うてはおしまいになるからです。たとえば、警察・検察・裁判所での記録はすべて「嘘」である、という帰結になりかねないからです（この点については、「つくる(4)」2009-06-06 & 「あなたなら、どうしますか？」2009-10-27 でも書きました）。繰り返します。

>何度も何度も語られる。繰り返し、また繰り返し、復唱する。同じことを何度も聞かされる。同じことを何度も言わされる。すると、「本当」に思えてくる。

非常に微妙な問題ですから、このブログを書いているアホは、この点についてはみなさん自身のご判断に任せるのがよろしいかと存じます。老婆心ながら、付け加えます。自分の頭で考えてください。特に、「つくる」側の当事者の意見は、身びいきと保身に満ちていますから、くれぐれも「騙(だま)されない＝騙(かた)られない」ように注意しましょう。

なにしろ、相手は言葉遣いと辻褃合わせとペーパーワークのオーソリティーであり、エキスパートなのです。半端じゃありません。いわゆる知能指数も、いわゆる偏差値もかなり高い方々ばかりです。たぶん、ですけど。いずれにせよ、言葉というペラペラで無節操な「ラベル＝代理＝表象」をつかえば、何とでも言えます。

*

ですので、以上の問題は、きわめて手強い難問だと言えます。あえて、そんなややこしいものには触れないでおく。そうしたスタンスでいるほうが、いわゆる精神衛生上＝メンタルヘルスの点において、賢明だと言えそうです。

極楽トンボ＝「気楽にいこうぜ！」でいくのが、楽だし、健康的かもしれません。いや、絶対にそうです。

かえるはかえる。こんな怪しげな「おまじない・お呪い・まじない・呪い・マジない・のろい・呪い・鈍い・ノロい」は忘れましょうか。失礼しました。

*

でも、気になるヒトは大いに考えてみませんか。

みんなでやろうぜ！

どこかの大手広告代理店作とも噂されている、お下品な言葉を吐いてしまいました。そういえば、最近、あのヒトたち言わなくなりました。よほど不評だったのでしょうか。いずれにせよ、たいへん失礼いたしました。

10.01.13 かえるにかえる

◆かえるにかえる

2010-01-13 11:27:25 | さくぶん

前回の「かえるはかえる」2010-01-12 では、話をややこしくしないために、あえて深入りしなかったというか、あっさり切り捨てたことに、今回はこだわってみたいと思います。

*

何を切り捨てたのかと申しますと、「まえ・前」と「うしろ・後ろ」には2種類あるという点です。つまり、空間的および時間的な意味合いがあるということです。この問題については、「揺らぎ」と「変質」2009-06-29 で詳細に検討したのですが、ややこしい記事なので、以下に要点だけを自己輸入＝自己引用させていただきます。

*「ヒトは空間を主（しゅ）に、そして時間を従（じゅう）にして、たとえている」のではないのでしょうか。

*「ヒトは、空間的（＝視覚的）イメージを時間的（＝聴覚的？）イメージに優先させる＝ヒトは、時間的（＝聴覚的？）イメージよりも、空間的（＝視覚的）イメージをいまくほうが得意である＝ヒトは、時間的（＝聴覚的？）な情報処理よりも、空間的（＝視覚的）な情報処理のほうが得意である」と単純化してみましたが、どうでしょうか。

以上が引用部分です。もちろん、素人の中でもアホである者の愚見＝与太話です。それをご了承いただいたうえで、話を進めさせていただきます。

*

英語を例に取ってみましょう。これは、必然的に、このアホの母語である日本語との対照になります。ジーニアス和英辞典を参考にさせていただきます。

「前に、前の、先に、先の、あとで」に当たる語（句）は、in front of、before、forward、ahead of、preceding、former、previous、ago、prior to、previous、back などがありますね。一方、「後ろに、後ろの、のちに」に相当する語（句）としては、back、rear、behind、backward、at the back of などが挙げられます。

各語（句）の用法を例文で調べてみると分かりますが、単純には割り切れません。言葉だから当然のことです。まして2言語がからみ合っただけのお話ですから、込み入ります。そもそも割り切れないのが、「言葉＝言語&語」の特性のようです。

たとえば、in front of は空間的な意味合いで使われるのがふつうです。before には空間的・時間的な意味合いの両方があります。この辺の「かげん」というか「ほどあい」というか「ぐあい」は、日本語を母語とするヒトたちにはピンとこないのではないのでしょうか。

ほかにも不思議に思えることがあります。ago は「～前に」という時間的な意味で用いられますが、これを「過去」と考えると、これが和英辞典において、どうして「これから～先に＝（強いて言えば）前に」、つまり「未来」の意味でも使われる ahead と並んでいるのだろう。そんな具合に、わけが分からなくなります。

back が「前」と「後」の両方にまたがっているのも奇妙な気がします。a while back という、「数週間（数カ月前）」だと辞書にあります。その一方で、back in London などといえば、「かつてロンドンにいたころには」みたいに過去の意味になります。

*

ひとくちに「時間的」と言っても、「時間の経過」と「順序」では違いがあります。ま

た、そもそも各語（句）のレベルでの意味と用法を、日本語と英語という異言語の「間・あいだ・あわい」で処理しようとしている前提と方法そのものに無理があるような気がします。また、「空間→時間」「時間→空間」「空間↔時間」という感じで比喩のやり取りをしている「言葉＝言語&語」の「構造・仕組み・力学」（※そのようなものがあれば、の話ですが）自体に無理があるのではないかとも思えてきます。

ややこしいですね。いわゆる頭のいいヒト＝情報処理能力の高いヒト or 直観力に秀でたヒトなら、もっとすっきりとした説明ができるにちがいありません。

ヒトは時間と空間の処理を、自らの知覚能力と、言語という代理を用いてかろうじて行っている。

アホとしては、そんなふうに、自分の頭の悪さを「脇に置いて＝棚に上げて」、ヒトという種の「能力・脳力・意識・知覚・言語活動」に責任を転嫁するくらいの浅知恵しか持ち合わせていません。まことにトホホな話なのです。いや、卑怯だと反省すべきです。ごめんなさい。

*

突然ですが、出まかせを言わせてください。漏れそうなのです。

かえるにかえることはできない。

失礼いたしました。おかげさまで、すっきりしました。「こんなんでもしたけど……」(※このセリフに、心当たりのある方は、「ケータイ依存症と唇」2009-01-27 をご参照ください。アツノさん、あなたは今どこに?)。

当ブログでは、徹底して言葉に身をまかせます。まけるのです。地面に背中をくっつけ、お腹を見せて、前足をちぢめる。こうした動作を、気のいいワンちゃんがよくしますね。あんな感じです。白旗を掲げる、なんて言い方もできそうです。言葉に遊んでもらう。言葉にもてあそばれる。そんな言い回しも、しっくりします。

なお、なぜ、言葉に身をまかせるのかについては、「台風と卵巣」2009-06-19、「あなたとは違うんです」2009-12-11、「ケータイ依存症と唇」2009-01-27、「もてあそばれるしかない」2009-12-03のうち、どれかにちらりと目を通していただければ嬉しいです。また、その根本にある「代理＝表象＝道具」とヒトとの間の「主従」の関係性をめぐっては、「できないのにできる」2009-08-04、「めちゃくちゃこじつけて」2009-08-06、「銃が悪いのではなく」2009-08-07に書きました。ご関心のある方だけ、ご参照ください。そんな暇はない、興味もないとおっしゃる方はパスしちゃってください。

*

「出まかせ」などという言い方をしますと、何だか、このブログでは言葉に対して悪態ばかりついている、とお思いの方がいらっしゃるといけないので、ここでお断りしておきます。自分は、言葉を愛しています。いとしいと思っています。正直申しまして、いかがわしいとか、うさんくさいとも、思っています。でも、言葉を信じています。

たとえ、言葉が「何かの代わりに何かでないものを用いる」という意味での代理であっても、言葉を信じています。信じるしかないのです。このアホもヒトなのです。「ひとでなし」にはなりたくありません。

*

で、話を戻します。きのうは「かえるはかえる」という出まかせの「言葉＝フレーズ」にもてあそばれ、きょうは「かえるにかえる」に翻弄されている次第です。繰り返します。

かえるにかえることはできない。

これをずらしてみます。きのうのように分光してみます。

「返る・帰る・還る」に「返る・帰る・還る」ことはできない。

こうなります。でも、「原点」や「自分たちの本来の姿」や「本当の自分」という曖昧模煇としたものに「返る・帰る・還る」ことができると信じているヒトが、世の中には圧倒的に多いようです。それは日々痛感しております。そう信じていないヒトはマイノリティとか偏屈者とか非国民とかアホとか売国奴とか、ひどい言葉＝ラベルを貼られます。

それだけではなく、『返る・帰る・還る』に『返る・帰る・還る』ことはできない」なんて言えば、「事件＝出来事を言葉によって再現できる」という大前提に立つ、司法制度そのものにケチをつけることにもなります。これも鬻蹙（ひんしゆく）を買うでしょうね。いや、司法の世界には、いわゆる頭のいいヒトたちや言葉つかいの名人が多いみたいですから、そういうお利口な方はこんなアホの言うことは無視するに決まっています。もしもケチをつけてくるヒトがいるとすれば、『返る・帰る・還る』に『返る・帰る・還る』ことはできない」を「論破」（※この言葉は好きではないのですが、いちおうつかっておきます）できない雑魚（ざこ）でしょうか。

それはともかく、きのうも触れましたが、ヒトは時間的にも空間的にも「返る・帰る・還る」ことはできないみたいなのです。どうしてかと申しますと、時間的には、「タイムマシンがない」ということが答えになります。この場合の「タイムマシン」とは、SFの世界で見聞きする例の「機械」であるだけでなく、「比喩」でもあります。「比喩」というのは、「想起・再現・復元」という意味です。

何を言いたいのかと申しますと、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という「代理の仕組み」の大御所である言葉（音声や文字）と視覚的イメージ（映像）を用いる「限り（＝限界）」、「想起・再現・復元」は無理・不可能ではないかということです。調書であろうとビデオであろうと厳密に言えば no no というわけです。「想起・再現・復元」という前提が、no no なのですから――。これも、いわゆる頭のいいヒトには、戯言（たわごと）だと感じられるにちがいません。たぶん。

「原点」や「自分たちの本来の姿」や「本当の自分」や「過去の出来事」や「過去の状態」を「想起・再現・復元」することは、ヒトという種の「知覚・意識・能力」を超えています。「想像・空想・妄想・錯覚・幻覚・思い込み・創作・捏造・『できるということにおこうぜ!』・『な、できただろう』・『できないなんて言わせないよ』」なら、「できる」でしょう。このアホには、それくらいのことしか言えません。

*

「返る・帰る・還る」に「返る・帰る・還る」ことはできる。このフレーズへの信仰というか信奉はきわめて根強いようなので、平和主義者であり、弱虫であり、腕力もなく、仲間や友達もいない、特定の集団や組織にも属していない身である、このアホはフレーズを「ずらす」ことにします。

「孵る」に「返る・帰る・還る」ことはできない。

これなら賛成していただける方が多いのではないのでしょうか。たとえば、ひなが卵から孵ることを思い浮かべてください。いったん孵った鳥の赤ちゃんが、ふたたび孵るという状況は「あり得ない」のではないのでしょうか。賛成していただけますでしょうか。

アレゴリーという言葉があります。寓意と訳すこともありますね。言いたいことを直接言えない場合に、用いられるレトリックです。風刺と親和性があります。時には「ふうゆ・諷諭・風論」と呼ばれるくらいです。このアレゴリーについて興味のある方がいらっしゃいましたら、「たとえる (4)」2009-04-04、「たとえる (5)」2009-04-05、「たとえる (6)」2009-04-05 で、おふざけをまじえて詳しく論じていますので、よろしければご笑覧ください。もちろん、パスしていただいても一向にかまいません。

さて、「かえる」を「孵る」と「返る・帰る・還る」とに心の中で分光しながら、「かえるにかえる」ことはできない、と言ってみる。これも、一種のアレゴリーではないでしょうか。差しさわりがありそうな場合に、Aと言う代わりに「とりあえず=わざと」Bと言っておく。分かるヒトだけには、AではなくBだと分かる。これがアレゴリーの仕組みです。簡単に言えば、「たとえ・比喩」です。比喩のうちでも、隠喩をエスカレートさせた一種の「ほのめかし」と言えそうです。

なんで「ほのめかす」のかと言えば、さきほど述べたように「差しさわり」があるからなのですが、その「差しさわり」にもいろいろあります。「気遣い」「配慮」「遠慮」くらいなら、いいのですが、「こんなことをいっちゃ相当ヤバイ」「すぐく腹を立てるヒトたちがいそうだ」「身の危険すら感じる」という具合に、まことにきな臭い事情がある場合にも、「ほのめかす」「アレゴリー」を用いることがありますね。

「ファシズム＝全体主義」体制下では、文字を使った文学や記事だけでなく、漫画・絵・写真など視覚的な手段を用いたり、歌・演劇・映画・テレビドラマといった形態で、広くアレゴリーが活用されてきました。権力に対する弱者によるささやかな抵抗である場合が多く、検閲の標的にされたあげく「処分される」という、恐ろしい運命を覚悟しなければならないこともあります。

*

かえるにかえることはできない。

このフレーズは、時には非常にヤバイ事態を招きかねないのです。ですから、「かえるにかえる」の部分は、『返る・帰る・還る』に『返る・帰る・還る』ではなく、『孵る』に『返る・帰る・還る』と差しさわりのない漢字を当てておきます。念のため。

「孵る」に「返る・帰る・還る」ことはできない。

以上のようにしておきます。音読すれば、同じなんですけどね。このアホは、アホのくせに意外と気遣いのヒト、いや、気遣いのアホなんです。ぶっちゃけた話、小心者なのです。

10.01.14 もどるにもどれない

◆もどるにもどれない

2010-01-14 11:27:20 | さくぶん

みなさんが今お住みになっている場所から出て行けと命令されたり、お持ちになって

いるものを手放せと言われたら、嫌ですよ。このアホも、とっても嫌ですし、だいいち困ります。でも、そういう事態って、これまでも世界各地で数えきれないほど起きていたし、現在でも起こりつつあるようです。

「平和ボケ」という不愉快な言葉がありますが、百歩いや千歩譲って一理はあるかなと思います。確かに安全と平和が当たり前だという心持ちでいることは、危険です。毎日のテレビニュースや新聞記事を、よく見たり聞いたり読んでいけば、ヒトの世界がきわめて物騒であるのが分かります。

「当たり前」「当然」「ふつう」「そうであってしかるべき」といった言葉やイメージは、「惰性」「不注意」「だらしない」「能天気」「鈍感」「愚鈍」「思考停止」とかなり近いような気がします。

*

朝起きる。朝ご飯を食べる、あるいは食べない。学校や仕事に出かける、あるいは家事をする、あるいは家にいる。夕方や夜に住まいに帰る。夕飯を食べる、あるいは食べない。お風呂に入る、あるいは入らない。寝る。

お金がある。そのお金で何かを買う。今、自分の着ている服を見る。少なくとも、それは自分のものだ。水道の蛇口をひねる。そのまま、その水を飲める場合もある。お湯の出る蛇口がある場合もある。110番に電話をすれば、おそらく10分以内で警察官がかけつけてくれる。銀行に行けば、自分の口座から残高内のお金を自由に引き出せる。テレビのスイッチを入れる。電源が入り、電波が届いて、番組を見ることができる。大きな道路に出れば、車は左側を通っている。もし、自分が死ねば、誰か、あるいは役所が埋葬の手続きをしてくれる。

以上のことは、「当たり前」「当然」「ふつう」「そうであってしかるべき」ことだと考えられている。「映るかな?」「お願いだ、映ってくれ」とつぶやき、恐る恐るテレビのスイッチを入れるヒトは、この国にはまずいそうもない。

*

既得権、既得権益、権利、所有権、基本的人権、財産権、広義の権利、広義の義務、既存の制度、法、掟、伝統、従来からの風習・慣習・ならわし・ルール・政策・施策・約束事・利害関係・人間関係・枠組み・型・様式・方法・手続き・恩恵・特典、「これは私のもの」、「私にはこれをつかう権利がある」、「これは死んでも放さない」、「あれに触っちゃ駄目」、「絶対に嫌」、「駄目駄目」、「嫌だ嫌だ」、「そのように法で定められている」、「そういう掟がある」、「国家が保護してくれている」、「国家の保証（保障）がある」、「そのように社会で決められている」、「とにかくそうになっている」、「なぜかそうになっている」、「これでいいのだ」、「これしかない」、「これのどこが悪いんだ」、「ですけど、何か？」

ヒトは、以上のような「もの・こと・状況」に取り囲まれて生きています。こうした「もの・こと・状況」をずらしてみましよう。言い換えてみましよう。置き換えてみましよう。かえてみましよう。

「もどれない」「もどらない」「かえせない」「かえらない」「かえれない」「かわれない」「かわらない」「はなせない」「はなさない」「しがみついている」「なしではいられない」

そんな感じですが、どうして、こうなっちゃったんでしょう。わかりません。

*

ヒトは「もの・こと・状況」を名付ける。言葉というラベルを貼る。ワンちゃんやニャンコがあちこちでおしっこやうんちをするように、ヒトはいろいろなものに唾をつけて、自分のものだという「しるし・記し・印し・標し・知るし・汁し」にする（※こうしたことについては、「な、いいだろう？」2009-10-29、「テラ取り物語（続・「な、いいだろう？」）」2009-10-30で、書きました。ご興味のある方だけ、よろしければ、お読みください）。もちろん、ほかにも同じようなことをするヒトたちがいる。すると、争いが起こる。それによって、強弱、上下、主従が決まる。そうやってヒトは暮らすわけ。クラス分け。

「上下」という言葉で思い出したことがあります。一昨日、昨日に、「かえるはかえる」2010-01-12、「かえるにかえる」2010-01-13という駄文で書いていたことの続きになりますが、「空間」と「時間」について、ずっと考えているのです。気になって仕方がないだけなのですけど。

*

その話をさせてください。

昨日の記事では、「まえ・前」(空間)、「まえ・前・さき・先・未来」(時間)、「うしろ・後ろ」(空間)、「まえ・前・過去」(時間)みたいなことを、英語と対照しながら考えていて、わけが分からなくなりました。それだけならいいのですが、自分がわけが分からなくなったのを、ヒト一般の知覚能力や、言葉(「語・言語・言語活動」)のせいにして、お茶を濁すなどという卑怯な行為に走ってしまいました。アホにもアホなりの仁義がありまして、記事を投稿してから、罪悪感を覚えて、うじうじめそめそしていた次第です。

で、「まえ」「うしろ」「まえ」「うしろ」……などと、ひとり言を言いながら、狭い自室の中をうろうろしていると、ネコ(※うちにいる猫の名前です)がうざったく感じたのか、部屋から出て行きました。ネコにまで見放されてがっくりきて、ごろりと寝転び、軽いめまいを覚えたところ、現在、宇宙空間でお仕事をなさっている、宇宙飛行士の野口聡一さんのお顔と頭が頭に不意に浮かびまして、「あっ！」と叫んでしまったのです。

めまいと同時に「無重力状態」「無重力空間」という言葉とイメージがどっと押し寄せてきました。「まえ・うしろ」だけじゃないじゃんか。

「まえ・うしろ・うえ・した・みぎ・ひだり・ななめ……」

この星のある島のある地域のある家のある部屋で、いま、ここで、手持のものを大切に。そうしたスタンスで考え、ぼけーっとし、言葉をつぶやき、その言葉をつづる。これが、このブログを書いているアホの「手仕事=ブリコラージュ=無賃の内職=暇つぶし=ひつまぶし=しこしこ=だらだら=ふらふら=「無為徒食」の無為=出まかせごっこ」ではなかったか。

*

そんなふうに思ったのです。で、これまでずっと不思議に思っていたことが思い出されて、頭の中がごちゃごちゃぐちゃぐちゃ状態になりました。

そもそも位置って何？ 視点・視座って何？ 主語って何？ 主体って何？ ついでに、客体って何？ 語・語句・文・文の連なり・文章・作品・文献における視点・主語ってあるの？ 夢や夢想にも視点・主語ってあるの？ 絵・写真・漫画・映像のコマ、そしてそのコマが連続した動画における視点ってどうなってるの？ ヒトは時間を円環や線状に「たとえる＝こじつける」なんてやってるけど、それって有効性はどれくらいあるの？

前後なんて、空間と時間のこじつけごっこやってるけど、どこまで正気なの？ ついでに、上下左右斜めまで頭に浮かんだけど、それって重力があってこそその言葉とイメージちゃうか？ 宇宙空間では、位置とか視点とか主体って意味があるの？ 宇宙船でいろいろやっているけど、しょせん、地上のイミテーションじゃないの？ 宇宙ステーションでイミテーションってイミあるの？ 「発想＝枠組み」の転換が必要だなんて、やっぱり素人であり、しかもアホの浅知恵？

ついでに、ヒトが生まれてから死ぬまでの「間・あわい・過程・プロセス」を、植物なんかの成長にこじつける、また、その逆方向でこじつけるなんてやっているみたいだけど、有意＝意味あり？ 生から死を流れにこじつけるのも、意味ありなの？ それともヒトに通じるだけの仲間内ギャグ？ 進化・発達・発展・退化・衰退・段階なんて言葉とイメージで、生物や無生物の移り変わりを語っているけど、騙っていることにならない？ そもそも「移り変わり」って何？ それって有り？ それとも、ヒトの思い込み？ 知覚・意識という枠組み内での話だけのこと？

以上挙げたのは、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ状態のほんの一部なのです。

*

話を戻します。というか、話を限定します。

前後、上下、左右、空間と時間——これらの関係性に関して言えば、ヒトは「観測できない」のではないかという気がします。おそらく、知覚・意識・言葉・イメージの各レベルにおいて、相反する要素、あるいは「圧倒的な偶然性」に支配されている、でたら

めきわまりない要素が「代理の仕組み」によって、さまざまな「そこそこ必然的に」見えなくもない「形態」に「化け」ているために、ヒトは混乱を来たしているのではないかと考えられます。

さらに言うなら、視点＝視座＝「観測者の位置および能力」が問題となっている場合には、本来相対的な現象であるものを、絶対化志向を属性とするヒトという生体が、知覚し、認識し、記憶し、想起し、意識するのは、ほぼ不可能だと言っているのではないのでしょうか。でも、圧倒的多数のヒトたちは「可能」だと思っているし、「現にできているじゃないか」と言います。「不自由さ」が「当たり前」になると「自由」になります。ただし、それはヒトという「枠内での「お話＝フィクション」でしかありません。

お断りしておきますが、今述べていることも、ヒトという、いや、ヒトの中でもアホという者の「枠内」での「お話＝フィクション＝たわごと＝でまかせ＝ガセ」であることは言うまでもありません。

きわめて「いかがわしく頼りない観測者であるヒト」は、自分たちが捏造・創作した広義の「代理＝表象」（※話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、指点字、点字、音声（発声）、音楽、合図、映像、図像、さまざまな標識や記号や信号など）という枠組みを、「それなりに使いこなしている」＝「（見方によっては）使いそこねている」というのが、正確な言い方だという気がします。気がするだけで、実際のところはわかりません。このアホに分かるわけがありません。

*

ところで、上で述べましたように、四畳半の部屋で転倒してめまいを覚え、いきなり「無重力状態」「無重力空間」という言葉とイメージがどっと押し寄せてきて、しばし頭の中がごちゃごちゃぐちゃぐちゃ状態になったのは、過去1カ月ほど、過去に「つぶしちゃった＝あやめちゃった＝削除・閉鎖しちゃった」ブログとその記事たちを、「うつせみのうつお」という「倉庫＝お墓」から1日に約10本、多いときには20本ほど、せっせと「移して＝写して」、ブログサイトに投稿し、再ブログ化するなどという、とちくるった作業に取り組んでいたせいかもしれません。【注：「うつせみのうつお」は削除し、現在はありません。】

1年分のいろいろな記事を再投稿しているさいには、その内容をちらりと読まないわ

けにはいきません。ありや、こんなとちくるったことを書いている。こんなこと書いたっけ？ ふーん、そんな考え方もあるんだ。という具合に、他人事のように、つい読みふけた記事もありました。その意味では、頭の整理ができたというか、何を書いたのかの確認ができたというか、いい経験になりました。

初めて書いたブログのころからメッセージやメールを送ってくださっている「Hさん」(※「ブログ廃人と呼ばれて」2009-12-08、「ブログと心中？」2009-12-10、「とりとめもなく」2009-12-21、「パラレル」2009-12-22、「日本語にないものは日本にない？(3)」2009-12-25 に出てくる、口はととも悪いのですが心やさしい方です)からは、「あんた、やっつで殺したブログに罪滅ぼしをしたね。今後殺したら承知しないからね」との励ましのお言葉を頂戴いたしました。Hさん、ありがとうございました。

*

話を戻します。

いつものように出まかせを言わせてください。さきほどの、「既得権、既得権益、権利、所有権、基本的人権、財産権.....」というリストにあることどもも、「そもそも位置って何？ 視点・視座って何？ 主語って何？ 主体って何？.....」というフレーズの羅列も、次の言葉に集約できるのではないかと思うのです。

もどるにもどれない。

いったん、「手にしたもの＝奪ったもの」は放さない。いったん、「決めてしまった＝決まってしまった」ルールは直せない。いったん、「そうなってしまった」ことは、「そうでない」にもどせない。言い換えると、そういうことです。

ヒトは「かえる・変える・帰る・代える・換える・替える・返る・還る」ことができない。

とも言えそうです。「ヒト＝人間様」は、革新・イノベーション・革命・レボリューション・進化・エボリューション・発展・発達・進歩を成し遂げてきたではないか。そんな反

論も予想されます。今、並べた口当たりのいい言葉たちは、「かえる・変える・帰る・代える・換える・替える・返る・還る」を「上向きに」「プラスに」「より良く」「より便利に」という意味合いにずらしたものに他なりません。でも、それらの美辞麗句は、残念ながら、ヒトが「でっちあげた言葉」であり、ヒトが勝手に「いただいているイメージ」でしかありません。

言葉は、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という「代理の仕組み」の「枠＝限界」内にあります。イメージは、基本的にヒトが個人レベルでいただくきわめて「テキストな」もので、「とてもじゃないが信用できるに値しない＝有効性がかなりあやしい」属性を帯びているようなのです。なお、イメージの「いかがわしさ」については「あられる・あらず (7)」2009-05-31、「あられる・あらず (8)」2009-06-01、「げん・幻 -10-」2009-08-22 で、いかがわしく、しかも詳しく論じていますので、関心のおありになる方だけ、ご参照ください。

*

何を言いたいのかと申しますと、言葉とイメージの限界性を意識しませんか、という提案をしているのです。言葉と、言葉やヒトが知覚しているところの「こと・もの・状態」が喚起するイメージは、比喩的に言えば「欠陥品」である。ですので、どういうふうに「欠陥＝不具合＝有効性の欠如」があるのかを、みんなで考えてみませんか。そう申し上げたいのです。

たとえば、ヒトにはさまざまな領域＝テリトリーを専門になさっている方々がいらっしゃいます。数あるうちで、たとえば、広義の物理学・生物学・心理学・哲学・医学・数学・清掃業・文芸批評・歴史・情報理論・主婦業・工学・土木・農業・林業・漁業・福祉関連業務・宗教などに携わっている方々は、それぞれの分野で、言葉とイメージの「欠陥＝不具合＝有効性の欠如」を日々、つくづく意識していらっしゃるにちがいありません。意識する、気がつく、何となく感じる。そうした状態から、もう一步踏み出してみませんか。

いったい、どうなっているのだろう？

*

ひとつ例を挙げるなら、ヒトは「上下」という知覚・意識・言葉・イメージをめぐって多種多様な「こじつけ＝たとえ＝代理ごっこ＝表象とのたわむれ」を日常的に体験しています。「進む」という動作のイメージが「上下」という位置関係とからんだ場合には、「進化・進歩・発展・発達」といった「言葉とイメージ」と、それに類似する「言葉とイメージ」の連鎖が生じる。そこから、「進む」ことは「階段を上がる」ように「より良い状態になる」というイメージが生まれます。

でも、果たして、「進化・進歩・発展・発達」は、本当に「より良い状態になる」と言えるでしょうか。21世紀を10年過ぎようとしている現在、人類は「進化・進歩・発展・発達」し、「より高いレベルへと上がり」、「より良い状態になり」つつある、と言えるでしょうか。

また、「上下」という知覚・意識・言葉・イメージは、「物理的な上下」から「ヒトや生物という枠内での上下」へと「こじつけて考える＝つながっているとみなす」こともできます。「上下」に「値・価値・力・優劣」という要素をミックスするのです。すると、階級・等級・位（くらい）・クラス・カースト・序列・身分・「貧富の差」の差・ランク・数値化・定量化という一連の言葉とイメージが生じます。基盤というか共通項は「上下」という位置関係です。これらの「もどるにもどれない」性は根強いです。てこでも動かない感じです。

*

もどるにもどれない。いったん、手にしたものはなかなか手放せない。「これは私のもの」。とにかくそうになっている。これしかない。これなしではいられない。

確かに、「もどる」のは至難の業です。でも、「振り返る」ことくらいはできそうです。ちょっと、ひと休みして、振り返ってみませんか。

単純で短絡した与太話になってしまいましたが、申し上げたいのは、そうしたたぐいのことなのです。もっと整理してお話しする必要がありそうです。いつか機会をあらためて、お話＝与太話をしたいと思っております。

*

ここまでの駄文を読み返していて、思ったことがあります。

*昨日の「かえるにかえることはできない = 『孵る』に『返る・帰る・還る』ことはできない = 『返る・帰る・還る』に『返る・帰る・還る』ことはできない」

というフレーズと、今日の

「もどるにもどれない」

は似ていませんか。その意味合いはかぶるところもあれば、かぶらないところもあります。

言葉の綾という言葉があります。上の両者の「差異=際=違い=隔たり=間・あわい」については、あまり深く考えなくてもよい気がします。似ていると感じられるのは、言葉の綾のせいです。両者は別の問題だ、と考えるほうが妥当かと思われます。

むしろ、「もどるにもどれない」は、さきほど上のほうで書いた「ヒトは『かえる・変える・帰る・代える・換える・替える・返る・還る』ことができない」のほうに近いです。混乱なさるといけないので、ここでお断りしておきます。ごめんなさい。

「ことわり・事割り・言割り・断り・理・ことばによるこじつけ」って、ややこしいですね。

*

もどります。

もどるにもどれない。いったん、手にしたものはなかなか手放せない。「これは私のもの」。とにかくそうになっている。これしかない。これなしではいられない。

以上のような状況を打開しようとする動きや兆しが見られないことはありません。この数日間の新聞で見かけたフレーズを拾って加筆してみます。

資本主義を見直す。市場経済への懐疑。生物多様性・里山という言葉の認知と普及。性同一障害の夫婦にも嫡出子を認める方向へ。脱官僚依存。永住外国人への地方参政権法制化への動き。検事による取り調べ録画、証拠採用。

「もどるにもどれない」が、「ことわり・事割り・言割り・断り・理・ことばによるこじつけ」によって、少しずつながら「もどれるかもしれない」という意識に「かわり」つつある部分がありそうです。そういう意味の「かえる」であれば、歓迎すべき動きではないかと思います。

とりとめのない駄文に、ここまでお付き合いいただいた方に、心より感謝いたします。

10.01.15 け==く

◆け==く

2010-01-15 10:05:18 | さくぶん

「げた」ってご存じですか？「ふせじ・伏せ字・伏字」の一種です。かつて「=」という記号をつかっていましたが、下駄の跡に似ているので「げた」と呼ばれていた印刷用語らしいです。今では「○・●・☉・*」も、つかわれていますね。

実例は、「2009年3月10日をギャグる」2009-03-10、「ごめんなさい」2009-12-09、「きな臭い話」2009-12-11をちらっとご覧ください。ご覧になればお分かりになると思いますが、不気味ですよ。みっともないですよ。なんで、あんなことをこのアホはやっていたのでしょうか？ 小心者で臆病だからです。お恥ずかしい限りです。

もっとも、別の言い訳＝弁解もできます。そもそも、どうしてビビらなければならないのか。その理由を説明すればいいのです。「差しさわり」があるからなのです。「差しさわり」って何でしょう。いつものように、ちょっと「遊んで＝ずらして」みます。「差して＝指して＝挿して＝射して＝注して＋触る」？ 何だかエッチなことを想像してしまいました。失礼。

標準的な表記では「差し障り」となりますね。「差して＝挿して＝刺して＋障る」？「刺して＋障る」となると、おだやかではありません。「刺す」も「障る」も、怖い言葉です。ものすごく怖いです。歴史的に見ると、この国でも「伏せ字」が、当たり前のように用いられていた時期がありましたね。たとえば、カニコー（『蟹工船』）の時期。このあたりの事情は、「なぜ、ケータイが」2009-01-22で、詳しく触れました。簡単に言うと、国家が「ファシズム＝全体主義」の体制を敷いていたからです。「ファシズム＝全体主義」については、「きな臭い話」2009-12-11の最後に「ファシズム＝全体主義」関連ブログ内リンク集がついていますので、お読みいただければ嬉しいです。

*

伏せ字は、国家がそうした恐ろしい体制下にあったり、社会がそうした方向に向かう気配が濃厚になっていたり、社会の一部の不穏な分子が力を増していたりする場合に用いられると言えそうです。

そればかりではありません。ある個人や特定の集団や組織への批判・非難が、いわれなき中傷や人権侵害や名誉毀損ととられかねない場合にも、配慮・遠慮・気配り・心遣い・思いやり・「触らぬ神に祟りなし」的自粛という形をとって、伏せ字が使用されるケースもあります。

また、伏せ字の悪用もありますね。ネット空間に存在する掲示板の中に、違法な取り引きや行為を呼びかけるものがあるのは、みなさんがご承知の通りです。たとえば、あ

る薬物なり、ある武器なり、あるヒトなり、あるいはある行為を、それを求めるヒトに売りつけるさいに、伏せ字が用いられていると聞いたことがあります。

*

テレビで見たあるニュース番組では、伏せ字だけでなく、文字や記号を「かえる・変える・換える・代える・替える」ことによって、当局やある種のNPOなどの監視から逃れる方法を洗練させてきている、と報道していました。取り締まる側と取り締まられる側の間で、いたちごっこになっているとか。

とにかく「かわす」と「かわす」と「かわす」だ、という印象をいただきました。ネットを介してモノやヒトやサービスを「かわす・買わす」のに必死になって知恵を絞る、仲間同士で情報を「かわす・交わす」のに躍起になり、取り締まる側からの追及を「かわす・躲す」ヒトたちがいる。そんな感じなんです。

どのように「かわす」のかという具体的な方法については、それなりに、みなさんでお調べになってください。このブログでは、扱いません。

でも、言葉といっしょに遊ぶのが大好きなアホの運営しているブログですから、番組を見ていて、上記の「かえる・変える・換える・代える・替える」ときわめて似たことをやっているなあ、と思ったことは確かです。白状しますと、あまりにも激似なので、思わずニヤリとしてしまった技もいくつかありました。不謹慎なことを書きましたことをお詫び申し上げます。ごめんなさい。

*

ところで、「け==つ」という文字の連なりを見て、みなさんはどんな言葉を思い浮かべになりますか？

「けいちつ・啓蟄」？ 早く来るのを待っています。／「けいべつ・軽蔑」？ このアホがよくされることです。／「けんけつ・献血」？ できるかぎりするように心がけております。／「けんえつ・==」？ 怖いですね、後述します。

以上のような具合に、いろいろ連想なされたことと思われます。とはいえ、これまでここに書いてきた流れからして、「けいさつ」や「けんさつ」という言葉が頭に浮かんだ方が多いのではないのでしょうか？

試しに、グーグルで“け\つ”と“け\ \つ”をキーワードにして調べてみました。意外な発見がありました。ぜひ、お試しください。「」ではなく、ちゃんと2つの”でくってくださいね。また、“\”は半角ですよ。「*」みたいに全角にしないでください。去年よく見聞きした言葉は、今どうなっているかなど、興味があったので、ついでに”国\ \ 査”でもググってみました。お試しになるさいには、「ウェブ全体から==」だと中国語のサイトも出てくるので、「日本語のページを==」で==してみてください。

「国勢調査」や「国民審査」がヒットの上位を占めたのには、苦笑してしまいました。そうですね。そんなものでしょう。「09年3月15日をギャグる」の「続・09年3月15日をギャグる」内にある「投稿されなかった記事より【未投稿】」というタイトルで、いろいろ遊びましたので、興味のある方は、ご笑覧ください。そうそう、「やっぱり、ハンコはえらい（続・「あなたなら、どうしますか？」）」2009-10-28でも、きな臭くやりました。

*

ピーッ！

いきなり、失礼しました。これって、テレビなんかでの放送での「伏せ字」ですね。「不適切な発言」を「ピーッ！」で消すわけです。あと、テレビの場合ですと、「ぼかし」「モザイク」「後姿だけの人物像」「声を変える」なんてテクニックが用いられることがありますね。事情はさまざまです。納得できる場合もあれば、報道を業務とする側としてはちょっと過剰な自粛ではないかな、と疑問に感じるケースもあります。

*

現在、グーグルと中国をめぐる問題が深刻化していますね。嫌ですね。でも、嫌では済まされない事態なんですよね。21世紀は、中国とイスラム圏が最大の問題になる

と、個人的に感じているのですが、いずれの場合にも、ネットが絶対からんできます。現にもう、からんでいますよね。からんでからんで、からみまくっている、感じ。怖いです。

全体主義的体制をとる国家への、この国やこの国の一部のヒトたちの対応や姿勢を観察していると分かりますが、全体主義的体制に敵対する側が相手に似てくる、あるいは相手と似た資質のヒトたちほど敵対的になる、という顕著な傾向が見られます。近親憎悪とでもいうのでしょうか。近隣の全体主義的國家を目の敵（かたき）にしているヒトたちの言動を思い浮かべてください。その批判する対象とそっくりではありませんか？ 嫌ですね。こうしたヒトたちの思考パターン＝心理については、「テリトリー（5）」2009-06-10で詳しく分析しましたので、よろしければお読みください。

さて、話をネットに戻しますが、「け＝く」を、みなさんはどうお読みになりますか？

「けいかく・計画」？ 苦手です。／「けんがく・見学」？ 小学生のころには、授業より楽しかったものですね。／「けいやく・契約」？ 書類にちゃんと目を通して、慎重にしましょう。／「けんやく・儉約」？ 我が家のモットーです。／「けいはく・軽薄」？ このブログのことです。／「けっぱく・潔白」？ これを証明するのに長い年月がかかることもありますね。／「けったく・結託」？ 後述します。／「けっさく・傑作」？ 何ですか、これ？ ／「けいこく・警告」？ きょうの記事の趣旨でもあります。

「け＝く」

これまでの流れからすると、「けんさく」ではないでしょうか。ちなみに、現・千葉県知事の名前ではありませんよ。さて、冗談は顔までにして、「けんさく」と「けんえつ」と「けいさつ」と「けんさつ」とは、どこか似ていませんか？ それぞれの言葉とイメージに浸ってみてください。前半の2つは、ある状況下においてはほぼ同義です。後半の2つに関しては、ちょっとお勉強をしないとその区別を正確に説明できません。

今挙げた4者が「けったく」すると、ものすごく怖いです。「けいばつ」の対象となるヒトたちや集団が続々出てくる可能性が高いからです。一斉検挙。

*

ああ、きな臭い話になってまいりました。このアホのブログを以前からお読みいただいている方はご存知でしょうが、きな臭い話がとても苦手なのです。抑うつが悪化するのです。それなのに、つい書いてしまうんです。ひょっとして、自分って、どMだったの？自己破滅的人格破綻者？人間失格？やっぱり単なる「学習できないアホ」？ビョーキ？自分では、アホと言葉のフェティシストを自称させていただいております。

そういえば、「キーワードけんさく」というものについて、「あう (3)」2009-04-29 という記事で、「言葉のフェティシスト」「でまかせしゅぎじっこうちゅう (※「〇月〇日を (に) ギャグる」のほうです)」「抑うつ」をキーワードにして、かなり本音を吐いています。案の定、抑うつが悪化して参りましたので、本日はこの辺で失礼いたします。さっそく、処方されているお薬を飲み、ネコを探して遊んでもらいます。

その代わりというのもなんですが、「あう (3)」2009-04-29 の上の部分だけ、お読みいただければ幸いです。とても「愛」着のある記事なんですよー。記事の中ごろから後半は、興味のある方だけ、お読みください。

ちなみに、きょうの記事は、3ヶの「け==つ」と1ヶの「け==く」の漢字バージョンを探している「け==く」or「け==つ」エンジンには引っ掛からないと思うのですが、どうでしょうか？ ひらがなバージョンで「け==く」or「け==つ」されれば、一発で引っ掛かるのは間違いありませんけど。

またのお越しを心よりお待ちしております。

10.01.16 まことにまこと

◆まことにまこと

2010-01-16 09:50:47 | さくぶん

やまことばが好きです。どうしてなのかは、よくわかりません。こころにというか、たましいにというか、からだにというか、こう、ぐぐっと来るのです。というわけで、よくつかえます。やまことばにみちびかれて、考え、書くことがよくあります。ことばで考えるというのは嘘だという人がいます。そうかもしれません。

確かに、考えていると、ことばだけでなく、いろいろなもやもやしたものが頭に浮かびます。ことばともやもやとが混じりあう。それが考えることなのかとも思われます。いずれにせよ、きょうは、まことということばにみちびかれ、うながされて、ことばをつづっています。

まことということばをずらしてみましよう。ずらすことにより、そのうつろさまを眺め、考えをすすめ、ことばをつらねていくのです。すると、からことばも出てきます。致し方ありません。いま、この国の名が、やまとではなく、からことばで読まれているように、この国のことばは、からことばやさらに遠くにあるところからつたわって来たことばたちが混じりあっているのです。

そうなってしまうている。だれのせいでもありません。よいわるいの話でもありません。どこのことばも、似たようなありさまにあります。ひととひとが出あう。くる。いく。うつりすむ。まじる。子をもうける。ふえる。国をなす。あらそう。血をながす。あらたに国をなす。また、あらそい、あやめあい、血が流れる。おさまる。おさめる。しずむ。しずまる。国がとどのう。うつせみでは、あたりまえのことでしょう。

*

さて、まことをずらしてみます。からことばもつかえます。

広辞苑を参考にします。「まこと・ま(真)こと(事・言)・真・実・誠・まことに」「まさし・正し・ただしい・正しい・まさしく・正しく・ただしく・正しく・ただす・正す・糺す・質す・まさに」「たしか・確か・慥か・たしかに・確かに・たしかめる・確かめる・慥かめる」「あきらか・明らか・あからむ・明らむ・はっきり」という具合です。

「ずらす」をずらし、「分光する」と言うこともできそうです。「分光する」とは、もちろん比喩です。ある色に見える光を分光器にかけて分けるという作業＝操作＝動作のイメージが、気に入って借用しているだけです。中上健次が小説ではなくエッセイ集でつかっていたのを読んだ記憶があります。紀州で生まれ育った中上が、確か「き・紀・木……」みたいな操作をしているのを読み、きれいな「さま＝光景＝様子＝イメージ」だなと感じた覚えがあります。うろ覚えのことなので、間違っていましたら、ごめんなさい。

*

分光する。

個人的には、主に大和言葉（やまとことば）を唐言葉・韓言葉（からことば）に置き換える作業の意味で用いています。上で、「まこと」を分光したさいに、「事・言・真・実・誠・正・糺・質・確・慥・明」という漢字が出てきました。漢字が「出た」というより、漢字に「出あった」という感じです。

「まこと・まことに・まさし・まさしく・まさに・ただしい・ただしく・ただす・たしか・たしかに・あきらか・あからむ・はっきり」という大和言葉系の語に見入り、すかさず「事・言・真・実・誠・正・糺・質・確・慥・明」という唐言葉・韓言葉系の語に目を移し、眺め入る。あるいは、両者を見比べる。自分にとって至福の時だ、と言っても言いすぎではありません。体が震えてくる。鳥肌が立つ。まことにまことです。本当に本当です。

なお、万が一、「分光する」という作業に興味をお持ちになった方がいらっしゃいましたら、「オバマさんとノッチさん」2009-01-28、「あらわれる・あらわす(3)」2009-05-27、「あらわれる・あらわす(5)」2009-05-29、「げん・幻-1-」2009-08-13、「わかるという枠」2009-12-06、「3つの枠」2009-12-09を、ぜひご参照願います。そんなものに付き合っていない、とお思いの方は、もちろんパスしちゃってください。

*

分光して出あった漢字たちを、感字として感じとってみましょう。このブログは学問や研究などとは無縁です。なにしろ、アホが書いている駄文が投稿されているのです。

「正しい対正しくない」ごっこをやっているわけではありません。言葉が好きなアホが言葉に遊んでもらっている。もてあそばれている。そんなブログです。

「素人がでたらめを書きやがって」とか、「いい加減なことばかり書いてある」という、まことにまことのことを言ってお立腹なさないでください。特に、ないものねだりはしないでください。お怒りになっている方に申し上げます。まさに、仰っている通りです。まことにまことでございます。ここで、やっているのは「でたらめ・でまかせ」です。以前は、自分のやっている「でたらめ」や「でまかせ」を「楽問=ゲイ・サイエンス=楽しくやろうよ、お勉強ごっこ」などと、書いてもいました。その気持ちは、今も変わりません。

本をちゃんと読むのが苦手で、お勉強が大嫌いな、このアホに「でたらめ」や「でまかせ」以外の何ができるでしょうか。居直りではないつもりです。正直に言っているだけです。本気で申しております。まことにまことです。何も恥ずべきことはしていません。あえて言うなら、言葉がいとしい、そのいとしい言葉たちを「正しい」とか「美しい」とか「本来の」とかいう杜撰（ずさん）な「美辞麗句=嘘っぱち」で汚したくないのです。

言葉たちは、そうした「きれいごと」とは無縁に「生きている」のです。正確に言えば、ヒトがいて初めて「生きている」のです。言葉は匿名的で、非人称的で、ニュートラルだ、とも言えます。【※この「ニュートラル」という考え方については、「こんなことを書きました（その8）」2009-05-23にある各記事を貫く大きなテーマになっています。自分ではかなり力を入れて書いた記事ばかりですので、お時間のあるときにお読みいただければ嬉しいです。】

息している=生きているヒトが、森羅万象に「息」を吹きかけて初めて、言葉は生まれます。ヒトという種（しゅ）がいなくなれば、言葉は「なくなる」しかありません。「もの」として残るといふ言い方もできますが、そのことについて触れるのは別の機会にします。なお、「わける（2）」と「げん・言-9-」でも論じていますので、ご興味のある方がいらっしゃいましたら、お読みください。

*

話を戻します。

「事・言・真・実・誠・正・糺・質・確・慥・明」

分光して出あった漢字たちを見ていると、さまざまな言葉が頭に浮かんできます。

真実・真理・真言・事実・現実・実際・正確・正当・正統・正式・正常・正規・純正・
明確・明晰・明白・自明・真正・真性・実に・本当（に）・本物・本質・実質・本体・正
体・本性・嘘偽りのない・論理（的）・实在・実体・実態・実情・確実・究極・至高・解
脱・涅槃・リアル・リアリティ・ファクト・オセンティック

何て空疎なのでしょう。むなしいです。

黒を白と言いくるめる、という言い回しがあります。黒も白も、レッテル＝ラベル＝
言葉です。どんなラベルで貼りかえることも可能です。上に並んでいる言葉たちが空疎
でむなしいというのは、そうした意味での感想です。

どうして空しく感じるのでしょうか。「から」ことばだからでしょうか。それもあるよう
な気がします。否定はしません。

べらべらの言葉＝ラベル。どんなにきらびやかに描いてあっても、しょせん、絵でし
かない。ラベルが「何に」貼ってあるのか。絵は「何を」描いたものなのか。ヒトには、
その「何か」を知る由（よし）がありません。知る術（すべ）がありません。

それにもかかわらず、上に並べた言葉たちは、偉そうにしています。少なくとも自分
にはそう見えます。自信たっぷりと言うか、傲慢と言うか、あぶらぎっていると言うか、
謙虚さやつつましきの欠けらも感じられないのです。

*

「まつりごと・政・祭事・奉事」という言葉を思い出しました。かつては、政治と宗教の
「へだたり・隔たり・あいだ・間・あわい・差異・際・さい」がなかったと言われていま

す。というか、深くからみ合っていた＝かかわり合っていたという話です。

政治も宗教もヒトにとってはなくてはならないものです。でも、個人的には政治家も宗教家も好きではありません。逸脱しているからです。はずれて、ずれて、すれてしまっているヒトたちが、あまりにも多いからです。

まつりごとをおこなうヒトたちは、「代わりの者」であったはずです。「代理」であったはずです。それが「まこと」という名を「騙って」います。いつわりの「はなし」を「語って」います。「かたる」ことなら誰にでもできます。それなのに、特権化されているのです。はずれて、ずれて、すれてしまっているとは、そういう意味です。

*

贅（ぜい）を極めた豪華絢爛たる「衣装をまとった」聖職者や教祖と呼ばれるヒトたち。民衆の血と汗と労力を結集して築いた、金銀・宝石・石を用いたきらびやかな社（やしる）や寺や建物に「住まう」ヒトたち。庶民から集めた税でまかなって建造した、はでやかで堅牢たる庁舎で仕事をし、官舎に「住む」ヒトたち。一般人がめったに口でできない料理や酒を高級レストランやホテルや料亭で「飲み食いする」ヒトたち。

衣食住に、なぜ、これだけの「へだたり・隔たり・あいだ・間・あわい・差異・際・さい」ができてしまったのか。はずれ、ずれ、すれてしまったからに他なりません。

「代わり＝代理」のヒトが「代わり＝代理」をまとい、口にし、住まいとしている。だから、空疎でむなしなのです。ぺらぺらなのです。中身がないのです。「から」なのです。

うつせみのから。

*

繰り返します。

「まこと・ま（真）こと（事・言）・真・実・誠・まことに」「まさし・正し・ただしい・正しい・まさしく・正しく・ただしく・正しく・ただす・正す・糺す・質す・まさに」「たしか・確か・慥か・たしかに・確かに・たしかめる・確かめる・慥かめる」「あきらか・明らか・あからむ・明らか・はっきり」

なぜか空疎さを感じません。むなしさをおぼえません。そのわけは、わかりません。

*

ここで断りしなければならないことがあります。「かえるにかえる」2010-01-13 で書きましたように、「返る・帰る・還る」に「返る・帰る・還る」ことはできない、と思っています。「原点」や「自分たちの本来の姿」や「本当の自分」や「過去の出来事」や「過去の状態」を「想起・再現・復元」することは、ヒトという種の「知覚・意識・能力」を超えている、と考えています。

たとえば、「美しい言葉」や「本来の言葉」や「本当の言葉」や「真（しん）の言葉」や「本物の言葉」や「正確な言葉」などという「言葉」は信じていません。平安時代の言葉、あるいは、それ以前の言葉にもどれと言うのでしょうか。常に、辞書を片手に話し書けというのでしょうか。まさか。この国には、たくさんの言葉＝方言＝書き方＝表記法があり、それが「同時的に＝共存しながら」綿々と続いてきた。そうではなかったのでしょうか。その「多重性＝多層性＝豊かさ」を切り捨てるなんて、冗談は顔だけにしてほしいです。

上記のたわごとを言ったり信じているヒトたちも、はずれ、ずれ、すれてしまっているのです。

*

「ずれ」と言えば、言葉は「はずれる」「ずれる」「すれる」を基本にしています。今、問題にしている「ずれ」は、上述の「ずれ」とは、ずれていますので、混乱なさないでください。

その言葉の根底を成す「はずれ・ずれ・すれ」なのですが、何から「はずれ・ずれ・す

れ」ているのか。それはヒトにはわかりません。わからないようにできているのがヒトなのです。どうして「わからないようにできているのか」については、ご面倒をおかけしますが、「かえるはかえる」2010-01-12、「かえるにかえる」2010-01-13、「もどるにもどれない」2010-01-14 をお読み願います。

話があちこちに飛んでしまいました。混乱させて、ごめんなさい。悪い癖だと分かっているのですが、頭に浮かんだことを、前後関係を考えず、つい書いてしまうのです。だから、とりとめのない駄文になってしまいます。申し訳ありません。

*

またもや、繰り返させてください。

「まこと・ま(真)こと(事・言)・真・実・誠・まことに」「まさし・正し・ただしい・正しい・まさしく・正しく・ただしく・正しく・ただす・正す・糺す・質す・まさに」「たしか・確か・慥か・たしかに・確かに・たしかめる・確かめる・慥かめる」「あきらか・明らか・あからむ・明らむ・はっきり」

なぜか空疎さを感じません。むなしさをおぼえません。そのわけは、わかりません。

いつもの出まかせですが、かぎは「ま」にあるような気がします。「ま」と言っても、「まこと」の「ま」です。そんな気がしてならないのです。胸が騒ぎます。あやうくなりそうな気配もします。すでに、あやういのかもせん。そろそろ、少し頭を休めたほうがよさそうです。PCの電源を落として、しばらく「ま」について考えてみます。

いや、もうひと踏ん張りしてみます。

*

繰り返します。

真実・真理・真言・事実・現実・実際・正確・正当・正統・正式・正常・正規・純正・

明確・明晰・明白・自明・真正・真性・実に・本当（に）・本物・本質・実質・本体・正体・本性・嘘偽りのない・論理（的）・实在・実体・実態・実情・確実・究極・至高・解脱・涅槃・リアル・リアリティ・ファクト・オセンティック

以上について考えるためには、本や辞書や事典やウェブサイトが必要な予感がします。一方、「ま」については、そうしたものは不要＝不用な気がします。やまとことばは、身にしみついているような気がします。

*

ここでまた、お断りしなければならぬことがあります。やまとことばとからことばに関してのことです。

天は言葉 or 言語の上に言葉 or 言語を造らず。言葉 or 言語の下に言葉 or 言語を造らず。

そんなふうになっているのではないのでしょうか。これまで書いてきたことをお読みになって、やまとことばとからことばの優劣や美醜を語っているようにお思いになられた方がいらっしゃるのではないかと恐れています。もし、そのような感想を持たれた方がいらっしゃれば、それはこのアホの本意ではありません。誤解です。あえて言うなら、

言葉 or 言語は、他の言葉 or 言語と接したとき、両者とも最も美しく輝く。

というふうに考えています。ある言葉の優れた点や美しさは、相対化しないと分からないものです。かといって、優劣や美醜を比べ合うものではないと信じています。これだけは、ぜひとも、お伝えしておきたいのです。

こうした問題は、どこで生まれ育ったか、どの言葉を母語として生きてきたか、にかかわることのようです。「テリトリー＝粹」の問題だと言ってもよろしいかと思います。ヒトは、誰もが「何か・どこか」に属し、依存し、支えられて生きています。その「何か・どこか」に愛着を覚えるのは、自然な心理だと言えるでしょう。その「何か・どこか」が「ことわり・事割り・言割り・理」を超えて、心や体や魂にしっくりとくる、また

はぐっとくるのは当然でしょう。ただし、「他者」への思いやりや「よそもの」を敬う気持ちを忘れてはならないと考えております。

すべての「言葉＝語＝語句、および言語」はパラレルだと思っています。並んでいるだけです。上下も左右も斜めありません。なお、「パラレル」という「考え方＝たわごと」に興味のおありになる方は、「パラレル」2009-12-22、「日本語にないものは日本にない？（3）」2009-12-25をご参照ください。もちろん、パスなさっても一向にかまいません。

ただし、パラレル状態にある一方で、言葉は「ずれ」ます。「ずれる」のが、言葉です。この場合の「ずれ」をさきほど例に挙げた、「美しい」だの「本来の」だの「真（しん）の」だの「正確な」といったたわごとを言うヒトたちに見られる「上下」や「主従」や「真偽」や「正誤」といった貧しい図式に、どうか還元しないでください。言葉がかわいそうです。誤解は解けましたでしょうか。

*

話を戻します。

「ま」です。「まこと」の「ま」です。これは、お勉強や研究や学問の対象「としている」、あるいは対象に「になる」たぐいのものではないという気がします。

ものぐさなアホは、身の程にあったやり方で、とりとめもなく、だらだらと、右往左往しながら考えてみるのが、よろしいかと思われます。

言葉は、このアホも含む庶民のものなのです。みなさまのものなのです。正確に言えば、ひとりひとりのものなのです。他人様の言葉や言葉遣いに、とやかく言う筋合いなどないのです。これだけは、まことにまことです。本当に本当です。そうではないと言うヒトたちは、「はずれ・ずれ・すれ」ているのです。

まことにまこと。

きょうも辛抱してここまで駄文をお読みいただいた方に、心より感謝いたします。

10.01.17 まことはまことか（前半）

◆まことはまことか（前半）

2010-01-17 09:03:23 | さくぶん

「ま」という言葉というか音（おん）は不思議です。ma とも表記できますね。ひっくり返すと am となります。「あむ・あん・あーむ・あーん・あうん・阿吽・aum・om」とずらしてみる。そんな遊びが好きです。「げん・幻 -5-」2009-08-17 や「げん・言 -10-」や「言葉とうんちと人間（言葉編）」2009-11-11 でも、やっています。実は、毎日やっています。呼吸法の一つなのです。沈んだ気分が楽になるので、やっているだけですけど。

この種のことは、やっている本人は真剣なのですが、はたから見ると、「こいつ、あやしい」「あやういんじゃないかい」「近寄らんとこー」という雰囲気になります。オカルト、カルト集団、スピリチュアル、新興宗教、大規模宗教、世界的宗教の別を問わず、自分が感情移入できないものは、とかくうさん臭く、いかかわしく見えるものです。他人様に迷惑をかけなければ、好きなようにすればいい、という感じでしょうか。

とはいえ、この種の行為は、お金と親和性がきわめて高いために、あまり深く考えずに、ある集団に入会＝入信したら最後、いつの間にか寄付・お布施を始め、さまざまな形で奉仕活動を強いられる状況にはまり込んでいる。そんな話をよく見聞きしますね。選挙での集票マシンの一部に組み込まれることも、珍しいことではありません。このブログを書いているアホは、ファシズム＝全体主義が極端に嫌いです。そもそも「群れる」ことに過剰なほどの拒否反応を示すので、宗教団体とは無関係に暮らしておりますし（※だいいち、さきだつものがございません）、神仏のたぐいも信じておりません。

*

せいぜい、ひとり宗教くらいしかできそうもありません。友達がいらないのも、「群れる」ことへの恐怖＝憎悪が根底にあるように思われます。何しろ、飲み会、コンサート、スポーツ観戦の経験が皆無なのです。正確に言うと、飲み会は学生時代に1回しか参加したことがありません。

そもそも、煙草・お酒・男性整髪料・濃い化粧品のおいに、アレルギー反応を示すのです。吐き気、蕁麻疹、頭痛、冷や汗、呼吸困難を起します。線香のにおいも駄目です。ですので、うちでは線香はあげません。もっとも、小さめの額縁に入った遺影はあっても、仏壇がありません。ほしくもありません。お墓も要りません。骨を拾っていただく必要はないという意味です。というか、拾ってほしくありません。拾うヒトはいないでしょうけど。

宗教と呼ばれているものに関しては、個人レベルでの心の問題だと思っています。形式や物で示すものだとは考えておりません。

*

で、話を「ま・ma」にもどします。

きのうから、ずっと「ま」について考えていて、きょうは「ま」をめぐる駄文を書こうと思っています。で、PCの前に座って、ふと思い出したことがあります。「あらわれる・あらわす(8)」2009-06-01 で書いた冒頭の文章が頭によみがえってきました。では、まいります。さっそくコピペをさせていただきます。

>本日は、とちくるわせていただいてよろしいでしょうか？ えっつ？ 勝手にとちくるえば～、ですか？ おありがとうございます。では、きょうは、こころおきなく、乱れさせていただきます。はあ？ いつものことだろう、ですか？ お励ましの言葉をいただき、感謝に耐えません。いえいえ、決して皮肉などではなりません。おふざけにも、こころを込める。マジで乱れる。これが、当ブログのスタンスでございます。

自家中毒症のブログらしく、そのまま遠慮なく自己輸血＝自己引用させていただきました(※ただ今、ある特定の疾患を比喩として用いました。不愉快な思いをされた関係

者の方がいらっしやいましたら、深くお詫び申し上げます)。

というわけで、きょうの記事はかなりとちくるう予定です。過去のサンプルとして、「と、いうわけです (1)」2009-05-24、「と、いうわけです (2)」2009-05-24 がありますので、この種の文章に興味のある方は、ぜひご笑覧くださいませ。

*

＞「まこと・ま (真) こと (事・言)・真・実・誠・まことに」「まさし・正し・ただしい・正しい・まさしく・正しく・ただしく・正しく・ただす・正す・糺す・質す・まさに」「たしか・確か・慥か・たしかに・確かに・たしかめる・確かめる・慥かめる」「あきらか・明らか・あからむ・明らむ・はっきり」

以上は、きのうの「まことにまこと」2010-01-16 からの引用です。いろいろな言葉が並んでいますが、自分には、それらがすべて「ま」をずらしたのに見えます。聞こえます。感じられます。

まことにまこと。

このフレーズを、きのうからけさまで何度口にしたことでしょうか。何度口に出さず唱えたことか。夢にも出てきました。夢でも見ました。夢でも聞きました。「ゆめゆめ・努努・夢夢」こんなことになるとは、夢にも思いませんでした。「ま」が出た。「ま」と出あってしまった。「ま」がさした。そんな感じです。

「ま・真・眞・間・魔・麻・摩・目・身・ma」

やまとことばがからことばへと「ずれる・うつる・かわる」。歴史的に見ると、これが、この国の言葉の「ありよう」だったとのこと。「なりよう」だったというべきでしょうか。そして、今もそうで「あるよう」なのです。

*

きのうから、頭に浮かんだ言葉を走り書きメモにしていました。そのメモを「かき」
「うつし」てみます。

真下・真上・真横・真ん中・真っ先・真後ろ・真ん前・まん丸・真冬・真夏・真四角・
真ん中・真っ裸・真心・真顔・真昼・真夜中・真名（←→仮名）・真一文字・真向かい・
真っ向・真面目・まとも・まっとう・真水・真綿・真っ暗・真っ白・真っ青・真人間・真
に受ける・まさに・まさか・魔が差す・魔物・魔法・魔術・マジック・悪魔・まける・ま
かせる・まいる・まつ・まいうー・まったく・まま・ママ・まんま・まーむ・マーム・マ
マン・ma・am・mama・mam・mum・aum・om・mammal……

以上のように、全然整理されていません。ノイズが混じってもあります。「頭に浮かぶ」
とか「考える」とか「思う」とか「思考する」とか「思想する」とは、そんなものではな
いでしょうか。書物や新聞や雑誌などの編集された印刷物を読んでいると、言葉や、言
葉の連なりである文章というものが、ある程度まとまっていたり、ときには理路整然と
している印象を与えています。

印象＝イメージですから個人的なものであり、それはそれでいいのですが、ともする
と、その匿名化されニュートラルな「もの」となった言葉の集まりを、「考える」とか「思
う」とか「思考する」とか「思想する」という「行為」と混同するヒトがいます。たくさ
んいます。でも、それは「当然」でも「自然」でも「まこと」でもなく、思い込みです。
「言葉のありよう」のほんの一部でしかありません。言い換えると、「もの」と「おこな
い」は「ずれている」ということです。途方もなく「ずれている＝隔たっている」ので
す。

思考イコール言葉。or 言葉で考える。

ヒトと言葉とのかかわり合いは、そんな「ちゃんとした」「すっきり」「はっきり」した
ものではありません。そうでない場合が圧倒的であることは、みなさんが日常生活で絶
えず経験しているはずです。正直になりましょう。一部の「ちゃんとした」「すっきり」
「はっきり」したものを「前提に＝当たり前」ものごとを考えるのは、それこそ本末転
倒です。不正直であり、自分をあざむいています。

「言葉＝語」は、「言葉＝語」であって、「言葉＝語」ではないようなところがあります。「言葉（or 言語）で思考する」といったたぐいの言い回しがありますが、個人的には懐疑的です。もっとも、言葉 or 言語を、「狭義の言葉」、つまり話し言葉や書き言葉ではなく、「広義の言葉＝代理＝表象」としてとるなら話は別です。

*

「広義の言葉＝代理＝表象」とは、話し言葉、書き言葉、表情や仕草や身ぶり手ぶりを含む身体言語＝ボディランゲージ、手話、指字、点字、音声（発声）、音楽、合図、映像、画像、さまざまな標識や記号や信号などを、ひっくるめた「こと・もの・行為・状態」です。個人的には、簡単に「イメージ」という言葉で呼ぶこともあります。感じとしては、もやもや、ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ、といったところでしょうか。「広義の言葉＝代理＝表象」、あるいは「イメージ」は、「狭義の言葉」で「ことわり・事割り・言割り・理」することはできそうもありません。でも、その「できない」を「できる」と思い込んでいるのが、ヒトです。

(1) 「何かの代わりに何かではないものを用いる」という「代理の仕組み」をつかう。

(2) 個人のレベルにおいて、頭の中で、もやもやごちゃごちゃぐちゃぐちゃしている「何か」を「五感を基本とする『何か』＝イメージ」として「勝手に＝恣意（しい）的に＝きわめてテキトーに」意識する。

以上の2つの「操作＝作業＝情報処理」をヒトは行い、それを「意識」や「思考」と呼んでいる。そんなふうには、この駄文を書いているアホは考えています。いや、勝手にテキトーにイメージしているだけです。ですので、今述べたことは、与太話＝たわごと＝作り話です。良く言って「フィクション＝説＝考え方」といったところです。

そうした与太話＝たわごと＝作り話を前提にすると、「広義の言葉＝代理＝表象」、あるいは「イメージ」によって、「考える」「思う」「思考する」「思想する」とは、「ちゃんとした」「すっきり」「はっきり」ではなく、むしろ「もやもやごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」ということになります。その次の段階として、「狭義の言葉」で「ことわり・事割り・言割り・理」という行為がしゃしゃり出てきます。その結果として、書物や新聞や雑誌などの編集された印刷物や、テレビやラジオで放送される番組の台本や原稿に代表される「まとまっている」とか、「理路整然としている」とか、「論理的である」という「印

象＝イメージ」を与える「言葉＝語の連なり」が「捏造（ねつぞう）され＝でっちあげられ」ます。

話はそれでだけで終わりません。以上の話は発信者（話し手・書き手）側から見たものです。受信者（聞き手・読み手）側は、「理路整然としている」とか、「論理的である」という「印象＝イメージ」を与える「言葉＝語の連なり」を、「考える」「思う」「思考する」「思想する」というプロセス、つまり「ちゃんとした」「すっきり」「はっきり」ではなく、むしろ「もやもやごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」として受け取ります。それが「理解する」と呼ばれている状況の「ありよう」だと思っています。

ただし、その「ちゃんとした」「すっきり」「はっきり」も「もやもやごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」も、程度の問題であることを忘れてはなりません。言い換えると、「グラデーション＝濃淡」を成しているわけです。「まだら状＝すかさか」と言う比喻も妥当かと思われまふ。いわゆる「理解する」においては、比較的「ちゃんとした」「すっきり」「はっきり」したものとして受信される場合もあれば、比較的「もやもやごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」したものとして受信される場合もあるでしょう。その程度＝グラデーションは、個人差やTPOに左右されると言えそうです。

Aというメッセージがあつて、正確にAとして他者に伝わる。というのは、分かりやすく、すっきりしていますが、出来そこないの杜撰（ずさん）なイメージです。ぶっちゃけた話、出来の悪い嘘です。ヒトの世が、いかにアクシデントとしての誤解・曲解、故意の誤解・曲解に満ちていることは、みなさんが日々刻々と体験しているはずで、表現・意思伝達・解釈・理解なんて、絵に描いた餅です。

*

ややこしい話なので、以下に簡単なかたちで図式化してみます。

（発信者）：「考える」「思う」「思考する」「思想する」＝グラデーションのある「もやもやごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」⇒ グラデーションのある「ちゃんとした」「すっきり」「はっきり」

↓

（メディア＝媒介＝媒体）：書物や新聞や雑誌などの編集された印刷物や、テレビやラジオで放送される番組の台本や原稿＝「まとまっている」とか「理路整然としている」と

か「論理的である」という「印象＝イメージ」を与える「言葉＝語の連なり」＝「捏造（ねつぞう）され＝でっちあげられ」た「ちゃんとした」「すっきり」「はっきり」

↓

（受信者）：比較的「ちゃんとした」「すっきり」「はっきり」or 比較的「もやもやごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」＝「考える」「思う」「思考する」「思想する」＝「理解する」

10-01-17 まことはまことか（後半）

◆まことはまことか（後半）

2010-01-17 09:20:09 | さくぶん

*

で、話を戻します。「ま」です。

その「ま」について、きのうからずっと考えていたと言うか、ぼーっと思いにふけていたわけですが、ときおり口にした言葉というか「おまじない」の文句があります。

まことはまことか。

ここで個人的なお話をさせてください。実は、「まこと」という名前が好きなのです。「うつせみのくら」でも、出てきます。たとえば、「架空書評」（※「架空書評：奪還」2009-02-22 が最終号です）を書いてくださった「詩人の孟宗竹真（もうそうだけ・まこと）氏」、「反・少女」2009-09-15 という短い小説の登場人物である「真琴（まこと）」、「奪還・ダイジェスト」2009-10-09 という長めの小説の主人公である「真人（まさと）（※「まこと」とも読めます）」という具合です。

なぜか、好きなのです。響き＝音（おん）も、「真」という字面も好きです。その聴覚的および視覚的イメージが、こう、ぐぐっとくるのです。「ひろみ」や「かおる」みたいに、女性と男性に共通して付けられる名前だという点にも好感を覚えます。

*

で、「まこと」ですが、「ま＋こと」「真＋事」「真＋言」「真＋断」とも読めます＝分光できます。さらに、「ずらす」なら、「事」とは「事象・物」、「言」とは「言葉・語・言語・代理・表象」、「断」とは「断る・事割る・判る・分かる・認める・認識する・理解する」と読めそうです。

では、その「こと」の頭についている「ま」とは何なのでしょう？ 例によって、出まかせを言わせてください。「ま」とは「くちぐせ・口癖」ではないかと思います。それが、きのうから考えたというか、ぼーっと思いにふけていた末の「とりあえずの」「事務的で官僚的な」「結論」なのです。

「ま」とは「口癖」である。もう少し詳しく言うと、「まこと」という言葉の「ま」とは、ヒトという種の「口癖」である。

「アホか！」とお叱りの言葉が飛んでくる気配を感じます。「はい、アホでございます」と、泣きそうな顔をして叫んでいる自分の声と姿が頭に浮かびます。「おぬし、とちくるったな！」「はい、さようでございます」という感じでしょうか。とちくるいついでに、さらに出まかせを言わせてください。

まことはまことではない。

「アホか！」「はい、おっしゃるとおり、アホでございます」

*

順を追って説明いたします。

「ま」とは「口癖」である＝「まこと」という言葉の「ま」とは、ヒトという種の「口癖」である、からいきます。みなさん、「口癖」と聞いてどんなことを連想なさいますか？

「えーっと」「あのう」「でね」「そんでさあ」「そして」「だからあ」「ほら」「何と申しましょか」などは、言葉に詰まった時に口にしたたり、話の接ぎ穂として用いられていますね。

「要するに」「結局」「ぶっちゃけた話」「つまり」「やはり」「やっぱり」「何ととっても」「てのは」「というのは」も、説明の前置きとか、それまでの話の言い換えや総括というよりも、「えーっと」などと似たような役割を果たしている印象があります。

「すごく」「ものすごく」「きわめて」「とても」「非常に」「かなり」「そうとう(に)」「チョー」「スゲー」なんかは、意味を強めるとか、威勢をよくするとか、勢いづける、という感じでしょうか。これらに似たもので「実に」「実際」「実際問題として」「本当に」「まことに」があります。

「まことに」が出たことから、お分かりになると思いますが、最後に挙げた言葉たちは、きのうの「まことにまこと」2010-01-16 で紹介しました、次のような偉そうで、かつ厳(いかめ)しそうでありながら、空疎でむなしい語たちに似た匂いをまきちらしています。うさん臭いのです。

真実・真理・真言・事実・現実・実際・正確・正当・正統・正式・正常・正規・純正・明確・明晰・明白・自明・真正・真性・実に・本当(に)・本物・本質・実質・本体・正体・本性・嘘偽りのない・論理(的)・実在・実体・実態・実情・確実・究極・至高・解脱・涅槃・リアル・リアリティ・ファクト・オセンティック

何を言いたいのかと申しますと、上記の偉そうな言葉たちは、「何か」から「はずれ・ずれ・すれ」たあげく、擦り切れてしまっていて、単なる「景気づけ＝たとえばお酒＝ヒトを酔わせるもの＝空元気のもと＝やばいお薬＝ヒトの感覚を麻痺させるもの」に成り下がっているということなのです。あるいは、上の語たちには、そういうふうになり下がる資質があるというか、その可能性が高いと言ってもいいです。空疎でむなしいと

は、そうした意味です。

で（※これって、このブログの口癖なんです）、「ま」ですが、「真下・真上・真横・真ん中・真っ先・真後ろ・真ん前・まん丸・真冬・真夏・真四角・真ん中・真っ裸・真昼・真夜中・真向かい・真っ向・真っ暗・真っ白・真っ青」などは、「すごく」「きわめて」「とても」「非常に」「かなり」「そうとう（に）」「チョー」といった言い方と同様に意味を強めるといえるか、景気づけの役割を本格的に担っていると言えそうです。

一方で、今挙げた例に加えて、「真心・真顔・真名（←→仮名）・真面目・まとも（真面）・まっとう・真水・真人間・真に受ける・まさに・まさしく」といった言葉たちにみられる「ま」とは、さきほど列挙した偉そうで厳（いかめ）しそうでありながら、空疎でむなしい語たちに近い感じがします。ということは、やっぱり、「ま」も「何か」から「はずれ・ずれ・すれ」で、擦り切れてしまっていて、単なる景気づけに成り下がっているとさえ言えないかと思われまます。

ここで言っている「口癖」とは、「何か」から「はずれ・ずれ・すれ」たあげく、擦り切れてしまっている言葉のことです。まさに、「ま」がそうなのです。

*

で、次に、「まことはまことではない」を説明いたします。実は、口癖のところで、半分説明してしまったようなものなのです。口癖とは、「何か」から「はずれ・ずれ・すれ」で、擦り切れてしまっている言葉のことだと書いたばかりですが、まさに、そのフレーズが「まことはまことではない」を説明しているのです。

「真実・真理・真言・事実・現実……」は、『何か』から『はずれ・ずれ・すれ』での「何か」に当たります。当然のことながら、「まこと」も、「真実・真理・真言・事実・現実……」も言葉です。その「言葉＝ラベル＝代理＝表象」が「指し示す」もの、つまり、その言葉に対応する「もの」は、「不明」です。だから、ここでは「何か」と表記しています。

ということは、「まことはまことではない」とも言えます。レトリックの問題だと言われれば、それまでなのですが、言葉を用いる以上、ヒトは「レトリック＝修辞＝美辞＝

巧言＝お飾り＝言葉」を用いての「取り繕い＝ごまかし＝騙り」という「わな」を免れることはできません。「こじつけ＝類推・でまかせ」の仕組みを基本とする、比喩や駄洒落などのレトリックという「なわ」にがんじがらめになっているのです。それがヒトの「ありよう＝状態＝常態」です。

言葉とその「対応物」の間の「対応」なんて、まさにレトリック以外の何ものでもありません。「対応物・実体・メッセージ・意味・意味されるもの」などという言葉を用いて、もったいぶらずに、せいぜい「何か」と簡単に呼んでおくのが、まっとうではないでしょうか。

このあたりのお話＝与太話については、「代理だけの世界（1）」2009-11-13、「代理だけの世界（2）」2009-11-14、「代理だけの世界（3）」2009-11-15、「代理だけの世界（4）」2009-11-19、「代理だけ」2009-11-30にも書きましたので、ご興味のある方だけ、お時間のある時に、お読みいただければ嬉しいです。

*

という感じで、きょうの記事を終えてもいいのですが、冒頭近くでお約束したように、もう少しとちくらせていただきます。と言っても、ここまで書いてきたことを、悪態と罵倒をまじえてまとめるだけです。では、いきます。

「まこと」や「真実・真理・真言・事実・現実……」なんてガセ。尻尾のないおサルさんから「はずれて＝本能が壊れて＝脳内がずれて」、「ヒト＝人間様」になって以来、ヒトは、「何か」から「はずれ、ずれ、すれ」た「言葉＝べらべら＝ラベル」を相手に、景気づけごっこにせせと「ハゲ」んでいる。いかにも「体毛の薄い＝禿げた」尻尾のないおサルさんらしい行動。

ヒトの口から出る決まり文句＝口癖は、「わかる」「わかった」「理解した」「認識した」「さどった」「解脱した」とか「まこと・真実・真理・真言・事実・現実」。でも、それは単なる「言葉＝べらべら＝ラベル」でしかない。

「わかっても・理解しても・認識しても・さどっても・解脱しても」いない。パワーと元気のもと、年中発情しているという類まれなホルモンバランスの異常だけでなく、「ペ

らぺら＝言葉」と、「もやもやごちゃごちゃぐちゃぐちゃ＝考える・思う・思考する・思想する」ことらしい。そうしながら、やたら「意味」と「忌み」をでっちあげる。

とはいえ、「口癖」は強い。ものスゲー強い。月に仲間を送り込んで記念写真を撮ったし、ノストラダムスの予言と2000年問題を乗り切ったし、地球の温度はどんどん上げているし、量子とかいう新たな与太話がブームになりそうだし、バイオテクノロジーとかで寿命をもっと伸ばせそうだし、地球を何百、いや何千回だっけ？とにかくチョー何回もぶっとばせる核兵器を製造するほどの有効性と有意性が、「口癖」にはある。そんだけーと言えばそんだけ、そんなにーと言えばそんなに。

以上が、「わかった・理解した・認識した・さとした・解脱した・まこと・真実・真理・真言・事実・現実」という「口癖」の強さの証し。なぜか、この星に生まれてきて、ごめんない。なぜか、おサルさんから人間様にずれて、ごめんなさい。なぜか、言葉を獲得して、手癖じゃなくて、口癖が悪くなって、ごめんなさい。生物多様性に、ごめんなさい。核拡散防止に、ごめんなさい。自分自身に、ごめんなさい。この星に、ごめんなさい。

*

こんな感じです。

このとちくるった駄文に、お付き合いくださった心やさしい方に、心からお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

10.01.18 本物の偽物（前半）

◆本物の偽物（前半）

2010-01-18 10:17:57 | さくぶん

きのうの「まことはまことか（前半）」と「まことはまことか（後半）」2010-01-17 を
まとめてみます。

「ま」とは「口癖」である。もう少し詳しく言うと、「まこと」という言葉の「ま」とは、
ヒトという種の「口癖」である。さらに言うなら、まことはまことでない。言い換え
ると、「まこと」や「真実・真理・真言・事実・現実」なんて嘘である。対応物を欠いた
ぺらぺらのラベルでしかない。

以上ようになります。「とちくるっている」、「魔が差したにちがいない」、「真に受け
るに値しない」、「まともじゃない」「まちがっている」と言われるのは覚悟のうえです。

*

以前は、

「ヒトはわかることしかわからないように出来ている（※興味のある方は、「もしかして、
出来レース？」2009-01-29 を参照ください）」

とか、

その延長線にある「ヒトには生得的にわかるための経路がそなわっている（※「あわい
あわい・経路・表層（1）」と「あわいあわい・経路・表層（2）（前半）」と「あわいあわ
い・経路・表層（2）（後半）」2009-07-04 に書きました）」

とか、

「ヒトの言うことはすべてが決まり文句だ（※「げん・言 -6-（前半）」と「げん・言 -6-
（後半）」2009-08-29 で論じています）」みたいに考えていたことがあります。

その「変奏＝変装＝変相＝ずらし」という感じで、出まかせで出てきたのが、きのうの「口癖」という考え方でした。いずれにせよ、「言葉」と言葉が指し示していると信じられている「もの・こと・行為・状態」の間に、何らかの関係性があるという「神話＝作り話＝たわごと＝でたらめ＝でまかせ」に、我慢ができないという気持ちから出てきた、このアホの自己流の「でまかせ＝与太話＝たわごと」であることは言うまでもありません。

*

きょうは、「まこと」とか「本当」とか「真実」とか呼ばれている「何か」の反対語と信じられている「にせもの」「まがいもの」「うそ」という言葉とイメージについて書いてみたいと思います。

ところで、口癖として「うそーっ！」とか「本当に？」という言い回しがありますね。このペアって、安直に言えば「偽 vs. 真」なのですが、「機能＝役割＝働き」という点では、その2つの言い回しは「同じ」とか「激似」と言ってもよさそうです。ほかに、似たものでは「信じられない」「あり得ない」「アンビリバーボー」なんて言い方もありますね。

思うんですけど、こういうフレーズを口にする時って、何だかうれしくありません？少なくとも自分の場合はそうです。他人様が口になさるさまを見ていても、わくわくしているというか、楽しそうという印象を受けます。

もちろん、悲しい知らせや悲惨な話を見聞きしたさいにも、以上の決まり文句を吐きますね。でも、たとえ良くない情報を得た場合であっても、「うそーっ！」「信じられない」「本当に？」と叫んでいる瞬間は、一種の「忘我状態＝思考停止状態」にあるというか、頭と体が麻痺しているというか、何か鎮静作用のある脳内物質が働いているとしか思えないような「わくわく感＝幸福感」に包まれている感じがしませんか。

強い精神的なショックを受けたさいには、文字通り絶句して言葉など出ないような気もします。まさに、言葉を発する余裕などなく、せいぜい叫ぶだけ。「ぎゃー」「きゃー」「おー」「あー」「むーん」「……………」と、記述できるような状態ではないでしょうか。

ちゃんとした言葉が口から出るというのは、余裕のある「印＝証し」とみることもできそうです。

というわけで、いつものように出まかせを言わせてもらいますと、「うそーっ!」「信じられない」「本当に?」といったたぐいの「口癖」は、「発作」とも言えるのではないかとおもいます。もちろん、比喩です。この「口癖」をずらした「発作」の場合には、その「わくわく感」は、「本当は本当なんて信じちゃいないよ」「まことにまことなんてあるわけがないけど、いちおう、みんながいつも、そうだと言っているから信じているふりをしてるだけ」という「本音 or 体感で知っていること」が、「発作」というかたちでぽろりと「出た」。そんな感じではないでしょうか。

ヒトには、「本当なんてない」と「ほぼ無意識的に気づいている」部分がある。ヒトは、密かに「真実や本当なんてない」と体感している。このアホは、そう信じています。その「無意識」や「密かな体感」が、「発作」となって、不意に「出てくる」。

「うそーっ!」「本当に?」「信じられない」「あり得ない」「アンビリバーボー」「まさか」。

*

いちおう、お断りしておきますが、今しているお話は、言うまでもなく、生物学や医学や生理学や心理学とは関係がありません。ただの素人、それもアホの与太話＝出まかせです。ここで問題にしている「発作」とは、「比喩・レトリック・言葉の綾」です。でも、本気でやっている冗談なんです。まことに本気なんです。正気かどうかは知りません。知るよしもすべもありません。

比喩的な意味での「発作」というのは、「仮死状態」や「死に真似」や「病気の真似」に相通じるイメージがありませんか？ 要するに、「まねる・にせる・えんじる・よそおう」という一連の動作とつながっているように思えます。癡癡やヒステリーと呼ばれている行為も、「発作」の一種なんでしょうか。あれも、「何か」を無我状態で「まねて・にせて・えんじて・よそおって」いるように、見えなくもありません。

「そんなことを言うと（＝すると）、承知しないぞ。やめないと、一線を越えてやる」と

いう感じでしょうか。その「一線を越えた状態」が「何か」です。すごく恐ろしいものでしょう。でも、それが「何か」は分かりません。一線を越えて初めて「あきらかになるもの」だという気がします。だから、「何か」なんです。

「うそーっ!」「本当に?」も、「何か」を「まねて・にせて・えんじて・よそおって」いる、不意の「発作」だという気がしてなりません。その「何か」は、「ヒトにはわからないようになっていく仕組み=『何かの代わりに何かを用いる』という代理の仕組み」の支配下にあるように思えます。

*

話を戻します。

「まこと」とか「本当」とか「真実」とか呼ばれている「何か」の反対語と信じられている、「にせもの」「まがいもの」「うそ」という言葉とイメージについての話です。で、整理するというか、散らかしてみますと、次のようにも言えそうです。

「ま」(=「まこと・真実・真理・真言・事実・現実」)とは、言語を獲得してしまったヒトという種の「口癖」であり、「景気づけ」であり、「発作」であり、「はったり」であり、「でまかせ」であり、「もがき」であり、「かけ・ばくち」であり、「願かけ」であり、「まこと」は実は「まがい」である。

出ました。「まがい」が出ました。「まがい」とは、「まこと」の反対語というか、「ペア=対を成すもの=並ぶもの=平行なもの」です。平行とは、「平行」2009-12-22、「日本語にないものは日本にない?(3)」2009-12-25で触れたことなのですが、簡単に言うと、「勘違い平行棒」みたいなイメージです。「段違い平行棒」と読みかえていただいても、いっこうに差し支えありません。

ただ並んでいる、上下も左右も優劣も主従もない位置関係のことです。ただし、ヒトは勘違いして、上下や左右や優劣や主従を見てしまう。つまり、「平行線をたどるしかない=にっちもさっちもどーにもブルドッグ状態」に陥るしかないたぐいの「騙し絵」みたいなものだとイメージしてください。

このように「パラレル」な状態は、観測者＝見るヒトの位置によって、いろいろな色づけがなされ、いろいろな意味合いを帯びます。たとえば、「まがい vs. まこと」や「にせもの vs. ほんもの」を対義語と見るヒトには、視座や立場や思惑や利害関係があります。そのどれもが、ヒトの「勝手＝都合＝たくらみ」です。

*

で、ここで、わざと、ある「勝手＝都合＝たくらみ」を実行してみます。きわめて官僚的かつ事務的な作業をします。

「まこと」および「ま・真」のいわゆる反対語とみなされがちな言葉を並べてみます。主に、やまとことばを集めてみましょう。

「まがい」「まがいもの」「まがう」「まがえる」「まざる」「まちがえる」「まちがいに」「ちがう」「たがえる」「たがう」「まねる」「ならう」「なぞる」「にせ」「にせもの」「にせる」「にる」「にている」

「つくる」「こしらえる」「いつわる」「うつわる」「いつわり」「だます」「うそをつく」「あざむく」「ゆがめる」「よそおう」「ふりをする」「ばける」「かえる」「かわる」「かわり」「はずれる」「はずす」「ずれる」「すらす」「すれる」「うつる」「うつす」「うつし」。

*

今度は、からことばをまじえます。ちょっと趣向を変えて、いわゆる対義語も挙げてやってみます。からことばの場合には、そのほうがイメージしやすいと思うからです。ただし、対を成す語が思いつかない時には、省かせてください。

「病気・仮病・作病・詐病」「真名・仮名」「本物・偽物・フェイク」「実物・複製・コピー・レプリカ」「まこと・真・かたこと・片言」「死・仮死」「説・定説・仮説」「詐欺」「詐称」「本名・偽名・仮名」「真性・仮性」「実像・虚像・仮像」「主体・客体」「証言・偽証」「実話・ノンフィクション・ドキュメンタリー・ルポルタージュ・報告・作り話・フィクショ

ン」「真実・本当・嘘・偽り」

「語る・騙る・語り・騙り・作話」「真似る・学ぶ」「仮装」「仮想」「偽装」「擬装」「変装」
「変装」「編曲・アレンジ」「正・副」「正常・異常」「健全者・障害者・障がい者・障害者」
「健康・病気」「生・死」「前進・発展・発達・後進・後退・退化」「清い・汚（けが）れてる」
「正教・神聖・邪・邪宗・邪教」「聖・俗」「主人・従者」「神・悪魔・ゴッド・デーモン」
「陽・陰」「ポジティブ・ネガティブ」「正・誤」「善・悪」「正統・異端」「本家・分家」

*

いやー、いかがわしいですねー。からことばを対義語と呼ばれているものと並べてみると、そのうさん臭さがよく見えます。

というのは、漢語系の言葉やヨーロッパ系の言葉は、学問の場、つまりアカデミックな場＝商売や、司法・立法・行政の場＝商売や、宗教という場＝商売などで使用されるために、もっともらしく、偉そうにしていなければなりません。さもないと、その「権威」を保つという「使命＝ミッション＝役割＝役柄」を放棄することになってしまいます。

なお、対義語や反対語とよばれている「クラス分け＝差別＝選別と排除」のいかがわしさについては、「差別化（前半）」と「差別化（後半）」2009-02-18 で詳しく論じていますので、ぜひ、ちらりご覧ください。

さきほど書いたことを繰り返します。

「ま」（＝「まこと・真実・真理・真言・事実・現実」）とは、「口癖」であり、「景気づけ」であり、「発作」であり、「はったり」であり、「でまかせ」であり、「もがき」であり、まことは＝実は「まがい」である。

10.01.18 本物の偽物（後半）

◆本物の偽物（後半）

2010-01-18 10:38:05 | さくぶん

ものすごく単純化して説明してみます。「ほんもの」と「にせもの」というペアを例にとりましょう。「ほんもの」とは「本当のもの」です。一方、「にせもの」とは「本当のものに似せたもの」です。形式論理という言葉があります。言葉を文字通りにとると、「本物に似せたもの」は「本物に似ているだけで本物ではない」という「理屈」になります。でも、「理屈」も通常「言葉」という形をとります。言葉という形をとる以上、それは言葉で述べた＝記述した動作・行為をなぞっているだけです。対応物を欠いて、なぞっているだけです。

よく指を立てて空（くう）をなぞることがありますね。文字や形を、目の前の空間でなぞってみる。「なぞる」とは「まねる」ことです。「似た状態を演じる」ことです。ヒトは、「ほんもの」とか「げんじつ」とか「じじつ」とかいうものを、「五感＝知覚」という機能と、その機能と脳とで行われている「信号・情報・データ」を処理するという「間接的な＝代理としての」行為でしか、とらえることができないのです。

極端に言えば、ヒトのやっていることは、すべてが「にせる・まねる・くうをなぞる」なのです。言い換えると、ヒトにとって「ほんもの」はなく、すべてが「にせもの＝似せたもの＝真似たもの＝なぞったもの」ということになります。

すべてが「にせもの」。「にせものだけの世界」。

在るのは「代理だけ」。「代理だけの世界」。そんなイメージと「似ています」。そうです。ヒトは、「似ている」を基本にして知覚・思考・理解・認識しているのです。さきほど書いた「いかがわしい」というのは、そうした意味です。

「にている」「にせもの」を「相似」「写像」「表象」「代理」「再現前(化)」「対応」などという偉そうでいかめしい、からことばに「ずらして＝置き換えて＝体裁をとりつくろって＝はったりをかまして＝かっこうをつけて＝もったいぶって＝意味ありげによそおって」みたところで、「にせる」は「似せる」、「にせもの」は「偽物・贋物」でしかありません。

*

単純化したつもりでしたが、かえって、ややこしくなりましたか？ では、「言葉をずらしまくって＝とちくるって＝取り乱して」みましょう。いわば、パーソナル(＝ひとり)・ブレインストーミングです。では、いきます。

ほんまもんイコールにせもん。本当の嘘。本当に嘘。リアル・フェイク。genuine(ly) fake。まことのまがいもの。本当の偽物。本物の偽物。ほんまものなにせもん。ほんまのにせもん。純正の模造品。純正の代用品。本物の複製＝コピー。本当の複製＝コピー。実物のレプリカ。実際のレプリカ。まさしくまがいもの。まさしくにせもの。

わけが分かんなくなりましたか？ それとも、何となく体感していただけましたか？ 言葉は偽物。言葉はラベル。言葉は名前。ですから、黒を白と、白を黒と言いくるめる＝言い狂うめることなど、いとも簡単にできるのです。要するに、上で並べたフレーズは、本当に本当、まことにまことなんです。えっつ？「本当に嘘」と矛盾するではないか、ですか？ まさに、それなんです。黒を白と、白を黒と言いくるめる＝言い狂うめることなど、いとも簡単にできるのです。それが言葉＝代理＝ラベルに備わっている仕組みなのです。

そこそこの味の安物のワインのボトルに、「ボジョレヌーボー」というラベルを貼っても、騙されたと気づかないヒトがほとんどではないでしょうか。もちろん、お酔の入った瓶に貼ったら、ばれますよ。そこまで見え見えの偽物のレベルの話ではありません。「にせもの」は「似せてある物」、つまり「似ている」できれば「そっくり」だと錯覚させる条件を備えていなければ、成立しないのです。

またまた、かえって、説明がややこしくなりましたか？ わけがわからなくなりました

か？ ごめんなさい。ちなみに、「わかる」「わかった」も、嘘なんです。良く言えば、「わかる」「わかった」という名の「思い込み」です。

*

みなさん、身のまわりを見わたしてください。テレビやPCの映像と音声、本や雑誌や新聞に文字として記された話や記事、人形・フィギュア・玩具・写真・絵——これらは、みんな「何かに似せたもの」＝「にせもの」なんです。世の中、「そっくり」「似せたもの」「にせもの」だらけじゃありませんか。これ、みんな、ヒトが勝手に作ったり、自然にあるものに細工をして、「似せたもの」ばかりです。

もっとも、自然にあるものに手を加えずに、「これはまさしく〇〇の化身だ」などと思いつく「人面〇〇」のたぐいもありますね。とにかく、ヒトの想像力＝創造力＝妄想力＝捏造（ねつぞう）力はたくましいです。ヒトは、世界＝宇宙＝森羅万象を相手に、ほぼ無意識に、こじつけと駄洒落をしまくっているとさえ言えそうです。

「何かに似たもの」を、「まさに本物」ととらえる、あるいは「本当の偽物」ととらえる。ヒトには、その両方が可能です。前者は完全な錯覚であり、後者は99パーセントほど錯覚という感じでしょうか。いずれにせよ、錯覚＝思い込みです。なにしろ、偽物を偽物と知覚・認識すること自体が、「何かの代わりに何かを用いる」という「代理の仕組み」のうえに成り立っているのです。

別に、ヒトにケチをつけているわけではありません。このアホに人間様にケチをつける能力＝脳力などありません。たわごと＝与太話を書いているだけです。みなさん、ここは笑って＝嘲笑していただくところなんですけど。嘲笑っていただけましたか？ そうしていただくのが、本望でございます。

*

今、ふとデジャ・ヴュを覚えました。思い出したことがあります。「似ている」「激似」「そっくり」で思い出しました。今やっていたことと、そっくりなことを以前やっていました。「こんなマヨじゃ、いやだ！」2009-02-12と「そっくり」2009-02-13で似たような話を書いたことがありますので、お時間のある方は、どうかお目を通してください。

その記事に書いたことを要約しますと、ヒトの世に満ちている「似せたもの」「にせもの」の特性のひとつは、「コピー＝複製」可能だということです。すると、「そっくり」があちらこちらにあふれている、という状態＝常態となります。それが、ヒトの世＝うつせみ＝現世だ、という馬鹿話＝まことの話です。

*

話をずらします。

ここで提起したいというか、みなさんによく考えていただきたいことがあります。やまとことばとからことばの区別をとっぱらった、「ま」という「音（おん）」の「多重性＝多層性＝多義性＝豊かさ＝いいかげんさ＝テキトーさ＝パラレルなありよう」に目を向けてみませんか。具体的に示すと、次のようになります。

「ま・真・眞・間・魔・麻・摩・目・身・ma」

こういう並び方をパラレルと、このブログでは呼んでいます。

「ま」は「真」であると同時に、たとえば「間・ま・あいだ・あわい・あい・際・きわ・さい・差異・境・さかい・ふち・辺境・フロンティア・ボーダー」でもあり、たとえば「魔・ま・悪・邪・不思議・神秘・恐ろしいもの・取り付かれたもの・取り付くもの・憑（よ）りつかれたもの・憑りつくもの・たたられたもの・たたるもの・のりうつるもの・のりうつられたもの」でもあるのです。

特に、「間・あわい」という言葉とイメージが好きです。言葉や表象について考える「さい＝際」には、非常に重要な考え方だとも思っています。これまで、いろいろな記事で書いてきましたが、「かく・かける（3）」2009-05-16、「かく・かける（4）（前半）」と「かく・かける（4）（後半）」2009-05-16では、「取り付かれた＝憑（よ）りつかれた」かのように、かなり過激に考察しています。ご興味のある方は、ぜひ、お読みになってください。面倒な方は、パスしちゃいましょう。いっこうにかまいません。

すごく簡略化すれば、「間・あわい」とは、森羅万象に相反するものなんてない、という感じのお話＝たわごと＝作り話です。discordia concors = 「相反するものの一致」という言葉を思い出しました。大学時代に、このアホにその言葉を教えてくれたのは、何でも「つなげてしまう」名人の「学魔」こと高山宏氏でした。

どうやら、その「つなげる」＝「こじつける」癖が、このアホにも伝染ったようです。

*

ここで思い出したことがあります。そう言えば、ほぼ1年前に、このアホは「ま」をめぐる、とちくるったことがあったのでした。きのうのテレビのニュースを見ていて、スポーツ関連の話題になった時に、真央ちゃんの写真がちらりとテレビ画面に映り、去年のこの時期に、ある記事を書いたことが脳裏をかすめたのです。「ま～は、魔法の、ま～」2009-01-21 というタイトルだったのですが、あれは書いていて楽しかったです。

きょうは、その再演で締めくくらせてください。「ま」についての連載の最後の余興とさせていただきます。では、恥じも外聞もなく、まいります＝参ります＝ま入ります＝間入ります＝真入ります＝魔入ります。今回は、一部、ボケとツッコミ形式でいきます。

蛇足ではありますが、きのうの「まことはまことか（前半）」2010-01-17と「まことはまことか（後半）」2010-01-17で述べましたように、「狭義の言葉（or 言語）で思考する」なんていう作り話が、いかに嘘っぱちであるかを言葉たちに演じてもらいます。では、「ほんまもの＝にせもの」、「考える」「思う」「思考する」「思想する」を実践いたします。

*

ドレミの歌の節で歌います。

「ま～」は、「まこと・真琴」の「ま～」（※「あんたのお気に入りの名前じゃないの。のっ

けから、私情をまじえるな。「えらい、すんまへん」。／「ま〜」は、「まことちゃん」の「ま〜」(※榎岡先生のまことちゃんです)。／「ま〜」は、「まこと・実」の「ま〜」(※故・小田氏のことを考えています。みのるさんじゃ、ありません。念のため)。／「ま〜」は、「魔法」の「ま〜」(※やっぱり、これがなきゃ)。／「ま〜」は、「待つわ」の「ま〜」(※「孝子ちゃんだろ？ またまた、私情をまじえているじゃないか」。「またまた、えらい、すんまへん」)。【※孝子ちゃんファンの方は、「まつはいつまでも、まつ」2009-07-03のうち、関係のある個所だけちらりとご覧ください。】／「ま〜」は、「まぐれ」の「ま〜」(※「でまかせの親戚じゃないか。せめて、マグロにしろ」「??」)。／「ま〜」は、「まあい・あわい・間」の「ま〜」(※「故・坂部恵氏に心酔しとるな?」「仰せの通りでございます」)。／「ま〜」は、「マラルメ」の「ま〜」(※「まだ、あのサイコロペテン師を引きずっているのか?」「やめられまっか」)。

「ま〜」は、「まける」の「ま〜」(※このアホの人生そのものでございます)。／「ま〜」は、「マック」の「ま〜」(※「PCでもあり、ジャンクフードでもあり、アンビバレントじゃのう」)。／「ま〜」は、「マイコー、サイコー」の「ま〜」(※深く考えないでください=深読みなさらないでください)。／「ま〜」は、「まーちゃん」の「ま〜」(※「野球のまー君か?」「いえ、うちにいるネコのお友達のお名前です」)。／「ま〜」は、「まんま」の「ま〜」(※生きる基本です)。／「ま〜」は、「まなかな」の「ま〜」(※「差別だ!」「.....」)。【※なぜ、まなかなが差別と関係があるかにご興味をお持ちの方は、「要するに、まなかな、なのだ」2009-03-09(2009-03-08)と、ハンドルネームを変えて書いた、その記事の自己パクリバージョンである「女装文学登場」2009-11-06のどちらかのうちの、関係のある個所だけちらりとご覧ください。】／「ま〜」は、「マンマ・ミーア = mamma mia」の「ま〜」(※オーマイガッ = Oh, my God. = mother of mine。大きめの英和辞典を引いてください)。

「ま〜」は、「まったり」の「ま〜」(※「うつから解放されて、そんな心境でいたいです」「トホホなこと言うな、泣き虫めが。わしはマッコリのほうがええなあ」「このところ、お酒の飲みすぎじゃないですか。肝臓に悪いですよ」「ほっとけ」)。／「ま〜」は、「ママ」の「ま〜」(※「飲屋のほうか、それとも家にいるほうか?」「校正なんかの用語のほいでス〔原文ママ〕」)。／「ま〜」は、「まいうー」の「ま〜」(※「.....」。「.....」)。／「ま〜」は、「舞妓さん」の「ま〜」(※「舞妓はんやないのか?」「.....」)。／「ま〜」は、「まぼろし」の「ま〜」(※幻・まぼろし・まをほろぼす・間滅ぼろし・魔滅ぼろし・真滅ぼろし。最後のが、今回の連載のテーマでした)。／「ま〜」は、「マハトマ・ガンジー」の「ま〜」(※「踊るマハラジャと関係あるのかい?」「このアホでも、怒りますよー。冗談は顔だけにしてください」)。

「ま〜」は、「マイケル」の「ま〜」(※「さっきも出なかったか?」「マイケル・ムーアの

ことを考えて言ったのです」「あんさん、好きやなあ。へそ曲がり同士で『引き寄せ』かい?」「むっ!」)。／「ま〜」は、「マネー」の「ま〜」(※言葉と並ぶ、最強の代理=表象です)。／「ま〜」は、「マーケット」の「ま〜」(※「マーケット、マーケットってブログで一時書いたけど、市場経済を目のカタキにしとるな?」「はあ、まあ」「貧乏人の嫉妬かい?」「むっ! 貧しき者喧嘩せず」)。／「ま〜」は、「真央ちゃん」の「ま〜」(※「去年も叫んでいたじゃないか? わしはマオタイチュウ(茅台酒)のほうがええなあ。」「これでお開きにさせていただきます」)【※真央ちゃんファンの方は、「1カ月前、ひな祭り」2009-02-03のうち、関係のある個所だけちらりご覧ください。】。

*

やっぱり、まことにまことはまものです。失礼いたしました。

10.01.19 からから

◆からから

2010-01-19 09:23:59 | さくぶん

このところ、ずっと、やまとことばとからことばにこだわっています。このブログを最初から読み返してみると、「ずらす」2009-12-19では、やまとことばだけで言葉をつづろうという試みをしています。以前に、からことばやヨーロッパ系の言葉を用いて書いていたことを、やまとことばだけで書けないか、という「かけ・掛け・懸け・賭け」をしているようです。

学生時代には古文が苦手でしたから、専門家からみると噴飯ものの文章であるにちがいありません。でも、致し方ありません。心意気というかこころざしだけで、踏ん張っている感じでしょうか。「かえるのではなくてかえる」2009-12-20では、そうした自分のこだわりに理屈をつけようとしています。「とりとめもなく」2009-12-21の冒頭でも、自

己分析を試みています。

そのへんの思いが「日本語にないものは日本にない？（1）」2009-12-23 から「日本語にないものは日本にない？（5）」2009-12-27 を書かせたのでしょう。たった今、書いたセンテンスを再読願います。いわゆる「無生物主語」を使っています。語や語句レベルだけではなく、文・文章としての体裁、あるいはつづり方にまで気を配るなら、できるかぎり大和言葉系の言葉を使って書こうというのは、そうとうしんどい作業になりそうです。

そもそも、「無生物主語」という考え方が、たとえば平安時代以前のこの国のからことば系の文書以外の書き物にあったのか、説話や口承と呼ばれる話し言葉、およびその話を書き言葉にうつした文章の中で用いられていたのかどうか。このアホは知りません。調べれば分かるのですが、お勉強が嫌いなのです。

*

「からことば」を「唐語」とか「韓語」と表記するらしいことは、学校時代にでも習ったのでしょ、何となく知っていました。かつてこの島々に中国や朝鮮半島から言葉がつつわたったんだなと思っていました。で、最近、広辞苑をあらためて引いてみて、「から・唐・漢・韓」という語には、中国・朝鮮だけでなく「転じて、ひろく外国の称」という語義があるとの記述を目にし、へえーっと、うなっていました。

嬉しかったのです。辞書の記述に時々見られる「転じて」とか「訛って」とか「当てて」というフレーズが、大好きなのです。「転じて」というのは、要するに「ずれて＝間違えて＝誤って」ということです。

たとえば、「うつせみ」が「空蟬」と「現人」の2つの表記とそれぞれの表記下の語義があったり、「あなた」が「貴方・貴女・彼方」と表記され、異なる意味があるのも、「転じて」とか「訛って」とか「当てて」と同じ現象みたいです。言葉が「正しい」や「ルール」を超えて「生きている」証拠です。だから、「転じて・訛って・当てて」というフレーズや断り書きがあると嬉しいのです。

自分が「はずれた・ずれた・すれた・すりきれた」アホであるから、そうした一種の

「ずれ」に愛着を覚えるのかもしれませんが。

*

きょうは、からことば、つまり中国・朝鮮だけでなく「転じて、ひろく外国」から、つたわってきて＝ながれこんできて＝はいつてきて、そしてからことばと混じり合った、という「お話＝フィクション＝神話＝説＝検証がほぼ不可能 or 困難な話」について考えてみます。

こうしたテーマを論じるさいには、「粹」という「考え方＝ツール」が役に立ちます。「わかるという粹」2009-12-06、「わかるはわからない」2009-12-07、「わかるはプロセス」2009-12-08、「3つの粹」2009-12-09、「ちょっとないんですけど」2009-12-10、「あなたとは違うんです」2009-12-11 という一連の記事の中でもさかんにつかっています。

ところで、このブログおよび以前に開設していた複数のブログを続けて読んでくださっているHさんという方がいらっしゃいまして、そのHさんから、きのう、この画面の左にある「メッセージを送る」という機能を通じてコメントをいただきました。「あなた、自分の記事にリンクを貼りすぎ――」という内容でした。

実は、「うつせみのくら」【注：過去に書きながら結局は削除したブログ記事を、バックアップを使い再ブログ化したものです】が完成したために、過去の記事に容易にアクセスができるようになって重宝し、つい、あれもこれもと記事のタイトルと日付をくっつけて記載しリンクを貼る癖がついてしまったのです。言い訳＝弁解になりますが、別の読者の方から、やはり「メッセージを送る」機能経由でコメントをいただき、こちらは「そうか、そうなのか」という感じで調子に乗って、さらに過去の記事にリンクを貼りまくって紹介し始めた次第なのでございます。

で、そのHさんとは別の方からのコメントを要約しますと、次のようになります。「人気ブログランキング」に、いやにOUTポイントだけが多い、変な紹介文のついているブログがあったので、覗いてみた。よく分からない内容の記事が多いが、記事内にリングが貼ってある別の記事があるため、そこに行ってみると、分からなかった部分が分かった――。以上のような内容でした。そのコメントを拝読して、自分としてはとても嬉しかったので、さきほど申し上げたように「そうか、そうなのか」と納得し、このところやたらリンクの多い記事を書いている次第なのです。

自分でも、やりすぎだという感じがあるので、「興味のある方だけ」とか、「興味のない方はパスしちゃってください」と断りの文句を添えたりしているのですが、上述のHさんは「とにかく、リンクがうざい」とお書きになっているのです。で、きょうの記事にも、のっけからリンクを貼った記事のタイトルと日付が登場していますが、ご関心のある方のみ、ご参照、ご笑覧くださいませ。別に、リンクをクリックなさらなくても、いちおう読めるように努力して書いていますので、そのところをよろしくご理解ください。Hさん、そんなわけで、堪忍してください。

ついでに申しますと、リンクって容量を食うんですね。確かに、この2日間の記事は長かったのですが、文字数制限に引っ掛かって前半と後半に分けなければ投稿できなかったのは、リンクを貼ったさいの容量による「文字数制限」オーバーが原因でした。2分した記事を読まなければならないなどという、ご面倒をおかけしましたことを、お詫び申し上げます。ごめんなさい。

*

話を戻します。

「外部・内部・辺境」、言い換えると「そと・うち・ふち」という「枠」をイメージすると、外部から辺境を通じて内部へと「何か」が「伝わる＝流れ込む＝入り込む」、という「図＝絵＝映像」が頭に浮かびます。

外部・そと → 辺境・ふち → 内部・うち

というイメージですね。その結果、何が起きるのでしょうか？「変化・変質・変貌・改革・革命・同化・共存・並存・合体・混合・排除・排斥・追放」という言葉とイメージが頭に浮かびます。とにかく、何らかの「動き・運動・揺らぎ」が起こることは確かでしょう。程度の差はあるでしょうが、何かが「破れる・壊れる・崩れる」とも言えそうです。

からから来たもので、からが破れる。

そんなふうに要約できるかもしれません。身近な例を挙げましょう。あるヒトがあるヒトと付き合うようになる。友達として、仕事の同僚として、仲間として、あるいは単なる知り合いとして、さらには恋愛の対象として、という具合にいろいろなケースが考えられます。もっとも親密な関係として、恋愛とか同居とか同棲とか結婚という場合を想定してみましょう。

大げさな言い方に聞こえるかもしれませんが、文化と文化の「衝突＝がちんこ」が生じるのではないのでしょうか。この場合の文化とは、個性・価値観・癖・偏愛・しきたり・家風・習慣・風習・伝統・地方差などの広い意味で受け取ってください。

「えっつ、そんな髪の毛の洗い方をするの？ 嫌だあ」「このお味噌汁の味付け、濃すぎるよ」「トイレのドアはちゃんと閉めてよー」「信じられない、この靴の並べ方」「テレビ、そんなに音を多くしなきゃ聞こえない？」「おれのいなかでは、蕎麦は食べない。やっぱりうどんだ」「悪いけど、それとこれを一緒に洗濯するのは、やめてくれる？」「お母さんのことを『おかん』呼ぶのって、何だか耳ざわりなのよね」

「マックじゃなくて、マクドだっちゅうの」「君の家の人たちって、みんな平気で音を立てておならするんだね。驚いちゃった」「ねえねえ、この子、あなたのお父さんと同じお箸の持ち方してる」「いいかい、左ききは個性であり一つの文化なんだよ。なおす必要なんかないと思う」「うちでは、キャベツにソースじゃなくてマヨをかけてたぞ」「悪いけど、寝る前に、少しだけでいいから、聖書を読む時間をちょうだい」「お願い、そこを舐めるのだけはやめて。あなた、抵抗ないの？」「恥ずかしいから、人前では『焼き飯』って言い方やめてくれる？『チャーハン』って言ってよ」

「一緒に歩くときは、そんなに早足にしないでくれないかなあ」「ふつう、ベランダには裸足で出ないものよ」「靴は右足から履くものだって、うちでは躡けられたんだけど」「朝一番に窓を開けるのは、こういう都会では衛生上、良くないんじゃない？」「その、うちのお母さんはこうだったって言い方、やめてくれない？」「納豆なんて、人間の食うものじゃない」

「言っておくけど、うちの親父の前では、宗教の話はしないほうがいいと思う」「ほら、ぶつかった。エスカレーターでは、左側に寄るものなの」「びっくりしないでよ。実家の離れに住んでいる人は、わたしのお兄ちゃんじゃなくて、お姉ちゃんなの」「あの子には、

あなたのいなかの方言で話しかけないでちょうだい」「歯は、朝ご飯の後に磨くのが常識だと思っただけど」「歯は、朝ご飯の前に磨くのが普通じゃん」

この国以外の地域（＝から）から来たヒトたちとの付き合いとなれば、以上のような異「文化」間の「がちんこ＝軋轢（あつれぎ）」がもっとエスカレートするのではないのでしょうか。

*

どちらかが殻を破らなければ折り合いがつかないこともあるでしょう。また、それぞれが相手の「個性＝やり方＝文化」を認め合うことで、何とかやっつけていけることもあるでしょう。同じ国の中でも、広義の文化の「差異・際・きわ・ちがい・へだたり・あわい」があります。地方、家、個人というレベルで、多種多様な違いがありそうです。みなさん、日々、実感されているのではないのでしょうか。

*

からから物やヒトや言葉や考え方や行為（＝方法・風習）が、この島々に入ってきた。太古から、絶え間なく流れ込んできた。鎖国という時代もありましたが、それ以前に伝わってきたものが、そうした時期のさなかにも綿々と受け継がれていたり、変化をもたらしていたとするなら、「鎖国」は無視できるような気がします。

からから来たもので、からが破れる。さきほど、そんな駄洒落で、ちょっとおふざけをしましたが、駄洒落の虫が騒いで無視できない状態なので、蒸し返させてください。では、まいります（※Hさん、あきれないでくださいね）。

カラカラの大浴場（※世界史で知りました）じゃなくて、からからの大浴場（誰も入浴していないお風呂場という意味です）じゃなくて、からからの大欲情（※トホホな状態ですね）じゃなくて、からからの大抑情（※大欲情の逆ということになりませんか？ ああ、すごい）じゃなくて、「から・唐・漢・韓」からの大「沃壤・沃饒」（※この2語は大きめの辞書を引くと載っています）、つまり「この島々ではない、よその地域」から言葉や物やヒトが流入し、「豊かになった」という歴史的経緯があったらしいのです。実に、興味深い話だと思います。

失礼をいたしました。とちくるいの虫がおさまりました。ご協力に感謝いたします。

*

というわけで、この国の文化はこのようになっているわけです。誰もが、自分の生まれ育った土地や母語や文化、つまり広義の「テリトリー＝粹」に愛着があるのは当然のことですから、上述の「豊かになった」は括弧付きにしておきます。言語も文化も相対的なものだと思うからです。

天は、人 or 言語 or 文化の上に人 or 言語 or 文化を造らず。人 or 言語 or 文化の下に人 or 言語 or 文化を造らず。そんなふうになっているのではないのでしょうか。身びいきはほどほどに、という感じです。世界は広い＝狭いのです。みんな、仲よくしましょうよ。

*

テーマがテーマですので、きょうは、友達のいないこのモノブログ自体から（※「コラボログとモノブログ」2009-01-31）、また親サイトや姉妹ブログから輸血＝引用するといった、自己輸血＝自己引用ばかりしている、自家中毒症気味（※比喩です）のこのブログでは、初めて他のサイトからの血液をいただこうと思います。早い話が、他人様のウェブサイトへのリンクを貼らせていただきます。

実は、きのうの記事（※「本物の偽物（前半）」と「本物の偽物（後半）」2010-01-18）を読み直していて、以下のような部分が目にとまり、説得力ないなあと思ったと同時に、ある論考を思い出したのです。

> 「ま」（＝「まこと・真実・真理・真言・事実・現実」）とは、言語を獲得してしまったヒトという種の「口癖」であり、「景気づけ」であり、「発作」であり、「はったり」であり、「でまかせ」であり、「もがき」であり、「かけ・ばくち」であり、「願かけ」であり、「まこと」は実は「まがい」である。

以上がきのう書いた文章なのですが、具体的な記述に欠けていて、それこそ「はったり」で「でまかせ」でしかないという気がして、恥ずかしく感じていたのです。

*

で、その論考とは、山岡洋一という翻訳家の方が運営されているウェブサイトである「翻訳通信ネット版」(※リンクが貼ってあります)内に収められている、故・仁平和夫氏のお書きになった「翻訳のコツ」(PDF版)です。スリリングで実証的で説得力抜群の翻訳論なのですが、翻訳のみならず、広義の言葉・語・言語というものを考えるうえでも、とても啓発的な内容の論文集なのです。しかも、それが無料で読めるしダウンロードできるのです。

その「翻訳のコツ」の「最上級」(p.8~)「こぶしだらけを啜う」(p.15~)という部分が、上で引用した珍説の趣旨を補強してくれるような気がするのです。簡単に申しますと、英語でも、「とても」「すごく」「きわめて」「チョー」とか「まさに」「本当に」「実際」といった言葉に相当する飾りの語(句)が「口癖」「景気づけ」「はったり」として使用されているさまが、英日対訳で実証的に説明してあります。強力な援軍を得たり、という思いがします。ご参照なさることを、みなさんにお勧めいたします。

さらにお奨めしたいツールが、上記サイトに含まれています。DictJuggler.netにある「翻訳訳語辞典」です。この辞典で、たとえば、「まさに」とか「indeed」を検索してみてください。びっくりしますよ。言語観や、異言語と母語の対応についての考え方が変わると言っても過言ではありません。

また、山岡洋一氏の著作である『翻訳とは何か』(日外アソシエーツ刊)は、本日のテーマである「外部・そと→辺境・ふち→内部・うち」と深くかかわる内容となっています。良書です。推薦させていただきます。

なお、山岡洋一氏については、「翻訳の可能性=不可能性」2009-01-05で、「Mr.「翻訳の鬼」という失礼な表記で触れたことがあります。山岡様、ごめんなさい。

*

慣れない輸血を受けまして疲れましたので（※ふつうは元気になるのですが、精神的に疲れしました）、本日はこれでお開きにさせていただきます。

カラカラの大浴場⇨「から・唐・漢・韓」からの大「沃壤・沃饒」、つまり「この島々ではない、よその地域」から言葉や物やヒトが流入して「豊かになった」というお話に熱が入り、喉がからからになってしまいました。血糖値が低下したのでしょうか、もともとからからの頭が、さらにかからから状態となったもようです。ネコを連れて台所に行き、ジュースでも飲んで喉を潤してまいります。

ここまでお読みくださった方に、心より感謝いたします。では、また。

10.01.20 2010年1月20日にギャグる

◆ 2010年1月20日にギャグる
2010-01-20 09:36:36 | さくぶん

本日は、抑うつ状態が悪化していますので、いつも調子で記事が書けそうにありません。憂さ晴らしに、「〇年〇月〇日にギャグる」をいたします。久しぶりです。

本当は、これをやるともっとへこむのですが、つい、やってしまうんです。自己破滅的。やっぱり、アホは学習しない。

今回のお題は3つです。一昨日と昨日の新聞に載っていた週刊誌の広告にあったフレーズをもとに、おふざけをさせていただきます。

【注：この記事が書かれたころの時事や世相を思い出しながら、お読みください。】

*

■第1のお題：「け==つのきょうき」（「週刊〇日」より）

*読み方（1）：け==つの狂気

そのままです。

*読み方（2）：け==つの凶器・兇器

もちろん、裁判官以外のヒトたちを起訴できる権限です。逮捕・身柄拘束なら、裁判官を対象にでも行使できるのでしたっけ？ 勉強不足で、えらいすまへん。

*読み方（3）：け==つの狂喜=驚喜

「みんなでやろうぜ！」「やったぜ！」「ヒューヒュー」。これが実現しないことを祈っています。

*読み方（4）：け==つの驚悸（=びっくりして胸がどきどきすること）

要するに、ビビっているということでしょうか。そうなることを祈っています。ちなみに、ボキャブラリー貧困のこのアホめは、広辞苑を引きながら、書いております。こんな言葉があるなんて知りませんでした。

*読み方（5）：け==つの驕気（=こわいものなしくて意味らしいです）

現時点での雰囲気としては、そんな感じでしょうか。すごく強気に出始めていますもん。

*読み方（6）：け==つの恐悸（=おしっこを漏らしそうなくらいビビっている）

組織ですから、中には、そういうヒトたちもいそうですね。でも、虎の威=衣=位は頼もしいですから、案外みんなはしゃいでいるのかも。

*読み方（7）：け==つの強記（=博覧強記の強記ですね。記憶力がいいという意味で

すから、言えているでしょう)

確かに司法試験を突破できるくらいの記憶力はあるでしょう。ただし、うら＝ねもんだいや、ミツイ氏のことは、とっくにお忘れになっているみたいです。あれって、ほんとうに解決したの？ また、記憶力が一極に集中する傾向も気になります。なぜ、あのへんだけ、しかも、この時期に？ 博覧強記じゃなくて、まだら強記？ 数学に強い方、国会議員の数をもとに確率を計算してみてください。あるヒトによると、「なんでぼくだけなんだ！」なんだそうです。

*読み方(8): け＝＝つの俠気(＝強いものをくじき、弱いものいじめはしない)

あのヒトたちに与えられた権限を考えると、あのヒトたちより強いものっているの？ あるの？ 山口○郎氏や佐藤○氏といった、柔軟で良識のある知性を備えた方々の口から「これは権力闘争だ」という意味のお言葉が出て来て、それが報道されるようになったのは、喜ばしいことです。山口二○氏や佐○優氏のおっしゃるとおり、今回の問題は権力闘争以外の何ものでもないと思います。正義・公正・犯罪・道義的責任という言葉を否定はしませんが、そうしたレベルを超えた複雑怪奇な問題であることはこのアホでも感じとれます。繰り返します。権力闘争という視点が大切です。もちろん、巨悪は巨悪ですよ。政治とカネも争点です。ただし、問題点は2つあるという意味です。見方が、一方に偏っては片手落ちだと言いたいのです。

*読み方(9): け＝＝つの競起(＝競って立つこと)

何を相手に競っているでしょう？ とにかく官僚組織にさからう勢力全部でしょうね。役所の役所は財務省ではなく、今やけ＝＝つ庁です。全役人の守護神です。ですから、今回の騒動は全公務員の既得権・既得権益をかけての闘争なんです。洒落じゃありません。ほんまもんやから、こわいわー。

*

■第2のお題: 「け＝＝つのきょうぎ」

広辞苑を引いていたら、「きょうぎ」の次の「きょうぎ」に目が行きましたので、ついでに追加します。

*読み方(1): け＝＝つの教義(＝要するに、深く信じていること)

自分たちは「正しい」でないことは確か。あのヒトたちは、そこまでナイーブでおめで

たくはない。教義＝モットーは、自分たちが「いちばんつよくてえらい」でしょう。公正なんて二の次。刺身のつま。えらいことでっせー。政権は、選挙でひっくり返ることが可能であることは証明されました。でも、「見えない化」がチョー得意な、「見えない権力」の「きょうき」と「きょうぎ」を正すことは至難の業、ほぼ不可能、チョー困難ちゃいますか？ 韓国・ロシア・フランス・米国（※ニクソン、クリントンのときです）・イラン・ペルー・タイ・パキスタン……の例を思い出しましょう。民主主義と呼ばれる体制が熟してくると、け＝＝つがいちばん大きな力＝最終権力を握るようになります。合法的にファシズムが根付く。合法的にクーデターが起こる。け＝＝つファッショという死語になりつつある言葉が、マスメディアに続々登場してもいいのではないのでしょうか。みんなで議論しましょうよ。そういう雰囲気＝空気をつくりましょうよ。残念ながら、今は、この臆病者のアホが。け＝＝つなんて具合に、ゲタをつかわないとちょっとやばい感じなんです。悲しいです。情けないです。誠に遺憾に存じます。

*読み方(2)：け＝＝つの協議

どこでお話し合いして、手打ちをしているのでしょうかね。複雑怪奇でわかりまへん。この異常事態で、いったい誰が得をするのか、そのへんから考えるしかないのかなあ。でも、シナリオってというのは、つくっても歪んだり、外れて意外な展開になることがある。今回の闘争が、協議したうえでの思わく通りにいくという前提に立つなら、誰が得をするか、あるいは「得をしたか」（未来での完了形）で推理するしかないか。

*読み方(3)：け＝＝つの供犠（＝いけにえ。スケープゴート）

言わずと知れたヒトたちですね。で、こうも考えたんです。あのいけにえたちがいなくなると、現政権がきれいになるのかも。てことは、け＝＝つは「結果的に＝意に反して」現政権のお掃除をしてくれているのかも。ただし、国民がしっかりしていなければなりません。け＝＝つ、および、そこと仲がいい一部メディアや、この記事を書いているアホと同様にけ＝＝つが怖くて怖くて仕方ない大部分のマスメディアによる「操作 or たくらみ or てごころ or ビビリ or 自粛 or 自主規制」に誤魔化されて、逆戻りをしては元も子もないじゃないですか。繰り返します。権力闘争という視点が大切です。もちろん、巨悪は巨悪ですよ。政治とカネも争点です。ただし、問題点は2つあるという意味です。見方が、一方に偏っては片手落ちだと言いたいのです。

*読み方(4)：け＝＝つの競技

そうか、そうだったのか。これって、ごり押しの五輪開催だったのか。金・銀・銅は、誰の手に？ ところで、誰かがごりんじゅうなさるなんて悲しい出来事は嫌です。この種の事件にはつきものですよ。謎が永久に解明できなくなるとか、真相が墓場へ持って行かれたとか、過去に見られたあのような憐れな事件は繰り返したくないですよ。け＝＝つの侠気の欠如と、小○氏の驕気により、狂気と凶器で「競技＝権力闘争」をし、供

犠牲出なんて血生臭い事件はこりごりです。

*

■第3のお題：「偽カツ＝一がなんとか」（「○ERA」より）

*解釈（1）：「本物の偽物（前半）」&「本物の偽物（後半）」2010-01-18 で、このアホめが論じましたように、「本物 vs. 偽物」という2項対立はきわめていかがわしく、うさん臭いのです。似ているから偽物・偽者なんですけど、本物というのが偽物だったりするから、話がややこしい。

1つ考えられるのは、カツ＝さんの「ように」なろうとするヒトたちは、カツ＝さんが書いたり言ったりすることを真に受けてはならない、ということです。どういうことかと申しますと、カツ＝さんが何をなさっているかをよく見ることです。言っていること、書いていることじゃないですよ。行動を見るのです。

何をなさっていますか。特に所得面に注目してください。そうです。自己啓発書を書けばいいのです。それで、あの名声と財力と地位を勝ちとり本を出すたびに間ちがいなく和書のトップリストに載るようになったの代（ママ）。

だから、お間違えにはなりません。その点、リ○ちゃんはやっぱり頭がいい。一見カツ＝さん批判のご本をお出しになって対抗なさっているではありませんか。いや、あれって対抗じゃなく、共闘かも。カツ＝さんの近著にコメントまでつけて協力し応援してますもの。出版界は謎が多い。うかうかしていると、われわれ庶民は、捜査じゃなくて（※まだ上の話を取り付いているようです）、操作されちゃう。コケにされちゃう。

偽カツ＝一なんて呼び名で罵倒されないためには、ほんまものカツ＝さんの言っていることや書いていることを真に受けるのではなく、ほんまものカツ＝さんのやっているように、自己啓発書を出しましょう。とにかく、はったりをかまして書いて、売り込もう。という感じです。このことは、ほかの自己啓発書やスピリチュアル関連の書物についても言えます。成功したかったら、ハッピーになりたかったら、自分がそういう本を書く努力をするのが賢明ではないでしょうか。

書いてあることを真に受けては駄目。続々出てくる同じヒトの本を律儀に買っては、相手の思う壺。秘訣は、本に書いてある言葉を馬鹿正直に行動にうつすことではなく、言葉をお金に変えること＝言葉による錬金術です。そのためには、真似る。似たフレーズをしたためて類書を書けばいい。それが論理的帰結です。

*解釈(2)：偽カツ＝って、そもそも何ですか？ 誰なんでしょう？ 本物が偽ってこともあるんですよ。本物が何かに似ている、似せている、あるいは似ようと、似せようとしている。「にせ・偽」の語源は「似す」だとか。どういう意味かと申しますと、カツ＝さんて、実は本マリマーであり、かつまた偽マリマーなんです。マリマーというのは、林真〇子さんのファンのことです。

林〇理子さんはお金を得て名声も地位も得てお子様ももうけになり、もう足りないものは「あれ」しかないものはない、という境地に至った方です。大先生です。で、その林〇理子さんに欠けていた「あれ」ですけど、もとのほうは公になっていましたから、化けるしかない。でも、今の世の中では、「化ける」手段には事欠きません。見事ご成功なさりました。おきれいですよね。

たった今、このアホめが書きましたセンテンスで、お分かりになりましたよね。ご本のタイトルにある言葉。そうです。「あれ」です。美女シリーズ。ほぼすべてを手にした女性が最後に欲するもの。それが「あれ」。カツ＝さんが、マリマーだっていうこと、というか、林真〇子さんの「ようになりたい＝似たい」という潜在的あるいは顕在的な願望をいだいているという意味で、にせマリマー＝似せマリマー＝偽マリマーだという、駄洒落＝屁理屈ですけど。おふたりの発想と生きてきた軌跡って似てませんか？ 激似という感じがしてならないのです。

ちなみに、解釈(1)を思い出してください。カツ＝さんが、林真〇子さんを「見習って＝似せて」、美女シリーズを書いて、またまたお金をおもうけにならないと誰が否定できるでしょうか。なかなかしたたかなお方らしいですから、その公算は大。繰り返します。類書を書けばいい。それが論理的帰結です。

ということは、本カツ＝は、カツ＝さんみたいに自己啓発書を書こうという賢明な努力をなさっているヒト、偽カツ＝とはカツ＝さんの本を律儀に買い続けて律儀にそれに書いてあることを実行しようと無駄な努力をなさっているヒト。そうなりません？ そうだとすると、後者はこのアホのように、頑張りすぎてうつになる可能性が高い。か

わいそう。これじゃー、リ○ちゃんと同じことを言っていることになる。このアホって、偽○カーになっちゃうじゃないですかー。ああ、ややこしい。

けっきょく、女性はあれが勝ち、なんですよ。化けるが勝ち。おあとがよろしいよう
で。

* 解釈（3）：言葉の多義性＝多層性からして、偽カツ＝ーって、小林カツ○さんのファンという解釈も可能かと思います。けん○ろうさんのお母様ですよ。かつて大ヒットした料理の対決番組では、確か鉄人を破ったお方なんですよ。すごいですね。尊敬しています。

でも、小林カツ○さんのファンの偽って、どういう意味なんでしょう。また、週刊誌の見出しになるような、どんな問題があるというのでしょうか。どうも、この解釈には、偽カツ＝ーが小林克○さんや小林勝○さんや小林且○さんのファンの偽というくらい無理があるようです。やーやーやー。

やっぱり、偽カツ＝ーについては、解釈（1）と解釈（2）が有望ですね。個人的には、解釈（2）に軍配を上げたいところです。

以上です。

*

なお、「週刊○日」誌および「○ERA」誌とその見出しと、以上の駄文とは一切関係がございません。中身は知りません。だいいち、このアホには両誌を購入するお金がありません。へこんでいて、本屋さんに行って立ち読みする気力もありません。単なるビョーキ持ちのモーソーでございます。その点を、ご了承願います。

*

案の定、抑うつがひどくなりました。本日は、処方されているお薬をこれから飲み、ぼーっとしている予定です。「素面でいたい」2009-12-12 で泣き言を書きましたが、お薬には弱いんですよー。では、失礼いたします。

*

■参考ブログ記事：「きな臭い話」2009-12-11（※この記事の最後にも、リンク集が載っています）：「け＝く」2010-01-15

■バックナンバー：「09年3月10日をギャグる」2009-03-10：「09年3月11日をギャグる」2009-03-11：「09年3月12日をギャグる」2009-03-12：「09年3月13日をギャグる」：「09年3月14日をギャグる」2009-03-14：「09年3月15日をギャグる」：「09年4月6日にギャグる」2009-04-06：「09年4月7日にギャグる」2009-04-07：「09年4月8日にギャグる」2009-04-08：「09年4月9日にギャグる」：「4月23日にギャグる」2009-04-23

10.01.21 こんなことを書きました（その19）

◆こんなことを書きました（その19）

2010-01-21 09:08:02 | さくぶん

今回は、2009-12-16～2010-01-20に掲載した記事のダイジェストをお届けいたします。いったい自分は何を書いたのだろうか？ 頭の整理のために、各記事に短い解説とキーワードとキーフレーズを付けてみました。

「あのわけの分からない記事は、こういうことを言いたかったのか」という具合に、みなさまのお役に立つことができれば幸いです。

* 「二句」2009-12-16：抑うつ状態が極度に悪化していた時に書いたものです。「過去に開設したブログの記録」、つまりブログを開設してや削除・閉鎖するということを繰り返していた「痕跡」をコピペし、ため息をついています。書きたい。でも、書けない。そんな焦りと嘆きをぼやいているトホホな記事です。この日の時点では、もう書けないという気持ちが強く、ベソをかいているだけです。

* 「ずらす」2009-12-19：数日間、もぬけの殻状態でしたが、この日ようやく書く元気が出ました。「うつせみのうつお」を再ブログ化しようという計画を実行し始めたのを契機に、記事を書いてみようかと奮起してしたためたものです。文体が変わっているのは、やまとことばを意識的に多用して書いているためです。いつも書いているようなことを、できるかぎりからことばを使わずに書いたらどうなるか。そんな実験をしています。やまとことばという「枠」を設けることで、「言葉をつくりながら書いている」ような錯覚に陥りました。官能的な体験でした。キーワードは、「ずらす」「わく・枠」「すじ・筋」「なわ・縄」「いと・糸」です。直接書かなかったキーワードは、「ヒトによる言語の獲得」「脳科学ブーム」「バイオテクノロジー」「ゲノム解読」「量子」「坂部恵』『仮面の解釈学』『宮川淳』『引用の織物』『紙片と眼差のあいだに』『ヒュー・ケナー』『ジェームズ・ジョイス』『サミュエル・ベケット』です。

* 「かえるのではなくてかえる」2009-12-20：前日の実験の「種明かし」をしています。やまとことばを、あえて使っている理由を誤解されたくないために、「原点」や「本来の姿」に「かえる」という考え方への批判を、つづる言葉の身ぶりですす、という「遊び」「たわむれ」をしています。こういう込み入ったことをする癖はなおりそうもありません。また、一般にはネガティブなものとして取られている「でまかせ」という言葉とイメージが、「言葉」と「書くこと」のありようと深く結びついていると主張しています。キーワードは、「変える・替える・代える・換える」「帰る・返る・還る」「孵る」です。直接書かなかったキーワードは、「坂部恵」「ステファヌ・マラルメ」「ジャック・デリダ」「豊崎光一』『余白とその余白または幹のない接木』『砂の顔』『渡部直己』『泉鏡花論—幻影の杼機』『谷崎潤一郎—擬態の誘惑』です。

* 「とりとめもなく」2009-12-21：前回の記事の内容をできるだけやさしく解説してみたり、かつてブログをつぶした罪滅ぼしとして「うつせみのくら」（※過去のブログ記事を再ブログ化したもの）をつくっているという言い訳をしたり、幼かったころの回想や現在の身辺雑記的なことを書いたりしています。キーワードは、「とりとめがない」「母」「運命」「物語」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦』『批評あるいは仮死の祭典』『安岡章太郎』です。

*「パラレル」2009-12-22：過去に潰した記事の再ブログ化である「うつせみのくら」をつくっている作業について報告しています。1日に10本ほどの過去の記事を再投稿する（※コピペをするだけの機械的な単純作業ではなく、どうしても読み直しと加筆が伴います）という、かなり無茶なことをしているさまがつづられています。この「うつせみのあなたに」というブログと並行して、つまりパラレルに作業をしているという点を指摘し、パラレルという言葉のイメージを膨らませています。ちょっとおふざけが過ぎたようです。キーワードとキーフレーズは、「同義語」「対義語」「同列に在る」「類語辞典」「ズレ」「間・あいだ・あわい」「境・さかい」「際・きわ」「差異」「違い」「関係性」です。直接書かなかったキーワードは、「ジル・ドゥルーズ」『意味の論理学』「リゾーム」です。

*「日本語にないものは日本にない？（1）」2009-12-23：かつて読んだ本の記憶が部分的によみがえり、その記憶を頼りに「日本語にないものは日本にない？」という問いをめぐって、あれこれ書いています。この時点では、その本の著者やタイトルや内容が思い出せなかったので、記憶の断片をもとに議論を始めるという横着なことをやっています。まさに、でまかせ主義です。「ずらす」2009-12-19 で書いた大和言葉づくりの文章を、からことばをまじえた文章に「置き換える＝翻訳する」という、妙な試みをやっています。文体についても考えています。連載の始まりだという意識はあるものの、方向はまだ定まっていません。手探りの状態です。キーワードは、「社会・society」「書く」「考える」「です・ます調」「だ・である調」「書き方と書く内容」です。直接書けなかったキーワードは、「柳父章」『翻訳語成立事情』です。直接書かなかったキーワードは、「ジョージ・スタイナー」『After Babel（邦訳：バベルの後に）』「聖書の翻訳」です。

*「日本語にないものは日本にない？（2）」2009-12-24：「日本語にないものは日本にないのか」というフレーズを、「言い換える」「置き換える」という広い意味でとるという方針が決まったようです。とはいえ、まだ右往左往しています。言葉を学問の対象とするさいのいかがわしさ、事務的な作業、官僚的なスタンスについて批判しています。ヒトが言葉を制御できる、あるいは「観測」できるという神話に疑問をいただいています。キーワードとキーフレーズは、「検証」「屁理屈」「理屈」「ことわり・事割り・理・断り」「五感」「抽象語」「言葉と物の対応」「関係性」「論理的に展開する」「筋道を立てる」「言葉に身を任せる」「分かった」「分かったと思ひ込んだ」です。直接書かなかったキーワードは、「ミシェル・フーコー」『言葉と物』『狂気の歴史』『蓮實重彦』『批評 あるいは仮死の祭典』です。

*「日本語にないものは日本にない？（3）」2009-12-25：読者の方から、前回の記事の内容が分からないとのメッセージをいただき、うろたえています。正確に書こうとすると「分からない」文章になる、などと言いつめいたことを書いていますが、今でも、そ

う思っています。文章力という曖昧なイメージや、言葉を使えば分かるという暗黙の了解には、未だに納得がいきません。この記事では、そうした思いを何とか伝えようと努力しています。前回の抽象語に引き続き、今回は具体語・具象語と呼ばれているもののいかがわしさを指摘しています。「言葉の発生」という神話にもかみついています。キーワードは、＜ヒトは、言葉を使って何かが分かるのだと「決めている＝思い込んでいる＝ヒトびとの間でそういう暗黙の了解が成立している。＞と、＜「知覚（ちかく）」というのは、「遠く」にあるものを「近く（ちかく）」にあると「錯覚する＝自分に言い聞かせる＝無意識にあるいは意識的に思い込む」ことです。＞です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」『批評あるいは仮死の祭典』『文化人類学』です。

*「日本語にないものは日本にない？（４）」2009-12-26：言葉・言語をアカデミックな場で研究の対象とすることの限界と、避けることのできない「いかがわしき」を指摘しています。検証作業や結論を出すという使命が、かえって言葉・言語を五感でとらえる妨げになっている点に触れています。ある言語になかった言葉＝語が登場することによって、社会が変化する現象を引き合いに出して、言葉の効用という側面を支持しています。言葉をラベルという比喩でとらえて、言葉によって他者を思いやることのできる点も支持しています。また、パラレルという考え方を発展させて論じています。最後は、センチメンタルになっています。キーワードは、「検証不可能」「セクハラ」「DV」「ドクハラ」「パワハラ」「ゲイ、ホモ、ホモセクシュアル、ホモセクシャル、レズビアン、おかま、同性愛、へんたい、変態、変態性欲（者）、男色（家）」「抽象度」「思いやる」「想像力」「animation」「animate」「いきる・息る・生きる・活きる」です。直接書かなかったキーワードは、「サミュエル・I・ハヤカワ」「一般意味論』『思考と行動における言語』」です。

*「日本語にないものは日本にない？（５）」2009-12-27：「読みにくい」「分からない」という読者のメッセージを受け、読みやすく、分かりやすく書こうと努力しています。学校などでよく教わる「言葉は文化と密接にかかわっている」という話を、例を挙げて説明しています。読者からのフィードバックを素直に受け止め、「うつせみのくら」造りに専念すると「追記」で述べています。確かに、この時期にはブログの記事を書くのと、かつての記事を1日に10～20本も投稿して再ブログ化する作業とを並行して進めていたため、極度に疲れていました。キーワードは、「コメとその類語」「rice」「ウシ」「cowとその類語」「アラビア語」「イヌイット諸語」「社会」「society」です。直接書かなかったキーワードは、「文化人類学」「言語人類学」です。

※この間の空白は、「うつせみのくら」の造作に専念していたためです。正月という観念がない家庭に育ちましたので、年末年始に関係なく、毎日せっせと再ブログ化を進めていました。元旦に、熱心な読者のHさんから、「あんたは、もう何もかも捨ててるわ」と

温かい励ましのメッセージをいただきました。【注：「うつせみのくら」とは、過去のブログ記事のバックアップを再ブログ化したものです。何しろ各記事が長く、全体の量も多いために時間をかけて作業を進めました。その後削除したため、現在はありません。】

*「かえるはかえる」2010-01-12：「うつせみのくら」がほぼ完成した日の記事です。「懐かしい」「(過去に)もどりたい・かえりたい」という言葉とイメージと心理がテーマです。そうした心理が「悔しい」という思いと結びついていることを指摘しています。その「悔しい」が個人レベルだけでなく、共同体や国家のレベルに至るとき、事態がきな臭く、場合によっては生臭い様相を帯びる点に言及しています。「かえる」を「変える・換える・代える・替える」と「返る・帰る・還る」に分け、後者は不可能ではないかと問題提起をしています。それと関連して「再現する」の不可能性にも触れています。その「代わり」にヒトがするのが「つくる・でっちあげる」だと述べています。キーワードは、「加齢」「帰郷」「郷愁」「パレスチナ」「地・知・血」「histoire」「history」「story」「History」「アルマゲドン」「かたり・語り・騙り・カタリ」「警察・検察・裁判所での記録」です。直接書かなかったキーワードは、「ジョージ・スタイナー』『言語と沈黙』『青ひげの城にて——文化の再定義への覚書』『供述調書』『検察官面前調書』『取り調べの録画・録音』『取り調べ過程の可視化』『テレビ番組の再現ビデオ』『史書』『歴史学』」です。

*「かえるにかえる」2010-01-13：ヒトが空間および時間を知覚するさいに、前後をどのように処理しているかを考察しています。心理学・精神医学・物理学の知識がない素人として、自分の母語と、自分にとっての異言語である英語での「前後」に関する語句を並べて考える方法をとっていますが、途方にくれています。身の程をわきまえ、出まかせと駄洒落を用いて言葉に身を任せるといふ、お決まりの遊びをしています。キーワードは、<「何かの代わりに何かではないものを用いる」という「代理の仕組み」の大御所である言葉（音声や文字）と視覚的イメージ（映像）を用いる「限り（＝限界）」、「想起・再現・復元」は無理・不可能ではないか。>です。この種の議論が、司法における「再現」の可能性や、歴史の検証という、大きな問題に触れる点についても言及しています。さらに、その問題がファシズム＝全体主義にも親和性があることを指摘し危惧しています。過度に被害妄想的になっています。「原点」や「本来の姿」や「真の自分たち」へ「帰ろう」という運動を「幻想・錯覚」を利用した「策略」である、と暗に批判しています。キーワードは、「ジーニアス和英辞典」「比喩」「知覚」「変える・換える・代える・替える」「返る・帰る・還る」「孵る」「アレゴリー」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦』『表層批評宣言』」です。

*「もどるにもどれない」2010-01-14：一度手にしたものを手放すことができない、というヒトの習性がテーマです。日常生活から、法律・政治・経済に至る、多岐にわたる例を挙げています。途中から唐突に無重力状態の話へと変わります。ヒトが当然だと思って

いるものに揺さぶりをかけるための「比喩」として、無重力状態を持ち出し、それをきっかけに言葉たちにアナーキーな動きと表情を演じてもらっています。こうした企みと戦略は、単なる支離滅裂と取られる可能性が高いです（たぶん、読者は混乱するだけだと、再読して反省しました）。この記事で訴えたかったのは、言葉とイメージに備わっている「いかがわしさ」つまり、欠陥と限界性です。それを意識しようと呼びかけています。同時に、「もどるにもどれない」という事態を認識しつつ、少しでも「もどる」＝「かわる」努力をしようと呼びかけています。キーワードとキーフレーズは、「既得権」「伝統」「習慣」「掟」「利害関係」「当然」「テリトリー」「野口聡一」「圧倒的な偶然性」「自由さ・不自由さ」「フィクション」「いかがわしく頼りない観測者であるヒト」「何かの代わりに何かではないものを用いる」「イメージは、基本的にヒトが個人レベルでいざきわめて『テキトーなもの』です。

* 「け＝＝く」2010-01-15：警察・検察・検閲・検索がテーマであり、キーワードです。それを「＝」や「○」という伏せ字を用いて、言葉自体に演じさせるという、お決まりの方法をとっています。再読し、自分の芸のなさに恥じ入るばかりです。ネットの検索エンジンを使って「検索」という操作をすることが、「検閲」とも重なる部分の多い作業となり得ることを指摘しています。よく考えると恐ろしいテーマです。

* 「まことにまこと」2010-01-16：普段は漢語系の言葉を使用して語る「硬い」テーマを、やまとことば系の言葉で語る、という試みをしています。やまとことば系の言葉たちと、からことば系の言葉たちを対比し、なぜか、後者が空疎であるという感想を述べ、その理由を自己分析しています。「真実・真理・真言・事実・現実」といったもってもらしい、偉そうで厳しい言葉とそのイメージを痛烈に批判しています。その批判を支えているのは、言葉への愛です。それが読者に通じたかどうかは、分かりません。個人的には、とても愛着のある記事です。自分の言語観、言語に対する倫理観がストレートに出ています。キーワードは、「分光する」「中上健次」「ずらす」「パラレル」です。直接書けなかったキーワードは『紀州木の国・根の国物語』です。直接書けなかったキーワードは、「由良君美」「言語文化のフロンティア」「四方田犬彦」「先生とわたし」「エルンスト・カッシーラー」「高山宏」「表象文化論」「坂部恵」「ニーチェ」「善悪の彼岸」「ヴィトゲンシュタイン」「フェルディナン・ド・ソシュール」「ステファヌ・マラルメ」です。

* 「まことはまことか（前半）」2010-01-17：簡略化すると、「思考」と「言葉」に関しての考察です。「まこと」の「ま」について、言葉の具体性＝表層性と、抽象性＝概念性の両面から取り組んでいます。言葉を言葉で論じることがいかに奇妙で不可能であるか、しかし、そうした行為からヒトは逃れることができないという点に徹底的にこだわっています。その困難な試みを「とちくるう」という言葉とイメージで読者に伝えようとしています。誤解を招きやすい言い回しですが、ほかに適切な言葉が思いつきません。ま

た、「言語で思考する」という考え方に対し、図式を用いて反論を試みています。キーワードは、「ま・ma」「あむ・あん・あーむ・あーん・あうん・阿咩・aum・om」「オカルト」「宗教」「呼吸法」「考える」「思う」「思考する」「思想する」「ことわり・事割り・言割り・理」です。直接書かなかったキーワードは、「フェルディナン・ド・ソシュール」「ステファヌ・マラルメ」「ジャック・デリダ」「蓮實重彦」です。

*「まことはまことか(後半)」2010-01-17:「まこと」の「ま」が、どのような「機能＝働き＝役割」を演じているかを詳細に論じています。読者にとってかなり読みにくい記事となることを意識し、「口癖」という比喻で、「ま・まこと」、つまり、「わかる」「わかった」「理解した」「認識した」「さどった」「解脱した」や、「まこと・真実・真理・真言・事実・現実」という一連の言葉や言い回しの「からくり」を説明しようと努力しています。読者に体感してもらおうと努めています。簡単に言うと、「本当・真実」なんてない。単なるヒトの「口癖」だ。そんな感じです。分かっていただけでしょうか。キーフレーズは、<「ま+こと」「真+事」「真+言」「真+断」とも読めます＝分光できます。さらに、「ずらす」なら、「事」とは「事象・物」、「言」とは「言葉・語・言語・代理・表象」、「断」とは「断る・事割る・判る・分かる・認める・認識する・理解する」と読めそうです。>と、<ここで言っている「口癖」とは、「何か」から「はずれ・ずれ・すれ」たあげく、擦り切れてしまっている言葉のことです。まさに、「ま」がそうなのです。>です。前半と後半に分けたこの記事は、かなり力を入れて書きました。ややこしい内容ですが、1度読もうとしてあきれ返った方に、ぜひ、再度読んでいただきたいと思う記事です。キーワードは、「ギュスターヴ・フローベール」『紋切型事典(紋切型辞典)』です。

*「本物の偽物(前半)」2010-01-18:内容的には、前回の記事とつながっていますが、別個のテーマへとずれていきます。前回より、読者になじみやすい書き方をしたつもりですが、どうでしょうか。「本当・真実」と呼ばれているものが、いかにうさん臭いものであるかを訴えています。「偽物・うそ」と「本当・真実」が対立するものだという考え方にも、疑問を投げかけています。キーフレーズは、<このように「パラレル」な状態は、観測者＝見るヒトの位置によって、いろいろな色づけがなされ、いろいろな意味合いを帯びます。たとえば、「まがい vs. まこと」や「にせもの vs. ほんもの」を対義語と見るヒトには、視座や立場や思惑や利害関係があります。そのどれもが、ヒトの「勝手＝都合＝たくらみ」です。>です。キーワードは、「ジル・ドゥルーズ」「ニーチェ」です。

*「本物の偽物(後半)」2010-01-18:「にせもの・似せたもの」を「代理・何かの代わりのも」と重ねて論じています。読者に身近な例を挙げて、「偽物・うそ」と「本当・真実」が対立するものだという考え方の「いかがわしさ」を体感してもらおうと努めています。おふざけもしています。再読すると恥ずかしくて、赤面してしまいました。キーフレーズは、<みなさん、身のまわりを見わたしてください。テレビやPCの映像と音

声、本や雑誌や新聞に文字として記された話や記事、人形・フィギュア・玩具・写真・絵——これらは、みんな「何かに似せたもの」＝「にせもの」なんです。世の中、「そっくり」「似せたもの」「にせもの」だらけじゃありませんか。＞と、＜すごく簡略化すれば、「間・あわい」とは、森羅万象に相反するものなんてない、という感じのお話＝たわごと＝作り話です。＞です。直接書かなかったキーワードは、「ジャン・ボードリヤール」「ピエール・クロソウスキー」「シミュラクル／シミュラークル」「宮川淳」「豊崎光一」「ミシェル・フーコー」『外の思考』「ギユスターヴ・フローベール」『ブヴァールとペキュシェ』です。

* 「からから」2010-01-19：「日本語にないものは日本にない？（1）」2009-12-23 から「日本語にないものは日本にない？（5）」2009-12-27 が、「うつせみのくら」つくりと並行して執筆していた記事だったため、落ち着いたところで、あらためて異文化・異言語間の「まじりあい」をテーマにしての文章を書きました。「からことば」の「から」が、中国、朝鮮半島だけでなく、さらに遠くの地域も指していることを広辞苑で知り、「から」という言葉とイメージにもてあそばれてみる方法をとっています。こじつけと駄洒落を多用しています。こういう書き方をするから、読者による好き嫌いがはっきりと分かれるのでしょうか。それは分かっているのですが、やめられません。テーマがテーマだけに、ブログを書き始めて、初めての試みをしています。山岡洋一氏の運営するウェブサイトにつながるリンクを貼らせていただきました。自己輸血＝自己引用ばかりしているブログが、初めて他のサイトから輸血を受けたのです。キーワードは、「外部・内部・辺境」「そと・うち・ふち」「伝わる・流れ込む・入り込む」「翻訳通信ネット版」「仁平和夫」『翻訳のコツ（PDF版）』「DictJuggler.net」「翻訳訳語辞典」『翻訳とは何か』です。

* 「2010年1月20日にギャグる」2010-01-20：抑うつ状態がひどかったので、久しぶりでこの形式の記事を書きました。お恥ずかしい限りです。どうか、斜め読みなさって、嘲笑ってやってくださいませ。再読すると、書いた後にお薬を飲むという前提に立っているためか、半分やけになり、けっこう熱を入れて馬鹿をやっております。テーマは、「善 vs. 悪」「真 vs. 偽」という短絡的な2項対立のいかがわしさです。

以上です。

あとがき

あとがき

哲学がしたーい。誰々が何々と言ったなんて、関係なーい。自分の頭と体で考えてみたーい。インプットする暇などない。アウトプットに全力をあげよう。今ここにある手持ちのものを総動員して、言語、哲学、表象について、考えてみたい。哲学を庶民の手に！

うつを患いながらも、以上のような気持ちで、いわば憂さ晴らしに書き始めたのが、本書のもととなったブログでした（「うつせみのあなたに」というブログは、現在も開店いたしております）。いったん始めたら、そればかりを律儀に続ける——これこそ、まさに、うつになりやすい典型的な性格だと思います。

そうした性格の私は、ほぼ1年間にわたり毎日毎日（ときおりダウンもしましたが）、ブログ記事にしては長いものを書き続けたのでした。その結果、生まれたのが本書です。テーマは、人間の原点である「表象の働き」——「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組み——です。

具体的には、言語、哲学、社会現象、表象文化が、私にとっての思考の対象になりました。今でも、そのスタンスは変わりません。そうした分野を、駄洒落を頻発し、遊び心を持ち、あくまでも素人の立場から、自由奔放に論じる。上述の「表象の働き」を、読み手に話しかけるように、なるべくややこしくならないように書きつづる（とはいっても、ややこしくならざるを得ない部分もありますけど）——。それが、本書の一貫した態度です。

今思えば、心の病をかかえていたものの（現在もかかえています）、贅沢な時間を過ごした気がします。なにしろ、自分のいちばん興味のある、「何かの代わりに何かではないものを用いる」という仕組みについて、考えることができたのですから。

『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の記事タイトル

第1巻

08.12.19 今日は誕生日

08.12.20 地図は現地ではない

08.12.21 消えてしまいたい指数

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

08.12.23 狂ったサル

08.12.24 あえて、その名は挙げない

08.12.25 遠い所、遠い国

08.12.26 横たわる漱石

08.12.27 信じてはいけない言葉

08.12.28 そして、話はお金に行き着く

08.12.29 匿名性の恐ろしさ

08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について

08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった

09.01.01 私家版『存在と無』一序文一

09.01.02 論理の鬼

09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球

09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性

09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考

09.01.08 見えないものを見る

09.01.09 読めないけど分かる言葉

09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉

09.01.11 目は差別する

09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？

09.01.13 架空書評：狂った砂時計

09.01.14 ん？

09.01.15 「ん」の不思議

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

09.01.19 こんなことを書きました（その1）

第2巻

09.01.20 それは違うよ

09.01.21 ま～は、魔法の、ま～

- 09.01.22 なぜ、ケータイが
- 09.01.23 お口を空けて、あーん
- 09.01.24 冬のすずめ
- 09.01.25 架空書評：彼らのいる風景
- 09.01.26 交信欲＝口唇欲
- 09.01.27 ケータイ依存症と唇
- 09.01.28 オバマさんとノッチさん
- 09.01.29 もしかして、出来レース？
- 09.01.30 カジノ人間主義
- 09.01.31 コラブログとモノブログ
- 09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー
- 09.02.02 こんなことを書きました（その2）
- 09.02.03 1カ月早い、ひな祭り
- 09.02.04 神様になる方法
- 09.02.05 かつらはずれる
- 09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ
- 09.02.07 ひとかたならぬお世話になっております
- 09.02.08 架空書評：PDSジェネレーションズ
- 09.02.09 1人に2台のテレビ
- 09.02.10 人面管から人面壁へ

09.02.11 マトリックス

09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！

09.02.13 そっくり

09.02.14 「東京」CE 無限大

09.02.15 架空書評：九つの命

09.02.16 こんなことを書きました（その3）

第3巻

09.02.17 ああでもあり、こうでもある

09.02.18 差別化

09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい

09.02.20 まぼろし

09.02.21 トリトメのない話

09.02.22 架空書評：奪還

09.02.23 おいしくない社会

09.02.24 あきらめない

09.02.25 最後のとりでを守る

09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ

09.02.27 イエス・アイ・キャン

09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに

- 09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？
- 09.03.02 女か男か？
- 09.03.03 ヒトは本を読めない
- 09.03.04 作者はいない
- 09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって
- 09.03.06 毎度ありがとうございます
- 09.03.07 ゆうれいをはらう
- 09.03.08 こんなことを書きました（その4）
- 09.03.09 要するに、まなかな、なのだ
- 09.03.10 女心を男が歌う
- 09.03.10-09.03.12 でまかせしゅぎじっこうちゅう（前編）
- 09.03.13-09.03.15 でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）
- 09.03.16-09.03.25 うつせみのうつお
- 09.03.26-09.03.27 かわる（1）～（5）
- 09.03.28-09.03.29 かわる（6）～（10）
- 09.03.30 なる（1）～（3）
- 09.03.31 なる（4）～（6）
- 09.04.01 なる（7）～（8）
- 09.04.02 なる（9）～（10）
- 09.04.03 たとえる（1）～（2）

09.04.04 たとえる (3) ~ (4)

09.04.05 たとえる (5) ~ (6)

09.04.06 たとえる (7)

09.04.07 たとえる (8)

09.04.08 たとえる (9)

09.04.06-09.04.09 でまかせしゆぎじっこうちゅう

09.04.10-09.04.16 うつせみのうつお

09.04.17 たとえる (10)

09.04.18 こんなことを書きました (その5)

第4巻

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

09.04.20 言葉を奪われる

09.04.21 「事実=意見」=両方ともでたらめ

09.04.22 「人間=機械」説 (1)

09.04.23 4月23日にギャグる

09.04.24 「人間=機械」説 (2)

09.04.25 「人間=機械」説 (3)

09.04.26 反「人間=機械」説

09.04.27 あう (1)

09.04.28 あう (2)

- 09.04.29 あう (3)
- 09.04.30 あう (4)
- 09.05.01 あう (5)
- 09.05.02 あう (6)
- 09.05.03 あう (7)
- 09.05.04 こんなことを書きました (その6)
- 09.05.05 スポーツの信号学 (1)
- 09.05.06 ドラマ信号論 (1)
- 09.05.07 信号論から見た経済 (1)
- 09.05.07 信号論から見た経済 (2)
- 09.05.08 信号学的視線論 (1)
- 09.05.09 信号学的視線論 (2)
- 09.05.10 信号論 (1)
- 09.05.11 もくじをつくりました
- 09.05.12 信号論 (2)
- 09.05.12 信号論 (3)
- 09.05.13 こんなことを書きました (その7)

第5巻

- 09.05.14 かく・かける (1)

09.05.15 かく・かける (2)

09.05.16 かく・かける (3)

09.05.16 かく・かける (4)

09.05.17 かく・かける (5)

09.05.18 かく・かける (6)

09.05.19 かく・かける (7)

09.05.19 かく・かける (8)

09.05.20 占い・占う

09.05.21 賭け・賭ける

09.05.22 書く・書ける (1)

09.05.22 書く・書ける (2)

09.05.23 こんなことを書きました (その8)

09.05.24 と、いうわけです (1)

09.05.24 と、いうわけです (2)

09.05.25 あられる・あらず (1)

09.05.26 あられる・あらず (2)

09.05.27 あられる・あらず (3)

09.05.28 あられる・あらず (4)

09.05.29 あられる・あらず (5)

09.05.30 あられる・あらず (6)

09.05.31 あらわれる・あらわす (7)

09.06.01 あらわれる・あらわす (8)

09.06.02 こんなことを書きました (その9)

第6巻

09.06.03 つくる (1)

09.06.04 つくる (2)

09.06.05 つくる (3)

09.06.06 つくる (4)

09.06.07 テリトリー (1)

09.06.08 テリトリー (2)

09.06.08 テリトリー (3)

09.06.09 テリトリー (4)

09.06.10 テリトリー (5)

09.06.11 テリトリー (6)

09.06.12 テリトリー (7)

09.06.13 こんなことを書きました (その10)

09.06.18 なわ=わな

09.06.19 台風と卵巣

09.06.20 出る

09.06.21 うんちと言葉

09.06.22 地と知と血 (1)

09.06.22 地と知と血 (2)

09.06.23 「あつい」と「わからない」

09.06.24 ぼーっとする、ゆえに我あり

09.06.25 時の神＝あわいわあい (1)

09.06.25 時の神＝あわいわあい (2)

09.06.26 こんなことを書きました (その 11)

第 7 卷

09.06.27 空前の「純文学」ブーム

09.06.28 「時間」と「とき」

09.06.29 「揺らぎ」と「変質」

09.06.30 不自由さ (1) 2010 年

09.06.30 不自由さ (2) 2010 年

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)

09.07.02 うたう

09.07.03 まつはいつまでも、まつ

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (1)

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (2)

- 09.07.05 マンネリズム・マニエリズム
- 09.07.06 こんなことを書きました（その 12）
- 09.07.07 いみのいみ
- 09.07.08 何となく
- 09.07.14 記述＝奇術＝既述
- 09.07.15 3人のゲンちゃん
- 09.07.16 あつきのせい？
- 09.07.17 システムと有効性と比喻
- 09.08.01 気になるというか
- 09.08.02 もう1つ気になることが
- 09.08.03 さらに気になることが
- 09.08.04 できないのにできる
- 09.08.05 何もないところから
- 09.08.06 めちゃくちゃこじつけて
- 09.08.07 銃が悪いのではなく
- 09.08.08 どうにもならないときには
- 09.08.25 こんなことを書きました（その 13）

第8巻

- 09.08.11 たわむれる
- 09.08.12 なつかれる

09.08.13 げん・幻 -1-

09.08.14 げん・幻 -2-

09.08.15 げん・幻 -3-

09.08.16 げん・幻 -4-

09.08.17 げん・幻 -5-

09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-

09.08.20 げん・幻 -8-

09.08.21 げん・幻 -9-

09.08.22 げん・幻 -10-

09.08.30 こんなことを書きました（その 14）

09.08.23 げん・言 -1-

09.08.24 げん・言 -2-

09.08.26 げん・言 -3-

09.08.27 げん・言 -4-

09.08.28 げん・言 -5-

09.08.29 げん・言 -6-

09.08.31 げん・言 -7-

09.09.01 げん・言 -8-

09.09.XX げん・言 -9-

09.09.XX げん・言 -10-

09.09.XX げん・現 -1-

09.09.XX げん・現 -2-

09.09.XX げん・現 -3-

09.09.XX こんなことを書きました（その 15）

09.09.04-09.09.26 小品集（1）

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

第9巻

09.09.04 お墓参り

09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）

09.11.13 代理だけの世界（1）

09.11.14 代理だけの世界（2）

09.11.15 代理だけの世界（3）

09.11.19 代理だけの世界（4）

09.11.27 1年前の記事を読んで

09.11.28 今、考えていること

09.11.29 社会復帰はあきらめました

09.11.30 代理だけ

09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）

09.12.XX こんなことを書きました（その16）

09.12.02 でまかせ・いず・む

09.12.03 もてあそばれるしかない

09.12.04 わかるはわかるか

09.12.05 翻訳の可能性と不可能性

09.12.06 わかるという枠

09.12 07 わかるはわからない

09.12.08 わかるはプロセス

09.12.09 3つの枠

09.12.10 ちょっとないんですけど

09.12.11 あなたとは違うんです

09.12.XX こんなことを書きました（その17）

第10巻

09.12.06 ヒトいろいろ

09.12.07 信号としての石川君

09.12.08 コトバとチカラ

09.12.09 ごめんなさい

- 09.12.10 政治とは「分ける」こと
- 09.12.11 きな臭い話
- 09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて
- 09.12.09 続・社会復帰はあきらめました
- 09.12.10 ブログと心中？
- 09.12.11 よくないなあ
- 09.12.12 素面でいたい
- 09.12.13 儀式
- 09.12.14 爪を切る
- 09.12.15 わける（1）
- 09.12.16 わける（2）
- 09.12.XX こんなことを書きました（その18）
- 09.12.16 二句
- 09.12.19 ずらす
- 09.12.20 かえるのではなくてかえる
- 09.12.21 とりとめもなく
- 09.12.22 パラレル
- 09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）
- 09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）
- 09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（４）

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（５）

10.01.12 かえるはかえる

10.01.13 かえるにかえる

10.01.14 もどるにもどれない

10.01.15 け＝く

10.01.16 まことにまこと

10.01.17 まことはまことか（前半）

10.01.17 まことはまことか（後半）

10.01.18 本物の偽物（前半）

10.01.18 本物の偽物（後半）

10.01.19 からから

10.01.20 2010年1月20日にギャグる

10.01.21 こんなことを書きました（その19）

第11巻

10.01.22 夢の素（1）

10.01.23 夢の素（2）

10.01.24 夢の素（3）

10.01.24 夢の素（4）

- 10.02.02 うつせみのたわごと -1-
- 10.02.02 うつせみのたわごと -2-
- 10.02.03 うつせみのたわごと -3-
- 10.02.04 うつせみのたわごと -4-
- 10.02.06 うつせみのたわごと -5-
- 10.02.07 うつせみのたわごと -6-
- 10.02.08 うつせみのたわごと -7-
- 10.02.09 うつせみのたわごと -8-
- 10.02.10 うつせみのたわごと -9-
- 10.02.11 うつせみのたわごと -10-
- 10.02.12 うつせみのたわごと -11-
- 10.02.13 うつせみのたわごと -12-
- 10.02.14 うつせみのたわごと -13-
- 10.02.15 うつせみのたわごと -14-
- 10.02.16 「外国語」で書くこと
- 10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える
- 10.02.19 動詞という名の名詞
- 10.02.21 名詞という名の動詞（前半）
- 10.02.21 名詞という名の動詞（後半）
- 10-02-25 不思議なこと

10.02.27 はかる -1-

10.02.28 はかる -2-

10.02.XX はかる -3-

10.02.XX はかる -4-

10.03.XX こんなことを書きました (その 20)

10.03.04 代理としての世界 -1-

10.03.05 代理としての世界 -2-

10.03.06 代理としての世界 -3-

10.03.07 代理としての世界 -4-

10.03.09 代理としての世界 -5-

10.03.11 代理としての世界 -6-

代理としての世界 (改訂版) (1)

代理としての世界 (改訂版) (2)

代理としての世界 (改訂版) (3)

代理としての世界 (改訂版) (4)

奥付

奥付

うつせみのあなたに 第10巻

<https://puboo.jp/book/17490>

著者：星野廉

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/17490>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/17490>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

うつせみのあなたに 第10巻

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
